

平成 29 年度

文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

幼稚園における指導の評価の在り方に関する研究

平成 30 年 3 月

国 立 大 学 法 人 鳥 取 大 学

協 力 : 全 国 国 立 大 学 附 属 学 校 連 盟 幼 稚 園 部 会

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による受託業務として、国立大学法人鳥取大学が実施した平成 29 年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果をとりまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

はじめに

私たちは、今年度、文部科学省初等中等教育局幼児教育課の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託を受けることとなりました。調査研究課題は、「幼稚園における指導の評価の在り方に関する研究」です。本園は今年度で創立 50 周年を迎え、記念行事の実施や記念誌の作成など、同時並行で例年のない取り組みを進めなければならず、多少の不安を抱えながらのスタートでした。しかしそんな中でも、むしろ周年事業を記念する意義ある研究になると考えたのでした。

平成 29 年 3 月には幼稚園教育要領が改正告示され、翌年 4 月の施行を待つ時期でした。新しい幼稚園教育要領は、ねらいや内容に大きな変更はなく、これまでのものを引き継いでいます。その点で、私たち幼稚園現場の者は、以前から地道に取り組んできた教育活動に自信をもって、さらに質の向上を目指したいと思います。しかし一方、「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」が示され、それを具体的にどのように評価するかという課題も生まれていました。

要領自体に「他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によってとらえるものではない」とあっても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10 の姿）が、本来の趣旨から外れて、一人一人の幼児の成長を小学校前に評定する指標にされるのではないかと心配する声が聞かれます。このような状況を踏まえて、私たちは、幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の在り方について明らかにする必要性を感じていました。

それは、幼稚園と小学校の円滑な接続を求める社会的な期待に応えるものになりますし、また、要領と同時に改正された保育所保育指針と幼保連携型認定こども園教育・保育要領でも「10 の姿」などが共有されていることから、他の幼児教育施設でも参考になるものと考えました。責任の重さを感じながらも、その社会的な意義の大きさに鑑みて、真摯に取り組んで参りましたことをご理解いただければ幸いです。

研究の進行と報告のまとめにあたっては、名古屋学芸大学教授・津金美智子先生、文部科学省初等中等教育局視学官・湯川秀樹先生、同じく幼児教育課指導係長・桑田美季様、そして、中国・四国地区をはじめとする全国の国立大学附属幼稚園副園長の皆様、具体的な事例の収集にご尽力いただいた現場の先生方など、多くの方々のご指導とご支援をいただきました。

この報告書にお示しした成果が、少しでも全国の幼児教育現場の先生方のお役に立つことを心から願っております。

鳥取大学附属幼稚園
園長 塩野谷 齊

目 次

I	研究の目的と方法	
1	研究の背景	1
2	研究の目的と期待される効果	2
3	研究の方法	2
	(1) 事例収集と分析	2
	(2) 教育実践記録と学びの共有	2
	(3) 小学校教育との接続	2
II	研究の内容	
1	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からみる 指導の振り返りと改善	4
	(1) 事例収集の方法	4
	(2) 事例の収集結果	6
	(3) 発達区分に沿った事例におけるキーワードの分析	21
	(4) 発達区分に沿って整理した幼児の姿	31
	(5) 発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成	35
2	教育実践と学びの共有	42
	(1) 生活場面における事例の中の学び	42
	(2) ドキュメンテーションによる学びの共有	52
3	指導計画の見直し	64
4	小学校教育との接続のための取組	66
	(1) 鳥取大学附属学校部教員研修会・幼小連携部会	66
	(2) 5歳児と小学校1年生の学びのつながりを 秋の遊びを通して考える	67
	(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有と 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に向けて	71
5	幼児理解に基づいた評価に向けて	72
III	研究の成果と課題	
1	研究の成果	76
2	今後の課題	77

IV 実践記録（抜粋） 78

番号	園名	事例名	期	資料頁
4	弘前大学教育学部附属幼稚園	一本橋を渡りたいな	I	80
5	弘前大学教育学部附属幼稚園	雪だるまを作ろう	II	81
6	弘前大学教育学部附属幼稚園	秘密基地を作ろう	III	82
36	群馬大学教育学部附属幼稚園	ツゲの木の中で	I	83
37	群馬大学教育学部附属幼稚園	運動会みたいな白い線引きたい	II	84
38	群馬大学教育学部附属幼稚園	チアリーディング	III	85
48	鳴門教育大学附属幼稚園	カタツムリさがし	I	86
49	鳴門教育大学附属幼稚園	こうやって逃げるといいよ	II	87
50	鳴門教育大学附属幼稚園	もりのレストラン	III	88
54	京都教育大学附属幼稚園	運転席に乗りたい！	I	89
56	兵庫教育大学附属幼稚園	大丈夫やからな、僕が付いて行ってあげる	II	90
57	神戸大学附属幼稚園	うさちゃんのお世話の仕方を教えてもらったよ	III	91
83	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	金沢の旗は？	I	92
84	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	色々な国旗を描こう	II	93
85	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	イギリスってどこにあるの？	III	94
89	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	たまごの正体は何か？	I	95
90	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	スティラコサウルスのトゲは何本か！？	II	96
91	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	どんぐり村の迷路 大作戦	III	97
104	茨城大学教育学部附属幼稚園	雲が黒くなったよ	I	98
105	茨城大学教育学部附属幼稚園	トンボやメダカの住む池になるといいね	II	99
106	茨城大学教育学部附属幼稚園	ヒマワリの種	III	100
121	山口大学教育学部附属幼稚園	飴屋さんに来てください	I	101
122	山口大学教育学部附属幼稚園	水族館を開いて他のクラスの友達を呼ぼう	II	102
123	山口大学教育学部附属幼稚園	お芋レストランをしよう	III	103
124	鳥取大学附属幼稚園	せんせいパーティーしよう	I	104
125	鳥取大学附属幼稚園	どっちがいい？	II	105
126	鳥取大学附属幼稚園	なんだか多いなあ	III	106
127	鳥取大学附属幼稚園	あんな、幼稚園には園長先生がいて・・・	接続	107
141	愛知教育大学附属幼稚園	入院です	I	108
142	愛知教育大学附属幼稚園	七夕会で出し物をしよう	II	109
143	愛知教育大学附属幼稚園	鳴ったらみんなで倒れるってことにしよう	III	110
144	愛知教育大学附属幼稚園	かぜを うけて はしれ ウインドカー	接続	111

※本報告書付属のCD-ROMには、本研究に関わる全ての事例を保存しています。
6から12頁の一覧表を参考に各事例をご覧ください。

V 参考文献 112

I 研究の目的と方法

1 研究の背景

本園は、平成 22 年度から 24 年度にかけて「学びをつなぐカリキュラムの創造」、引き続き 25 年度から 27 年度にかけて「学びをつなぐカリキュラムの創造Ⅱ」を主題にして、幼児の遊びの充実を図る実践研究を積み上げてきた。その中で、「遊びの充実」とは何か、具体的な幼児の姿や教師の援助及び環境の構成の在り方を探ってきた。

さらに、入園から修了までの 3 年間の学びのつながりを意識しながらカリキュラムの見直しを図った。教育課程に「(その時期に) 大切にしたい心の動き」を加えたことにより、幼児の内面にも目を向けた特色あるカリキュラムとなった。

また、3 歳から小学校 1 年生 1 学期までの「育てたい力の系統表」を作成し、小学校との接続を意識した指導を共通理解するための手立てとした。昨年度は、『幼児期の学びをつなぐ～活動と言葉に着目して～』を主題に、これまでの研究を踏まえて、幼児の主体的な活動が展開されるプロセス、特に「活動」と「言葉」に着目して、遊びのつながりと学びについて事例から検討し、遊びの充実を図ってきた。一貫して「遊びは学びである」と捉え、遊びの中にある学びを探ると共に、幼児期に培った学びを小学校教育へつなげていくことをねらって実践研究に取り組んできた。

鳥取大学附属学校園では、今年度から共通した研究テーマ「いま伸びる力とあと伸びる力を育てる」のもと、幼稚園から中学校まで 12 年間の一貫型教育を目指そうとしている。その際、幼児期の学びを小学校へどうつなぐかということ、幼児期の学びを小学校と共有することが大きな課題であると捉えている。

本園では、平成 21 年度から 26 年度にかけて、幼稚園で培った力が小学校でどのように発揮されているのかを検証するため、「課題解決の力」を視点にして、卒園児の追跡調査を実施した。その際に作成した「チェックリスト」と「育てたい力の系統表」を、改訂された幼稚園教育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や 5 領域の内容と照らし合わせたところ、ほぼ重なることを共通理解した。本園のこれまでの実践研究を基に、より具体的な幼児の学びの姿や力を明らかにすることが、研究の目的でもある評価の在り方につながっていくものと考えている。

昨年度、神戸大学附属幼稚園が全国の国立大学附属幼稚園の協力を得て取り組んだ「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究」も踏まえ、幼児一人一人の発達理解に基づいた評価の在り方と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校と共有する方法を検討して、幼児教育と小学校教育との接続を図りたい。

平成 29 年 3 月に改訂された幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力が明確化された。「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の 3 つを資質・能力として示し、幼稚園教育要領の第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むことを示した。また、第 1 章総則には小学校教育との円滑な接続として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）を小学校の教師と共有するなど連携をし、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとすることを示した。これは、第 2 章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するもの

であることとされている。実際の指導では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標でないことや、個別に取り出されて指導されるものではないこととある。また、5歳児だけでなく、3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要があるとされている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有しながら、幼児理解に基づいた評価の在り方を探りたいと考える。

なお、この研究で述べる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、次頁に示す。

2 研究の目的と期待される効果

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児一人一人の発達の実理解に基づいた評価の在り方について明らかにすることを目的とする。

また、次に示す具体的な成果が期待されると考える。

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる3歳児、4歳児の姿とこの時期にふさわしい指導の積み重ねの過程を具体的な事例とともに明らかにすることができる。
- ② 幼児一人一人の発達の理解に基づいた幼児期の評価方法を示すことができる。
- ③ 幼児期にふさわしい指導の記録の作成及び小学校へ学びを伝える方法を示すことができる。
- ④ 幼稚園等と小学校の教員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有することで、幼児教育と小学校教育の接続を図ることができる。
- ⑤ 研究の成果をまとめ、配布することで、改訂幼稚園教育要領に示された幼児期の評価の在り方や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に向かう指導の在り方を全国の附属幼稚園等に広めることができる。

3 研究の方法

本研究においては、次の取組を実施する。

(1) 事例収集と分析

全国国立大学附属幼稚園の事例をもとに、幼児の発達区分に沿って幼児理解、教師の援助、環境の構成の特徴を明らかにし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる教師の指導の評価（振り返り）と幼児の内面の評価の参考となるものを示す。

(2) 教育実践記録と学びの共有

先行研究で示された様式を活用し、事実と解釈を書き分けた実践記録、ドキュメンテーションから幼児の学びを明らかにし、発達の特徴や学びのつながりを共有する。

(3) 小学校教育との接続

本園5歳児と附属小学校1年生との「附小交流」（年4回）、附属学校園で取り組む教科・領域等別小部会の一つである幼小連携部会や公開研究会等で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有したり、遊びを可視化した「ドキュメンテーション」を活用したりして、小学校教育との円滑な接続を図る。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(1) 健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
(2) 自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
(3) 協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
(5) 社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
(6) 思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考え方があることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
(7) 自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
(9) 言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
(10) 豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

Ⅱ 研究の内容

1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からみる指導の振り返りと改善

本調査では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる3歳児、4歳児の姿と各時期にふさわしい指導の積み重ねの過程を具体的な事例とともに明らかにしようと考えている。そのため、発達区分ごとに事例を取り上げ、その事例から抽出したキーワードを基に、幼児理解、教師の援助、環境の構成の特徴を明らかにしていく。そうすることで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の教師の指導の評価(振り返り)と幼児の内面の評価の参考となるのではないかと考えた。さらに、小学校接続期の姿についても取り上げていくことで、幼児教育と小学校教育の接続の重要性が明確になると期待される。

本研究において、全国の国立大学附属幼稚園より事例提供による研究協力を得ている。平成28年度、神戸大学附属幼稚園が全国の国立大学附属幼稚園の協力を得て取り組んだ「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究」では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目を全て網羅するように分担し、事例が提供されている。そこで、本研究では、28年度に提供した事例及び、その姿について全ての発達区分(4期)の事例提供を得て、幼児理解、教師の援助、環境の構成における特徴と横のつながりを捉えることにした。そして、全国の国立大学附属幼稚園に、分担した10の姿が特徴的に見られる事例の提供を得ることとした。しかし、10の姿は関連しており、事例の中には複数の項目が含まれている。そのため、キーワードは10の姿と関係するものの他、直接関係はないが発達段階の特徴と思われるものをあげることにした。

この事例の書式で捉えた幼児の学びの姿は、具体的な事実に基づいて捉えた姿であるため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目と照らし合わせることができる。また、事例では、教師の援助や環境の構成についても事実に基づいて記述している。そのため、本調査研究の目的の一つである「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる3歳児、4歳児の姿とこの時期にふさわしい指導の積み重ねの過程を具体的な事例と共に明らかにすることができると思った。

以下にその収集と分析の具体的な手続きを示す。

(1) 事例収集の方法

① 発達区分について

幼児の発達区分は、全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会による平成21年度「協同して遊ぶことに関する指導の在り方」を参考に、幼児期から接続期を以下の4期に分け、それぞれの時期の事例を収集することにした。そして、発達区分(接続期については事例がある場合)ごとに1つずつ事例の提供を得た。

第Ⅰ期 [3歳児入園～4歳児前半]	初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期
第Ⅱ期 [4歳児後半～5歳児前半]	遊びが充実し自己を発揮する時期
第Ⅲ期 [5歳児後半]	人間関係が深まり学び合いが可能となる時期
接続期 [小学校1年生]	新しい環境に適応し人やものとのかかわりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期

③ 事例の分析方法

収集した事例をもとに、次の分析手順に沿って分析を行った。

手順 1：収集事例を 10 の姿ごとに幼児理解のキーワードを抽出してまとめ、分析する。

手順 2：抽出したキーワードをグループ化(気づく 感じる 考える 行動する)し、幼児の発達の特徴を明らかにする。

手順 3：考察で述べられている幼児理解の記述について、10 の姿ごとに発達区分に沿った特徴をまとめ、同じキーワードの中で、どのように姿が変化していくのか明らかにする。

手順 4：教師の援助、環境の構成について、発達区分に沿った特徴をまとめる。

手順 5：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の教師の指導の評価(振り返り)と幼児の内面の評価の参考となる教師の援助、環境の構成について考察する。

(2) 事例の収集結果

国立大学附属幼稚園 48 園より、148 事例提供された。それらの事例の姿と事例のタイトルについては、以下に示した通りである。11 頁より、各項目 1 事例ずつ挙げる。なお、他の事例については、巻末の実践記録(抜粋)並びに付属の CD-ROM に添付しているので参照されたい。

① 健康な心と体

「健康な心と体」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第 I 期	第 II 期	第 III 期	接続期
1	岩手大学教育学部附属幼稚園	橋の下にはトロールがいる	○			
2	岩手大学教育学部附属幼稚園	『ウヒアハとねこ』のイメージで助け鬼		○		
3	岩手大学教育学部附属幼稚園	海賊船ごっこ			○	
4	弘前大学教育学部附属幼稚園	一本橋を渡りたいな	○			
5	弘前大学教育学部附属幼稚園	雪だるまを作ろう		○		
6	弘前大学教育学部附属幼稚園	秘密基地を作ろう			○	
7	福島大学附属幼稚園	プリキュアでジャンプ	○			
8	福島大学附属幼稚園	平均台の上から投げよう		○		
9	福島大学附属幼稚園	鉄棒ができるようになりたい			○	
10	山形大学附属幼稚園	畑の土を元気にしよう!	○			
11	山形大学附属幼稚園	さつまいもへんしんシリーズ		○		
12	山形大学附属幼稚園	お父さん、お母さん、ありがとう!			○	
13	山形大学附属小学校	みのり会食で、なかよしへの第一歩				○
14	北海道教育大学附属函館幼稚園	ていねいに歯をみがこう	○			
15	北海道教育大学附属函館幼稚園	手あらい名人になろう!		○		
16	北海道教育大学附属函館幼稚園	すすんで歯みがき 毎日ピッカピカ			○	
17	北海道教育大学附属旭川幼稚園	お山すべり	○			
18	北海道教育大学附属旭川幼稚園	川で歩くのって難しいね		○		
19	北海道教育大学附属旭川幼稚園	お城を作ろう			○	
20	宮城教育大学附属幼稚園	冬ともだち	○			
21	宮城教育大学附属幼稚園	寒い日も元気に外遊び		○		
22	宮城教育大学附属幼稚園	寒さに負けない元気な子			○	
23	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	お弁当にしよう(また幼稚園に来たときに遊べるといいな)	○			
24	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	よいしょ、よいしょ!	○			
25	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	今日は○○先生お願いします。		○		
26	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	次こっちだよ。はいどうぞ。			○	

② 自立心

「自立心」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第1期	第2期	第3期	接続期
27	東京学芸大学附属幼稚園	持ったままでいたい	○			
28	東京学芸大学附属幼稚園	「片付けなのに」「片付けたくない」		○		
29	東京学芸大学附属幼稚園	お世話はみんなでしたい			○	
30	千葉大学教育学部附属幼稚園	幼稚園好きになった！	○			
31	千葉大学教育学部附属幼稚園	負けてもいいんだよ		○		
32	千葉大学教育学部附属幼稚園	きっと成功するよね！			○	
33	埼玉大学教育学部附属幼稚園	カリンとり	○			
34	埼玉大学教育学部附属幼稚園	かたつむりの家		○		
35	埼玉大学教育学部附属幼稚園	忍者の『合い言葉』を作る			○	
36	群馬大学教育学部附属幼稚園	ツゲの木の中で	○			
37	群馬大学教育学部附属幼稚園	運動会みたいない線引きたい		○		
38	群馬大学教育学部附属幼稚園	チアリーディング			○	

③ 協同性

「協同性」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第1期	第2期	第3期	接続期
39	高知大学教育学部附属幼稚園	はい、ミミズあげる	○			
40	高知大学教育学部附属幼稚園	知ってたのかな		○		
41	高知大学教育学部附属幼稚園	勝ちたい思いが強くて			○	
42	香川大学教育学部附属幼稚園	ぼくもする	○			
43	香川大学教育学部附属幼稚園	射的づくり		○		
44	香川大学教育学部附属幼稚園	友達と共にサッカーを楽しみ、分かり合っていく			○	
45	愛媛大学教育学部附属幼稚園	電車ごっこ	○			
46	愛媛大学教育学部附属幼稚園	もっと驚かせようよ		○		
47	愛媛大学教育学部附属幼稚園	雨に強い家を作ろう			○	
48	鳴門教育大学附属幼稚園	カタツムリさがし	○			
49	鳴門教育大学附属幼稚園	こうやって逃げるといいよ		○		
50	鳴門教育大学附属幼稚園	もりのレストラン			○	

④ 道徳性・規範意識の芽生え

「道徳性・規範意識の芽生え」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
51	大阪教育大学附属幼稚園	いっしょに遊びたいけれど	○			
52	大阪教育大学附属幼稚園	言うたらあかん言葉を言うてしもた		○		
53	大阪教育大学附属幼稚園	逃げるためのいい方法があるよ			○	
54	京都教育大学附属幼稚園	運転席に乗りたい！	○			
55	滋賀大学教育学部附属幼稚園	おすし屋さんに来てもらおう		○		
56	兵庫教育大学附属幼稚園	大丈夫やかなら、僕が付いて行ってあげる		○		
57	神戸大学附属幼稚園	うさちゃんのお世話の仕方を教えてもらったよ			○	
58	奈良教育大学附属幼稚園	私、1回もしてない(漏斗から出る泥を手で受ける遊び)	○			
59	兵庫教育大学附属幼稚園	バトン渡したって		○		
60	奈良教育大学附属幼稚園	鬼ごっこのルールを考えよう			○	
61	奈良女子大学附属幼稚園	ほくに描かしてや				○
62	神戸大学附属幼稚園	折り紙で時計を作りたい	○			
63	京都教育大学附属幼稚園	気持ちよい園庭にするために		○		
64	滋賀大学教育学部附属幼稚園	Sちゃんが作ったやつ、どうする？			○	
65	神戸大学附属幼稚園	ジェットジムに登りたい	○			
66	奈良女子大学附属幼稚園	4階建てにしよう		○		
67	奈良女子大学附属幼稚園	『病院』グループの役割を決めよう			○	

⑤ 社会生活との関わり

「社会生活との関わり」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
68	福井大学教育学部附属幼稚園	おじいちゃん、おばあちゃんと遊ぼう	○			
69	福井大学教育学部附属幼稚園	おじいちゃん、おばあちゃんと遊ぼう		○		
70	福井大学教育学部附属幼稚園	おじいちゃん、おばあちゃんと遊ぼう			○	
71	新潟大学教育学部附属幼稚園	園開放日には 大勢のお客さま	○			
72	新潟大学教育学部附属幼稚園	成功させよう合同応援		○		
73	新潟大学教育学部附属幼稚園	ありがとう おめでとう 中学3年生のお兄さん・お姉さん			○	
74	上越教育大学附属幼稚園	お花見に出かけよう	○			
75	上越教育大学附属幼稚園	修了証書をつくろう		○		
76	上越教育大学附属幼稚園	武将になりたい			○	
77	信州大学教育学部附属幼稚園	新幹線に乗ってピクニックに行こう	○			
78	信州大学教育学部附属幼稚園	友達と花火大会をしよう		○		
79	信州大学教育学部附属幼稚園	図鑑で調べるっていいな			○	
80	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	観光バスに乗って自然公園へ	○			
81	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	学園バスに乗ってもほりへ		○		
82	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	美術館へでかけよう			○	
83	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	金沢の旗は？	○			
84	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	色々な国旗を描こう		○		
85	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	イギリスってどこにあるの？			○	

⑥ 思考力の芽生え

「思考力の芽生え」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
86	長崎大学教育学部附属幼稚園	離して！離して！	○			
87	長崎大学教育学部附属幼稚園	これ、何？		○		
88	長崎大学教育学部附属幼稚園	木登り			○	
89	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	たまごの正体は何か？	○			
90	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	ステイラコサウルスのトゲは何本か！？		○		
91	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	どんぐり村の迷路 大作戦			○	
92	大分大学教育学部附属幼稚園	ステージづくり	○			
93	福岡教育大学附属幼稚園	黄金の滝で遊ぼう(築山の川づくり)		○		
94	大分大学教育学部附属幼稚園	ツクシパーティーをしよう			○	
95	宮崎大学教育学部附属幼稚園	泥団子づくり	○			
96	宮崎大学教育学部附属幼稚園	転がしてみよう		○		
97	宮崎大学教育学部附属幼稚園	自分の考えたことを話し合いながら遊びをつくる			○	
98	熊本大学教育学部附属幼稚園	水を入れたらいいんじゃない？	○			
99	熊本大学教育学部附属幼稚園	新聞紙を壁のようにつないで暗くしよう		○		
100	熊本大学教育学部附属幼稚園	ソリが滑るように、川に橋を架けるぞ			○	
101	佐賀大学教育学部附属幼稚園	水鉄砲「タコさんに当てる！」	○			
102	佐賀大学教育学部附属幼稚園	サラ粉でお料理		○		
103	佐賀大学教育学部附属幼稚園	転がしゲーム作り			○	

⑦ 自然との関わり・生命尊重

「自然との関わり・生命尊重」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
104	茨城大学教育学部附属幼稚園	雲が黒くなったよ	○			
105	茨城大学教育学部附属幼稚園	トンボやメダカの住む池になるといいね		○		
106	茨城大学教育学部附属幼稚園	ヒマワリの種			○	
107	お茶の水女子大学附属幼稚園	繰り返し出かけたお山で	○			
108	お茶の水女子大学附属幼稚園	イチョウのはっぱのまくらやさん		○		
109	お茶の水女子大学附属幼稚園	夏ミカンやさんと種まきコーナー			○	
110	山梨大学教育学部附属幼稚園	カエルが白くなってる！	○			
111	山梨大学教育学部附属幼稚園	「仲間はずれ」のチューリップをなくしたい		○		
112	山梨大学教育学部附属幼稚園	『ゴジラ』っていう種売ってたよ！			○	
113	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	ぼくもやる！！	○			
114	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	ヒヨドリの卵を発見！		○		
115	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	どっちの金魚が幸せなんだろう？			○	

⑧ 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
116	島根大学教育学部附属幼稚園	10回混ぜたら、ジュースができたよ	○			
117	島根大学教育学部附属幼稚園	「同じ」っていいね！うれしいね！	○			
118	島根大学教育学部附属幼稚園	『カラオケ積木』でいろいろ作れるよ		○		
119	島根大学教育学部附属幼稚園	どんぐりルーレットを作ってみない？			○	
120	島根大学教育学部附属幼稚園	ドングリスライダーを作ろうよ			○	
121	山口大学教育学部附属幼稚園	飴屋さんに来てください	○			
122	山口大学教育学部附属幼稚園	水族館を開いて他のクラスの友達を呼ぼう		○		
123	山口大学教育学部附属幼稚園	お芋レストランをしよう			○	

⑨ 言葉による伝え合い

「言葉による伝え合い」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
124	鳥取大学附属幼稚園	せんせいパーティーしよう	○			
125	鳥取大学附属幼稚園	どっちがいい？		○		
126	鳥取大学附属幼稚園	なんだか多いなあ			○	
127	鳥取大学附属幼稚園	あんな、幼稚園には園長先生がいて…				○
128	広島大学附属幼稚園	氷作るの、ぐちゃぐちゃにされたくない	○			
129	広島大学附属幼稚園	飼育当番の引き継ぎ		○		
130	広島大学附属幼稚園	お客さんに来てほしいな			○	
131	広島大学附属三原幼稚園	おおかみと7ひきのこやぎごっこ	○			
132	広島大学附属三原幼稚園	みんなおるけん無理だったんじゃない？		○		
133	広島大学附属三原幼稚園	機を織るってどうするん？(昔話「つるにようぼう」の劇遊びより)			○	
134	広島大学附属三原小学校	あいうえおであそぼう(スタートカリキュラム～遊びと学習をつなぐ)				○
135	岡山大学教育学部附属幼稚園	忍者になろう(忍者でござる)	○			
136	岡山大学教育学部附属幼稚園	ザクろっていうんだ		○		
137	岡山大学教育学部附属幼稚園	ドングリの名前はなんだろう			○	

⑩ 豊かな感性と表現

「豊かな感性と表現」に関する事例の一覧は次のとおりである。

番号	園名	事例名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	接続期
138	静岡大学教育学部附属幼稚園	イチヨウのはっぱやさん	○			
139	静岡大学教育学部附属幼稚園	お花の船		○		
140	静岡大学教育学部附属幼稚園	見て見て！大道芸ごっこ			○	
141	愛知教育大学附属幼稚園	入院です	○			
142	愛知教育大学附属幼稚園	七夕会で出し物をしよう		○		
143	愛知教育大学附属幼稚園	鳴ったらみんなで倒れるってことにしよう			○	
144	愛知教育大学附属幼稚園	かぜを うけて はしれ ウインドカー				○
145	三重大学教育学部附属幼稚園	がらがらどんをしたいな	○			
146	三重大学教育学部附属幼稚園	見て！私たちのポーズ！		○		
147	三重大学教育学部附属幼稚園	劇遊び『もたらう』キジの動きを表現しよう～Aの姿を中心として～			○	
148	三重大学教育学部附属幼稚園	うちゅうでみつけた！ぺったんぼし！～スタンピングで表現しよう～				○

「平均台の上から投げよう」

自由な形態の遊びで①体を動かして遊べるようにテラスに巧技台の平均台を出しておくと、幼児たちは繰り返し平均台を渡って遊ぶ姿が見られた。①うまく渡れるようになると、たまたま置いてあった的当ての的に向かって平均台の上からお手玉やボールを投げる遊びが始まり、足元のバランスをとりながら的に当てようとし始めた。事前の的に当ての遊びでボールを使っていたこともあり、テラスには、②お手玉の他に様々なボール（ドッジボール用ボール、大玉、ビーチボール、ソフトキャンディーボールなど）が置いてあった。使っていた平均台が桃色（年少組はももぐみでクラスカラー）と緑色（年中組がみどりぐみでクラスカラー）で、偶然的までの距離が近いところに桃色の平均台、少し離れたところに緑色の平均台が設置されていた。Aは桃色の平均台からボールを投げ、①「ももぐみ（年少組）で当たった(的が倒れた)」と言った。Aは次に緑色の平均台の上からボールを投げて「あ、①みどりぐみ（年中組）は惜しかった～(的には当たったが倒れなかった)」と言い、①お手玉に持ち替えて的に向かって投げ、「お手玉だと当たった！」と教師に言ってきた。②教師は「本当だ。お手玉だとみどりぐみからでも倒れたね」と認めると、Aが「きぐみ（年長組、黄色がクラスカラー）はないの？」と言ってきた。黄色い平均台はなかったため、教師が②更の的に離れた場所の平均台に黄色いビニールテープを貼ってやると、①「今度は、きぐみ（年長組）からやるぞ！」とAがお手玉を投げ始めた。なかなか当たらなかったが、繰り返し挑戦していた。

①Aの姿を見て、周囲の幼児たちも、思い思いにお手玉やボールを手に桃色の平均台に上がり、的に当てを始めた。それぞれ①自分なりに投げる距離やボールを替えながら、試したり挑戦したりしている。①Bはドッジボール用のボールを持って投げたが、幼児が投げるには大き過ぎたのか、うまく投げられなかった。①Cは、大玉を持ち上げて平均台に上がったが、バランスを崩して投げられなかった。①Bがソフトキャンディーボールを両脇に抱え、平均台の上から投げると的に当たった。しかし、ボールが軽いためか当たっても的に倒れなかった。①Cがお手玉をたくさん抱えて平均台に上がり、続けて投げたお手玉が的に当たり、「やったあ！」と喜んだ。Bもお手玉を投げて的に当たり、「今度はみどりぐみからやろう」とお手玉を手に緑色の平均台に上がった。



考察（キーワード）

①幼児理解（少し難しいことに挑戦、試す、自発性、意欲、達成感）

この時期の幼児は、難し過ぎてできた喜びが味わえないと、つまらなくなつて遊びが続かなくなってしまうが、同時に「少し難しいことに挑戦したい」という思いもあるようだ。少し難しいことは個によって異なるため、自分なりの難しさを選べる環境であったことが、やってみようと思う気持ちや繰り返し挑戦する姿につながっている。また、友達や教師の姿から刺激を受け、自分なりに考えたり試したりしている。


②援助のポイント（幼児の姿を認める、試行錯誤できる場と時間の保障）

自由な形態の遊びの中で、平均台をただ渡るだけではなく、平均台の上からバランスをとって的に当てをするなどの遊び方を考え出したり、投げる物は何が適しているかを自分なりに試したりしている姿を認め、幼児が試したり挑戦したりできる場や物と時間を保障する。

③環境の構成のポイント（体を動かせる場の設定、環境の再構成）

教師が設定した体を動かせる場や物に関わって遊ぶ幼児の姿から、イメージや遊びが楽しくなるアイデアなどを読み取り、場を整えたり再構成したりする。

（事例提供 福島大学附属幼稚園）

自立心			
2017年4月～6月	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「幼稚園好きになった！」			
4月27日			
<p>①Aが大泣きして登園してきた。教師は保護者と離れて泣くのが落ち着いた後、入室して②おもちゃのトラックを走らせているAへ「Aちゃんは乗り物が好きなんだね」と声をかける。すると①Aは「A、寂しくなっちゃった」と言う。③教師は「そうだよね」と言っ</p> <p>てAの隣にしゃがんで肩をさすり、スキンシップをとりながら「頑張っ</p> <p>て来て偉かったね。よかったー！来てくれて。Aちゃんがお休みだと、先生もAちゃんに会えなくて寂しいからさ」と話しかける。すると①少しづつAの表情が緩んできた。Aは身支度が途中であったため、教師は登園帽子をトラックに乗せて自分のロッカーまで運ぶことを提案する。Aは嬉しそうに笑みを浮かべて帽子を運んでいった。</p>			
5月12日			
<p>①前日まで毎日大泣きして登園していたA。この日は泣かず、②マテバシイの茶色い葉を6枚ほど持って登園してきた。①②Aは教師に「これ集めたんです。電車の切符」と言って葉を見せる。その言葉に教師は「電車の切符なんだね。先生たちに配ってあげようか」とAに目線を合わせて話す。Aは「うん。お友達にも配る！」と言うので、教師は保護者と一緒に「優しいね」とAの思いを受け止めた。その後、Aは泣かずに自分から保護者と別れると、③「警備のおじさんがいるところで（葉を）集めたの」と言いながら他の教師にも葉を見せてまわる。④他の教師も「たくさん見つけたね。今日も元気に来てくれてよかった！嬉しいな」と声をかける。すると、①Aは満足そうにして保育室に入っていった。</p>		6月16日	
<p>遊びの片付けが終わりランチコーナーに②集まる時間。①Aは「今日、幼稚園（時間が経つのが）早かった」と教師に話しかける。この日は半日保育でお弁当がない日である。教師は「水遊びもやったしね。今日おやつの日（半日）だし」と言うと、Aは「明日は長い？」と聞く。教師は「明日は休みだよ」と伝えると、それを聞いたAははっとした表情を浮かべ「なんかさみしい」とつぶやく。その様子を見て教師が「幼稚園来たい？」と尋ねると、Aは「うんA、幼稚園好きになった！」と言う。③教師は思わず「ええ！嬉しいなあ！Aちゃんがそんな風に言ってくれるなんて！」と言って喜ぶと、Aも笑顔になり、他の教師にも幼稚園が好きになったと伝えに行く。他の教師も同様に喜ぶと、Aは「A、もう泣かないで（幼稚園に）来られるしね！」と誇らしそうな笑みを浮かべていた。</p>			
考察（キーワード）			
<p>①幼児理解(安心・安定、信頼をもつ、伝えたい、自発性・能動性、共有、自信) 幼稚園での集団生活には不安を感じ、保護者と別れるのに寂しさを感じている。泣くことで思いを表現するが、気持ちが落ち着くと言葉で伝えることができる。乗り物に大変興味があり、教師と乗り物の話をする事で気持ちが落ち着く。教師とつながりを感じ、幼稚園が好きな場になったことを共に喜ぶことを通して、不安を乗り越え充実感や自信をもっている。</p>			
<p>②援助のポイント(気持ちを受け止める、共感する、喜びを伝える、信頼感をもてるようにする) Aの気持ちを受け止めて共感した上で、教師もAに会えた喜びを伝えることで、Aが教師に信頼感を持ち、園で安心して過ごせるようにしている。このような援助を繰り返し、Aが安心して登園する姿につながっている。</p>			
<p>③環境の構成のポイント(身近に感じられるもの、教師の存在、ゆったりと話ることができる時間) Aが興味のある乗り物の玩具が用意されている。また見つけたものを「見せたい」と思える教師の存在やゆったりと話ができる時間があつた。幼児が身近に感じられるものや親しみを感じられる教師の存在により、幼稚園生活に対して安心感をもてるようにしている。</p>			

(事例提供 千葉大学教育学部附属幼稚園)

協同性

2016年11月25日(金)

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「雨に強い家を作ろう」

2週間ほど前から、Aたち数名が④保育室横園庭の大型遊具のそばに、大きい段ボールで家を作り、中に入ったり出たりして遊んでいた。

ある小雨の日、家は雨にぬれてぼろぼろになってしまっていた。それを見つけたAが④「雨でこれ、壊れてしまった。やっぱり段ボールはだめだね」と言うと④周囲の幼児も「何で作ればいいかなあ」「うんと、石か木だね」と話し始めた。教師は「使ってもいいよ」と④伐採したばかりのケヤキの木を積んでいる所を指差した。



Aたちは「わあ、これならすごいのが作れるね」と喜んだが④木を持ってうろうろし、段ボールの家の近くで、どこにどう置こうかしばらく悩んでいた。④教師は「木と一緒に運んであげるね」と大型遊具の隙間に木を差し込むように立てかけて置いた。それを見たAは④「あ、そうだ、いいこと考えた」と教師と同じように立てかけていった。通りがかりにその様子を見かけたBが、「わあ、何作りよん？」と言うと「雨にぬれてだめになったから、雨に強い家を作るんよ」とAは答えた。するとBは「ぼくもやる」と張り切って参加した。④教師はガムテープやひもを大型遊具の近くに用意し、木が倒れないようにそっと支えた。Aが④「先生、ガムテープは雨にぬれると使えんよ」と言うとBも「うん、そうだよ。④今度は雨でも大丈夫な家にするよ。だからガムテープはだめよ」と同調した。

参加する幼児が増え、④みんなで次から次へと木を運んできて立てかけると、遊具が少しずつ木で囲まれて家が大きくなっていった。さらに別の幼児たちが来て手伝うようになってきたところで、片付けの時間となった。「ええ、今日はこれで終わり？お休みの日にこっそり来て作りたいよ」と、Aたちはまだ続けたそうにしていた。



次の週初め、木で囲まれた家は寒いので、Aがポリ袋を貼ることを提案した。その数日後には、14名が家作りに参加していた。④Cの「ぼくガムテープを切って、渡す人になるね」という声を聞いたDが「おい、こっちにガムテープをお願い」と伝えた。Cは④「分かった」と走って持って行った。その他にも、道具を手渡したり、段ボールを切ったりするなど、いろいろな役割が生まれ、しばらく作業が続いていった。

④教師は幼児が帰った後、木をしっかりと固定したり、作った物を保護できる大きなレジャーシートをかけたりして、幼児が安全に活動が続けられるようにした。

雨にぬれても大丈夫な家が出来上がると、幼児はこたつやみかんを持ち込んだり、4歳児を招待したりして楽しんでいた。

考察 (キーワード)

④幼児理解(気付く、考える、目的の共有、力を合わせる、仲間意識、役割分担)

自分たちが作った家が、雨によって壊れたことに気付き、家作りに適した素材について考えている。新しい素材を発見したことが、「できそうだ」という期待となり、その後の活動への意欲につながっている。雨に強い家を作るという目的が共有され、大勢で力を合わせて作る活動の楽しさを感じている。役割分担の必要性に気付き、全体を見ながら自分で役割を考え、必要なことを友達に伝えながら一緒に遊びを進めていこうとしている。

④援助のポイント(気付きを促す、物的援助、仲間の一員として一緒に遊ぶ、見守る)

悩んでいる姿を捉え、新しい素材(ケヤキ)に気付くように声をかけたり、置き方に気付くきっかけを作ったりして、自ら気付く喜びが味わえるようにする。必要な道具類はそばに置き、活動を中断せずいつでも使えるようにする。

④環境の構成のポイント(材料の準備、場の保障、安全性)

伐採されたケヤキが保育に生かせるように、長さ、置く場所を工夫した。幼児が安全に活動が続けられるように、危険な場所はないか確認し、補強したり、保護したりした。

(事例提供 愛媛大学教育学部附属幼稚園)

「鬼ごっこのルールを考えよう」

数人が集まって毎日のように鬼ごっこをしている。運動場の土山が安全地帯となっており、そこに登れば鬼にタッチされないルールである。この日は鬼が4人、逃げる幼児が3人で氷鬼を始めていたが逃げる幼児が1人やめる。A「逃げる方が1人（実際は2人）になった。もうちょっと増えてくれ」と言いながら安全地帯の土山から下りて走っていく。BCDEがAを追いかけ、BがAをタッチするがAは安全地帯の土山に登って行ってしまふ。Bは「ズルやで。タッチした」とAの服を引っばって山の下に戻そうとし、AはBにつかみかかる。B「タッチした！」A「ちょっと待ってって言ったやろ！」B「タッチしてから登ったらズルやろ。ちゃんと考える」と言い合いになる。①教師が話し合おうと近づくとAは「だって鬼が多すぎる。つかまるに決まってるやん」と泣きながら話す。Bは山の下あたりを指さしながら強い口調で「だってここら辺でタッチしたのに」と言う。Aは泣いて気持ちが高ぶり「鬼が多すぎる！」と主張するので②教師が「鬼が多かったのはわかったよ」と伝える。人数比を教師が尋ねると、逃げる方が2人、鬼が4人ということがわかった。しかしAはなおも「みんなが自分を追いかけた」と不満を言う。③Bは「でもタッチしてから（安全地帯に）登ったからズルはズルや！」と鬼ごっこの正当なルールを主張する。「ちょっと待ってって言ったやんか！鬼が多すぎるって言おうと思ってるん」と言うA。Bの勢いに押され気味のAに④教師が「それを言いたかってんな」と思いを受け止めるとAは大きく頷いた。



気持ちが落ち着いたAに教師がタッチされた場所を「この辺？」と聞くが首を横に振る。⑤FとDが近づいてきて「ここら辺やったらセーフ」「ここやったら絶対アウト」など安全地帯の境界線の話始める。興奮していたBも徐々に落ち着いてきた。⑥教師と一緒にやっていたCEも呼び寄せる。⑦「どこからが安全地帯なのかな？」と教師が疑問を投げかけると⑧Cが指で地面に線を引いた。「Aくんはどの辺でタッチされたのかな？」と教師が聞くと、⑨Dが「Aくんさ、さっき真ん中の線のところやったんちゃう？」とAの気持ちもBの主張も汲んだ様子で言う。⑩教師も「そうかもしれないね」と同調する。Aは黙ったままである。周りで聞いていた幼児たちは早く遊び始めたい様子である。⑪「じゃ、今からスタートする？」と気持ちを切り替えて始められるよう教師が促すとBは頷きながら足で先ほどの線を再び引く。参加しようとする幼児が増えてきて鬼と逃げる幼児に自然と分かれ、逃げる幼児12人は安全地帯の土山、鬼6人は山の下に集まる。⑫Bは両方を見比べて先ほどのAの主張を受けてか、人数の少ない鬼に加わる。⑬新たに始まったことで、様子を見ていたAも気持ちを切り替えることができたようで逃げるチームに入る。BがAをタッチする。⑭Aは止まって氷になる。周りに誰もいなくなっても止まったままで、タッチされたら止まるというルールを自ら守る。仲間にタッチしてもらい動き始めるが再びBにタッチされる。BはAのことを気にかけているようで何度もタッチして関わろうとする。⑮Aは助けってもらった直後にタッチされたが怒ることなく嬉しそうに止まり、ルールにそって遊ぶことを楽しみ始めた。

考察（キーワード）

①幼児理解（自己主張、話し合う、調整する、折り合いをつける、自分を振り返る）

鬼ごっこで、鬼と逃げる人の人数比を話し合ったり、逃げる人がタッチされない安全地帯の範囲を話し合ったりしたことで、自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりして、自分はどうであったかを振り返ることができ、その結果遊びのルールを守ろうとする姿につながった。

②援助のポイント（気持ちを受け止める、話し合いを進める、気付かせる、認める、励ます）

自分の思いを聞いてほしかったという理由からルールを守れなかった幼児の思いを教師が丁寧に聞き受け止める。ルールについて一緒に遊んでいた幼児と共に話し合うことで、それぞれに意見を出して友達の思いやどのように進めていけばよいかを気付かせながら、ルールを確認する。幼児の考えを認め、気持ちに折り合いを付けようとする姿、気持ちを切り替えて遊びに参加する姿を励ます。

③環境の構成のポイント（機会を捉える、時間の確保）

実際の遊びの場面において生じたトラブルを自分たちの遊びのルールについて話し合う機会とし、時間を十分に設ける。

（事例提供 奈良教育大学附属幼稚園）

社会生活との関わり			
2017年4月17日(月)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半

「お花見に出かけよう」

出かける支度が終わるとバスに乗り込んだ。高田公園に向かう途中、女兒が「休みの日にお父さんとお母さんとみんなでお花見に行ったんだよ」と話すと、周りにいた幼児も「僕もおばあちゃんたちと一緒にいったよ」「ママが今度のお休みに行くって言った」と楽しみにしている様子で話している。㊤教師は、幼児の話聞きながら「たくさんのお花見に行ったんだね。お花見、きれいだよね。先生は今年初めて行くから楽しみだな」と話し、楽しみにしている幼児の気持ちに共感する。

㊦公園から少し離れたところでバスを降り、並んで公園まで歩き始めた。周りの景色を楽しめるようにゆっくり歩く。

㊧高田城のお堀や満開の桜が見えてくると、「先生、見えてきたよ」「桜だー」「きれい」「ここ、来たことある。お花見するところだよ」という声があがる。幼児はお堀の淵まで近付き、生き物がいないか眺めたり桜の花に触ろうとしたりしながらゆっくり歩く。㊨幼児が見つけたものを教師も一緒に眺めたり言葉に共感したりしながら歩く。㊩お堀に架かる太鼓橋で休憩をとると、そこから㊪妙高山が見えることに気付いた幼児が「まだ雪がある」と驚き、友達にも知らせていた。途中で、出店の人たちに「お



はようございます」と挨拶を交わしたり、「どこの幼稚園？」と聞かれると「附属幼稚園」と答えたりしていた。㊫公園の通路に立っている雪洞を見つけると、「夜来たとき、灯りが点いていたよ」「今は朝だから点いてないんじゃない」と話しながら景色を楽しんでいる。

さらに公園内を進むと、「先生、あっちの方に広場があって遊ぶ場所があるんだよ」「知ってる。私も行ったことあるよ。先生、そこに行こうよ」と誘ってきた。教師が、これからそこに行くことを知らせると、「やっぱりね」と嬉しそうに言う。目的地に着くと、ベンチに荷物を置き、さっそく遊具で遊んだり近道を散策したりし始めた。教師は、木に汁が垂れていることや幹に穴が開いていることなど幼児の発見に驚きながら、幼児と一緒に散歩をする。㊬高田城の方を向いて「この向こうには何があるのかな」と尋ねると、㊭男児が「向こうにお城があるんだよ」と教えてくれた。中に入ったことのある幼児もいればお城があることを知らない幼児もいた。知らなかった幼児が城を見たいと言ったことから、後で行くことにする。



たっぷり遊んだ後、荷物を持って城の方に向かった。㊮城が見えてくると、「お城だ」と声が聞こえてくる。㊯「ここで記念写真を撮ろうか」と提案するとみんなが賛成したので、㊰高田城をバックに記念撮影をする。帰りのバスの中では、「楽しかった」「またお母さんと来たい」と話す幼児が多かった。

考察 (キーワード)

㊱幼児理解 (気付く、感じる、思い出す、考える、伝える、知らせる)

普段何気なく遊びに出かけていた高田公園だが、花見遠足を通して、幼児は毎年観桜会が開かれる桜の名所であることを知った。景色を見ながら歩くことで自分たちが住む地域のよさや伝統に触れ、一層親しみを感じている。

㊲援助のポイント (共感する、一緒に楽しむ)

遠足を楽しみにしている幼児の気持ちに寄り添いながら、地域の豊かさに気付くことができるように、幼児が見つけたものや気付いたことに対して「きれいだね」「かっこいいね」などの言葉をかけて共感する。

㊳環境の構成のポイント (利用計画、打ち合わせ)

公園の近くでバスを降り、目的地まで歩いて行くように計画する。幼児が地域について新たに知ることができるように休憩や遊ぶ場所、記念撮影のポイントを選ぶ。

(事例提供 上越教育大学附属幼稚園)

思考力の芽生え			
2017年10月	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「転がしてみよう」			
<p>「先生、『転がすおもちゃ』を一緒に作ろう」とSが教師に声をかけてきたので、提案を受け入れる。そして、どんな転がすおもちゃを作りたいかを尋ねる。Sが「トイレットペーパーの芯を使って、転がして・・・」と答える。それを聞き、教師が①おもちゃが載っている本を見せながら、「これ？」とSに確認する。「うん、それ」と答えると、①棚から材料となる牛乳パックやトイレットペーパーの芯を探し始める。Sと教師のやりとりを見ていたKとAも「一緒に作りたい」と言い、遊びに加わる。</p> <p>教師が「じゃあ、転がす部分を準備してくれる？」と言うと、「半分に切るんだよね」「分かるよ」という言葉を口々に発し、SとKがハサミで、トイレットペーパーの芯を縦半分に切る。それを見て、Aも次々に切り始める。①経験を生かしながら、転がす部分となる『レーン』を自分たちで準備していく。Sが土台となる牛乳パックを立てながら、「ねえ、先生もっと高くしたい」と言う。Kがそれを聞き「2つをくっつける？持ってきて」と言い、2本の牛乳パックを縦に積み、手で押さえ、Sがガムテープで2つの牛乳パックをつなげる。それを見て、Aが「高あい」と驚き、②教師は「高くなったね」と言い、幼児の発想力と互いに協力する姿を認める。</p> <p>Sが牛乳パックの側面に傾斜をつけながら、レーンをセロハンテープで取りつけていく。しかし、セロハンテープでは粘着力が弱く、レーンが外れてしまうことにKが気づき、「ぐらぐらする」とつぶやく。さらにセロハンテープを重ねて貼るが、不安定なままである。</p> <p>そこで、②教師がガムテープで貼ることを提案する。それを聞き、Aがレーンを持ち、Sがセロハンテープの上からガムテープを貼る。教師が「どう？」とSとAに聞くと、「ぐらぐらしない」と嬉しそうに答え、レーンを段違いに下部までガムテープで取り付けていく。</p> <p>①Sが「何を転がそうかな」とつぶやく。それぞれが新聞紙を小さく丸めてガムテープで巻いたものやペットボトルのキャップなどつくったり考えたりしたものを試すが、レーンの途中で止まってしまう。①Sがドングリがあることに気づき、試す。ドングリは、勢いよくレーンを通り、転がるが、折り返しの接続部分でレーンから飛び出してしまふ。</p> <p>①Kが「ここが飛び出すんだよ」と言い、問題点を指摘する。①Sが「ここにこれつけたら」と言い、小さく切った厚紙をレーンの折り返し接続部分についたてのようにつけ、試す。</p> <p>ドングリは『コロコロ』と下部まで転がる。「転がった!」と言って、歓声をあげる幼児たち。その後、①繰り返し、上部からドングリを転がす。②教師は「転がってよかったね」と言い、自分たちで作上げた喜びや遊ぶ楽しさに共感した。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (選ぶ、準備する、気付く、考える、試行錯誤する、工夫、試す、友達と意見を出し合う、繰り返す)</p> <p>今までの経験を生かし、自分たちで材料を準備したり、道具を選んだりする姿や試行錯誤したり、友達と意見を出し合いながらイメージするものを作り上げようとしたりする姿から、思考力の芽生えのようなものを感じる。</p> <p>②援助のポイント (認める、共感する、提案する、教える)</p> <p>問題点に気付いている姿や試行錯誤している姿、自分たちなりに解決しようとする姿を認め、自分たちで作上げた喜びや遊ぶ楽しさに共感する。幼児だけでは考えが思いつかないときは、新しい方法を提案することで、遊び方を広げる。</p> <p>③環境の構成のポイント (事前準備、環境の設定)</p> <p>幼児がいろいろな材料や道具を使ってすぐに製作を始めることができるように棚には空き箱やペットボトル、トイレットペーパーの芯などの材料を種類ごとに分け準備する。また、遊びや発想を広げることができるように参考となる本や図鑑などを準備する。</p>			



(事例提供 宮崎大学教育学部附属幼稚園)

自然との関わり・生命尊重			
2015年6月	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半

「ヒヨドリの卵を発見！」

ランチルーム前のデッキの角にヒヨドリが巣を作った。巣の存在に気付いた年長組の幼児たちは、②鳥の名前を図鑑で調べたり、枝や葉っぱを集めてできた巣の様子を観察したりしてきた。

この日、ヒヨドリが巣に座っているのを見つける。①幼児たちは「枝を運ばないでじっとしているね」「疲れちゃったのかな?」「寝てるのかな?」「近くを通ると、ギーギーって怒ったみたいに鳴くんだよ」などと口々に話す。①教師が「ヒヨドリがいない時にまた巣を見せてもらおうか」と伝えると、①「見てみたいけど大丈夫かな?」と返す。



しばらくして、ヒヨドリがいない時に幼児たちが巣を覗いてみた。そこに卵を発見し、①驚きの声があがる。「卵を温めていたんだ!」「卵を守ろうとして、ギーギーって鳴いたのかな?」「もう行こう。ヒヨドリに見つかったちゃうよ」などと話しながら、幼児たちは巣から離れた。

保育室に戻ると、ヒナの話になる幼児たち。「早く生まれられないかな」①「小さい組さんに見つからないかな」と話していると、①「みんなでお母さん鳥を守ってあげようよ!」という提案があがる。「それ、いいね!」と合意する幼児たち。②教師が「でも、どうやって守ればいいのか?」と話す



と話す、「巣をみんなに見つからないところに引っ越す?」「巣がどこかわからなくなるよ」「じゃ、巣の近くに行けないようにするのは?」「何か置くのはどう?」「あと、静かにしてくださいって貼っておくのはどう?」「いいね」などと相談が進む。②教師が紙とペンを出すと、①幼児たちは「ひよドリがいます。しずかにしてください」と紙に書いて近くのガラスに貼った。そして、プランターを運んできて植木の周りに置いた。

考察 (キーワード)

①幼児理解 (観察、葛藤、感動、思いやり、賛同、提案、愛着)

身近な所にできたヒヨドリの巣の様子を見たり、そこにある卵を発見したりしたことで、生き物の営みの不思議さや生命の尊さを感じている。そしてヒヨドリの立場になることで、心配したり、考えたりしながら、いたわり守ろうとしている。

②援助のポイント (提案する、考えを促す)

生き物を大切にしようとする思いを受け止め、幼児なりの発想で実現しようとする姿を認める。また、一緒に考えたり、具体的に実行できるよう話し合いを促したりする。

③環境構成のポイント (観察、ものの用意)

生き物について調べられる状況を作ったり、幼児なりの発想を実現するために必要な用具を準備したりする。

(事例提供 宇都宮大学教育学部附属幼稚園)

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

平成29年5月18日(木)

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「同じ」っていいね！うれしいね！

①園庭で、A、Bが同じ道具（猫車、シャベル、バケツ）を選び遊び始めた。さらに型抜き数個を二人で持ってくる。先にA児は、型抜きを猫車に入れ、バケツで水を汲んできて猫車に水を入れていた。②教師「Aちゃん、Bちゃんの猫車もシャベルも一緒だね」と声をかけると、Bは「うん。Aちゃんみたいに、水がいっぱいいる。」と言った。それを聞いていたAは、「ええ！おんなじか！」と笑顔で言い、Bに「こんぐらいいい？」とBの猫車の水量の目安を指さしBに伝えた。Bは「うんうん！」とうなづき、「まだ足りないな」とつぶやきながら水を汲みにいった。



③教師「どうしてこれぐらいってわかったの？」④A「だってぼくのがこれぐらいだけん」というと、Aは「あそうだ！」と言い、自分の猫車をBの猫車の隣に移動させ水量を比べやすくし、A「こうすれば分かる！」と言った。⑤B児が汲んできた水を猫車にゆっくり入れると、A児は体を曲げて水の量が分かる位置まで視線を下げ、のぞいている。BはAの様子を見ながら少しずつ水を足していった。水が丁度「同じ」になったところで、Aが「オッケー！大丈夫！」とBに伝え、二人の水の量が「同じ」になった。

⑥教師「Aちゃん！猫車が隣だとよくわかったね！水がぴったりだね！いい考えだったね！」



⑦教師「Bちゃん！Aちゃんとおんなじになったね」というと⑧二人は顔を見合わせて笑った。

その後二人は、水をいっぱいにしたり、シャベルで型抜きをすくったり、お互いに「同じ」ことに嬉しさや面白さを感じながら遊び続けていた。

考察 (キーワード)

①幼児理解 (量の感覚、気付き、発想、試行、思考力、協同、喜び)

「同じ」ものを持って遊ぶことで安心感もち遊ぼうとしている。さらに、水の量に興味をもち、「同じ」にするにはどうしたらよいかを考えている。比べることに気付き、猫車並べるといふ発想へつなげ、願いを実現しようとしている。AとBが気持ちを合わせ、猫車に流し込む水の量を調節して入れようとしたり、タイミングよく「オッケー」と終わりを知らせたりし、二人で一つのめあてを実現させようと力を合わせ、その嬉しさを感じている。

②援助のポイント (共感する、問いかける、量感覚を意味付ける、価値付けする)

AとBの「同じもの」を使って遊びたいという思いを受け止め、共感する。

Aが自分の水量とBの水量を比較しているということに気付きをもたせるために問いかけ、意味付けをする。それにより、比べるといふことがAの中で明確となり、さらに猫車を並べると比べやすいといふ発想する姿につながっている。

Aの気付きや発想の過程を認め価値付けをしたり、Bの「同じ」になったことの嬉しさに共感したりする。

③環境の構成のポイント (遊びに必要なものが選べる環境作り、道具の置き方や表示の工夫)

道具の数を幼児の人数に沿って調整する。遊びに必要な道具が自由に選択できるよう写真で表示をしたり、使いやすいように分けたりしておく。タライに水を溜めておく。

(事例提供 島根大学教育学部附属幼稚園)

言葉による伝え合い

2016年6月～11月

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「おおかみと7ひきのこやぎごっこ」

<背景> 3歳児の入園から6月頃までは、生活リズムを整えるために降園前に出席ノートにシールを貼っている。①その出席ノートに月ごとに描かれている昔話の絵から教師が口演し、幼児とのやりとりを楽しんでいる。6月の話は『おおかみと7匹のこやぎ』である。

(6月2日) 幼児たちが出席ノートを出して座っていると「先生、おおかみやってえ」とC児が言う。教師は「いいよ」と答え、全員が揃ったのを確認して、②低い声で「トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」と言う。幼児たちは「お母さんはそんなしわがれごえじゃない。おまえはおおかみだろう!」と言う。教師が「ばれたか・・・。はちみつを飲んで・・・。(高い声で) トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」と言うと、幼児たちが「手を見せて。黒い手だ。おまえはおおかみだろう!」と元気に言う。さらに教師が「ばれたか・・・。粉をつけて、パタパタ・・・。トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」と言うと、幼児たちは「手を見せて」と言うので、教師が手を見せる。幼児たちは「白い手だ! おかあさあん!」とドアをあけるふりをする。③教師が「わっはっはあ! おおかみだぞう。食べちゃうぞう!」とおおかみらしく言うと、幼児たちは「きゃあっ!」と思いついたのところに隠れる。教師は「どこに行ったかなあ?」と言いながら近寄る。「Aちゃん見つけた。ぱくっ。B君見つけた。パクッ。」と一人一人に触れながら次々と食べる真似をしていく。

(10月11日) 好きな遊びの時間に園庭にいた時のこと。Cが「おおかみごっこやろうよ」と誘いに来る。教師は「いいよ。他にやりたい子はいないかな? 呼んでこようよ」と言い、周りの友達に声をかける。④Cは「じゃあ、Cたちはおおかみね。先生たちはこやぎね」と言い、Cたちが「トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」と言う。教師と幼児たちは「お母さんはそんなしわがれ声じゃない。おまえはおおかみだろう!」と言うと、⑤Cたちは「ばれたか。はちみつをなめて・・・。ほっほっほっほお。(高い声で) トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」となりきって言う。⑥教師が「Cちゃん、上手じゃねえ。本当におおかみみたい!」と認めると、うれしそうな笑顔になる。逃げる場面になり、Cたちは思い切り走って追いかけてくる。教師を含むこやぎたちも一生懸命逃げるが、捕まえられる。教師は「やられたあ」と楽しく捕まる。Dが「先生、もう一回やろう!」と言い、園庭でのおおかみと7ひきのこやぎごっこは続いた。



(11月9日) やきいもをした次の日。園庭に残っている炭で絵をかいていた時のこと。教師が「あ、手が黒くなった」と炭で黒くなった手を見せると、⑦E児がひらめいたという表情で「あ、黒い手だ」と言う。教師が「黒い手?」と聞くと、⑧E児が笑いながら「おまえはおおかみだろう!」と言い、その後も『おおかみと7ひきのこやぎ』の言葉のやりとりを楽しみながら炭で絵を描いていった。

考察 (キーワード)

①幼児理解 (共有、真似る、意欲、考える、表現、なりきる、結び付ける、取り入れる)

『おおかみと7ひきのこやぎごっこ』を通して、役割分担を考えたり、表現豊かに役になりきったりしている。それらの体験を他の遊びと結び付けて、遊びの中にそのやりとりを取り入れて言葉の表現を楽しむ姿が見られるようになっている。


②援助のポイント (モデリング、認める)

素話をしながら、おおかみとこやぎのやりとりが分かるように教師が役になりきって演じることで、物語に興味をもつきっかけとなっている。おおかみになってだます面白さやこやぎになってだまされる面白さを感じながらやりとりをすることで、言葉のリズムや表現の楽しさを体感することになると考える。また、幼児の表現を認めることで、自信につながっている。

③環境の構成のポイント (教材選定、全員で共有する場の設定)

昔話に親しめるように、昔話の絵が月毎に描かれている出席ノートを選定している。その昔話の絵をきっかけに同じ話をクラス全員で一緒に聞く場を設けることで、言葉のやりとりの状況を全員が理解し、共通のイメージをもって遊びをすすめることができるようにしている。

(事例提供 広島大学附属三原幼稚園)

豊かな感性と表現			
2015年11月18・19・30日	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
<p>「劇遊び『ももたろう』キジの動きを表現しよう</p> <p>～Aの姿を中心として～</p>			
<p>集団行動や気持ちのコントロールが苦手なAだったが、運動会をきっかけに集団遊びにも興味を持ち始める。学級全体で行う「ももたろう」の劇遊びでは、Aはキジ役を選んだ。キジ役は他にBCDの4人である。18日、自ら選んで行う活動の時間に①曲に合わせた動きを考えるためにキジ役が集まろうとした時には、キジ役の幼児も教師も誘ったが、Aは参加しなかった。教師はBCDに向け②「Aさん、キジ役すごく楽しみにしているけど、どうしてもしたい遊びがやめられなかったみたい…みんなでするときできるかな…」と伝えた。Cは「ううん、後で教えてあげないとね」と返した。</p>			
<p>翌日学級全体の活動にてBCDが考えた動きを踊ることとなった。①Aは不安げな表情をしながらもBCDの動きをよく見たりDに教えてもらったりしながら踊るうちに、楽しげな様子に変わった。②教師は、Aにやり方を教えたDを認める言葉をかけた後、Aにも「今の動きはみんなが考えてくれたんだよ。一緒に動けて楽しかったね」と伝えた。</p>			
<p>30日にはBの提案で、キジ役の動きを新たに増やすことにした。自ら選んで行う活動の時間であったが、①Bの誘いにAはすぐに応じ、4人で話し始めた。Cの「ぴよんぴよんしながら回る？」という言葉を受け、Aは「そしたら4人で手をつないだらいいと思う」と伝える。教師が「4人組でCちゃんが言ったみたいにぴよんぴよんしながら回るってどういうこと？」とAに確認したところ、A「そうそう」と頷く。BCDも「それいいじゃん。やってみよう！」と賛成し、実際にやってみることになった。動きの中でBがAに「ここはピンと羽(腕)を伸ばして待っていてね」と伝えると、AはBらを真似て腕をピンと斜め下に伸ばす。②教師が「そのほうがきれいだね」と伝えると、Aはにこりとしながら背筋を伸ばした。曲に合わせてBCDと同じように両手を広げ、笑顔で後ろをついていく。②教師は次の動きが予想しやすいように「もうすぐ4人組、もうすぐ終わりのポーズ！」などと声をかけた。教師の声を聞いたり友達の動きを見たりしながら楽しそうに踊る中で、①Aは達成感を感じていたようで最後に「ポーズ！」と大きな声で言った。</p>			
<p>午後からは①衣装をつけて劇を行い、学級全体で感想や意見を言い合った。他の役をしているEが「キジの動きがきれいだった。あのね、なんか昨日と違っていいよかった。手をひろげるところも服がきらきらしてきれいだったし」と言うと、①キジ役の4人はうれしそうに顔を見合わせた。教師は「キジさんよかったね。朝から新しい動きを考えて練習していたもんね」と4人を見て言った。すると①Aが手を挙げ「サルが戦いのところで“キー”と声を出すところがよかった」と伝えた。教師は、「サルさんよかったね。朝から声を出す練習していたもんね。②AさんもEさんも、自分のところだけじゃなくて友達のやっている所をしっかりと見ていたもんね。いいこと気付いたね」と言葉をかけた。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (創造する喜び、受容、意欲、充実感、友達のよさを認める、連帯) Aは集団での行動があまり得意ではなかったが、自分の表現や意見を友達に受け止めてもらう経験を重ねたことで劇遊びへの意欲が高まった。友達と一緒に表現する楽しさを感じるとともに、自分が出来た嬉しさや充実感を感じていた。違う役の友達を認める発言も聞かれ、友達や集団遊びへの興味が高まったと考えられる。</p> <p>②援助のポイント (共感、認める、友達の支えに気付かせる、動きの見通しをもたせる) Aの気持ちや頑張りにも共感するとともに、周りの友達に支えられたことを実感できるようにしたいと考え、関わった。またBCDに対してはAを仲間の一員として一緒に進めていこうとする姿勢を認め、さらにAを仲間として受け入れていけるようになってほしいと考えた。</p> <p>③環境の構成のポイント (ほどよい数の選択肢を用意する、手作り衣装の着用) 役に合った曲を自分達で決めてほしいと考え、あらかじめ教師が数曲に絞り、用意しておいた。また衣装を自分達で作ることで意欲を高め、役をイメージしやすいよう意識した。</p>			

(事例提供 三重大学教育学部附属幼稚園)

(3) 発達区分に沿った事例におけるキーワードの分析

国立大学附属幼稚園 48 園より提供された事例の考察であげられたキーワードについて分析を行った。キーワードの分析は、まず発達区分ごとに行い、幼児理解、援助のポイント、環境の構成のポイント、特徴に分け、あげられたキーワードを全て書き出した。

次に、そのキーワードを①気付く、②感じる、③考える、④行動する(表現する)の4つに分類し出現数を表記した。また、同じ事柄を指すキーワードについては、その表現をまとめた。なお、どちらの分類にも含まれると考えた場合は、両方に記入することとした。この4つの分類は、鳴門教育大学附属幼稚園が平成 23 年度から 25 年度まで文部科学省より指定を受け行った開発研究や、幼稚園教育要領等中央説明会資料(平成 29 年 7 月)を参考にしている。それによると、①気付く、②感じるは「知識及び技能の基礎」であり、③考える、④行動する(表現する)は「思考力、判断力、表現力等の基礎」とされている。また、上記の開発研究によると、幼児期は事象に対する直感的感性的把握と試行錯誤の時代で、事象に対する感受性(気付く、感じる)や思考性(思う、考える、想像する)が活動性(関わる、行動する、表現する)と関係しながら循環的に働き、かつ、その相互作用によってそれぞれの働きがより活発になっていくという。そこで、本研究でもこの分類に沿いキーワードを分析していくこととした。

分析の結果は、次頁の表の通りである。

その結果、抽出されたキーワードは多種多様であり、出現している数に大きな開きは見られなかった(21 から 30 頁参照)。そのため、出現数が多い、少ないで考察するのではなく、各時期の特徴をそれらのキーワードが示していると捉えるのが妥当ではないかと考えた。また、各発達段階での4つの分類についても同様に検討を行ったが、出現している数に大きな開きは見られなかった。全体的な傾向として、第Ⅰ期よりも第Ⅲ期の方がキーワードの種類が多い傾向が見られた。(6)思考力の芽生えでは、第Ⅰ期は、「試す」「真似をする」といったキーワードが見られ、第Ⅲ期になると、「経験を生かす」「こだわり」などキーワードの項目が多くなっていくことが分かった。しかし、その他の項目については、今回の結果だけでは、それが年齢の特徴によるものなのか、事例の特徴によるものなのか明らかにすることはできなかった。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」ごとに見ていくと、それぞれの姿ならではのキーワードが見られた。例えば、(5)社会生活との関わりでは、「親愛の気持ち」「自己有用感」といった人との関わりに対する気持ちのキーワードが特徴として見られた。(4)道徳性・規範意識の芽生えでは、「葛藤」「折り合い」「ルールを守る」などの自分の気持ちの調整をすることに関するキーワードが特徴として見られた。

一方で、「気付く」「試す」といったキーワードはどの発達区分でも見られた表現であった。同じ「気付く」というキーワードで表しても、その意図する幼児の姿は異なるのではないかと、「共感する」「認める」「見守る」といった援助のポイントについても同様にその示す内容が異なるのではないかとという課題が残った。そこで、考察文に戻り、それぞれの発達区分における姿を丁寧に読み取っていくこととした。

なお、前述の事例の収集結果から明らかのように、接続期の事例が少ないため、キーワードをもとに分析することはできなかったが、接続期らしい児童理解や教師の援助などの特徴が見える事例として参考にされたい。

(1)健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:1 気:気付く(4) 感じる:11 感:憧れ(3) 感:意欲(2) 感:喜び(2) 感:有能感(1) 感:解放感(1) 感:満足感(1) 感:期待感(1) 感:感じる(1) 感:自信(1) 感:楽しさの共有(1) 感:心地よさ(1) 考える:4 考:見通しをもつ(2) 考:目的をもつ(1) 考:発想(1) 考:考える(1) 行動する:6 行:試す(5) 行:自発性(2) 行:観察力(1) 行:観察力(1) 行:真似る(1) 行:協働(1) 行:自分で作り上げる(1)	安心(4) 意欲(3) モデリング(3) 説明(2) つもりの世界(1) イメージ化(1) 励まし(1) 認める(1) 促す(1) 寄り添う(1) 模型の使用(1) 手本を示す(1) 約束(1) 次の行動を伝える(1)	環境の工夫(4) 関係作り(2) 幼児理解(2) 自然(1) 適度な負荷(1) 自由感(1) 経験(1) 栽培計画(1) 打ち合わせ(1) 保護者との連携(1) 健康な生活に関わり深い人(1) 紙芝居(1) 歯の模型(1) 歯ブラシ(1)	安心(2) 真似る(1)	気付く:1 気:気付く(4) 感じる:10 感:感じる(2) 感:脅威(2) 感:戸惑い(1) 感:驚き(1) 感:意欲(2) 感:達成感(1) 感:愛着(1) 感:期待感(1) 感:刺激を受ける(1) 感:歓喜(1) 考える:4 考:考える(3) 考:目的をもつ(1) 考:見通しをもつ(2) 考:自己決定する(1) 行動する:11 行:行動する(2) 行:試す(2) 行:自発性(2) 行:つながる(1) 行:なりきる(1) 行:真似る(1) 行:相手の動きに応じる(1) 行:思いっきり走る(1) 行:観察(1) 行:自制心(1) 行:自己決定する(1)	認める(4) モデリング(2) イメージさせる(1) 視覚化する(1) 具体的に示す(1) 工夫(1) 満足感(1) 安心(1) 自然(1) 関心(1) 伝える(2) 選択させる(1) 意欲付け(1) 試す(1) 仲間の一人となる(1) 場と時間の保障(1)	場の設定(5) 環境の再構成(1) 絵本の活用(1) つもりになれるお面・用具(1) 関係作り(2) 一体感(1) 計画(1) 指導体制(1) 可視化(1) 下見(1) 安全確認(1) 災害時の対応(1)	挑戦(2) 感謝の共有(1)	気付く:1 気:気付く(4) 感じる:11 感:くやしき(2) 感:達成感(2) 感:感じる(2) 感:安心(1) 感:自己の存在感(1) 感:意欲(1) 感:自覚(1) 感:自信(1) 感:仲間意識(1) 感:思いやり(1) 感:喜び(1) 考える:8 考:考える(3) 考:目的(2) 考:目当て(1) 考:気持ちの整理(1) 考:自己主張(1) 考:予測(1) 考:見通す(1) 考:自己決定する(1) 行動する:11 行:挑戦(3) 行:粘り強さ(2) 行:行動する(2) 行:つながり(2) 行:自己決定する(1) 行:観察(1) 行:自発性(1) 行:応援(1) 行:共有(1) 行:繰り返す(1) 行:称賛する(1) 行:工夫する(1)	提案(3) 認める(3) 見守る(3) 説明する(3) 仲間の一員(1) 一緒に考える(1) アドバイスする(1) 模型を用いた正しい指導(1) 気付かせる(1) 思考を促す言葉かけ(1) 情報提供(1) 代弁する(1) モデリング(1)	場作り(3) 安全確保(3) 事前の準備(1) ルール作り(1) 教師間の連携(1) 歯垢染色液(1) 鏡(1) 模型を用いた正しい指導(1) 口腔と歯ブラシの模型(1) 医師・歯科衛生士(1) 関係作り(1) ルール作り(1) 経験の積み重ね(1)	共有(1) 仲間意識(1) 協同性(1) 思考(1)	所属感(1) 安心(1)	思いを受け止める(1) 必要な声かけ(1) 班共通の話題のきっかけづくり(1)	教育課程(1) 関係づくり(1)	

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動できるようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:0 感:葛藤(2) 感:安心(2) 感:自信(2) 感:満足感(1) 感:所属感(1) 感:信頼をもつ(1) 考える:2 考:発想(1) 考:自己決定(1) 行動する:7 行:伝えたい(2) 行:自己決定(1) 行:自発性・能動性(1) 行:役割分担(1) 行:協力(1) 行:共有(1) 行:目的をもつ(1)	友達を巻き込む(2) 気持ちを受け止める(2) 寄り添う(1) 共感する(1) 思いを読み取る(1) 喜びを伝える(1) 信頼感をもてるようにする(1) 自然の変化(1) 道具の安全な使い方(1) 具体的な物や方法を提案する(1)	場作り(1) 友達を巻き込む(1) 身近に感じられるもの(1) 教師の存在(1) ゆったりと話すことが出来る時間(1) 木の剪定(1) 道具の片付け場所(1) 子どもが扱いやすい道具(1) 道具の安全性(1)	真似る(1)	気付く:0 感じる:5 感:仲間意識(3) 感:調整(2) 感:愛着(1) 感:葛藤(1) 感:達成感(1) 考える:1 考:見通しをもつ(1) 行動する:3 行:こだわり(1) 行:継続(1) 行:共有(1)	思いに共感する(1) 共に学ぶ(1) 伝え合う(1) 連帯(1) 関わりが広がり(1) 主体性(1) 見守る(1) 安心(1) 提案する(1) 葛藤(1) 目的をもつ(1) イメージする(1)	場所の再構成(1) 図鑑を置く場所(1) 複数の図鑑(1) 目的をもつ(1) 刺激(1) 満足感(1)	おもしろさの追求(1)	気付く:0 感じる:6 感:葛藤(2) 感:所属感(1) 感:愛着(1) 感:充実感(1) 感:喜び(1) 感:自信(1) 考える:3 考:比較(1) 考:試す(1) 考:創造性(1) 行動する:8 行:共有(3) 行:思いの表出(2) 行:試す(1) 行:継続(1) 行:創造性(1) 行:表現(1) 行:目的(1) 行:役割(1)	話し合うための環境作り(1) 認める(3) 問いかける(1) 見守る(1) イメージの共有(2) ○○らしさ(1) 遊びの停滞(1) 自分の力で乗り切る体験(1) 個性の自覚(1)	自分で話し合える空間の確保をする(1) 友達と伝え合う場(1) 少し難しい話題の投げかけ(1) 時間や場の保障(1) 試す(1) 必要感(1) 自発性(1) 広い空間(1)	本物らしい掲示の提案(1) 他児と共有する場“わくわくらん” 自信(1)				

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:3 気:興味(1) 気:気付き(3) 気:思い付き(1) 感じる:4 感:期待感(1) 感:共感(1) 感:思いやり(1) 感:感じる(1) 考える:5 考:没頭(1) 考:自分中心(1) 考:他者理解(1) 考:思いやり(1) 考:考える(1) 行動する:5 行:没頭(1) 行:競争(1) 行:つながる(1) 行:真似る(1) 行:行動する(1)	知らせる(1) 気付かせる(1) つながる(1) 振り返らせる(1) 自分で考えさせる(1) 認める(2) 共感する(1) 共感(1) 思いを認める(1) 喜び(1) 安心(1) 問いかける(1) 状況を整理する(1)	身近なところに小動物のいる環境(1) 同じ並べ方(1) 幼児の体格に合う椅子(1) 5つずつ重ねて片付ける(1) 雨の日も戸外で遊べる環境と雨具の用意(1) 園庭の樹木の管理(1)	自分の発想を表現する(1) 喜び(1) つながる(1)	気付く:1 気:気付く(1) 感じる:3 感:楽しさ(2) 感:共通の願い(1) 感:感じる(1) 考える:6 考:役割分担(2) 考:思い違い(1) 考:他者理解(1) 考:心の理論(1) 考:こだわりをもつ(1) 考:考える(1) 行動する:7 行:役割分担(2) 行:友達と一緒に遊ぶ(1) 行:よさを取り入れる(1) 行:共通の願い(1) 行:心の理論(1) 行:行動する(1) 行:真似る(1)	共感(1) 相手の立場に立つ(1) 楽しさを共有する(1) アイデアを出す(1) 話し合いのきっかけ作り(1) 場に応じた役割・教師間の連携(1) 求めに応じた動きをする(1) 視線で動作予告をする(1)	自転車の準備(1) 材料の常備(1) 園庭の使い方の打ち合わせ(1) コーナーの環境を一緒に作る(1) 場の保障(1) オープンスペース(1) 遊具スペース(1) 運動能力に合わせた広さ(1) 遊びの痕跡を残す(1)	アイデアを出し合う(1) イメージの重なり(1) 伝え合う(1)	気付く:1 気:気付く(1) 感じる:1 感:勝ちたい(1) 考える:9 考:チーム意識(1) 考:友達の思いを自分に置き換え察する(1) 考:解決策を出し合う(1) 考:考える(1) 考:目的の共有(1) 考:役割分担(1) 考:インスピレーションを働かせる(1) 考:連想する(1) 考:納得する(1) 行動する:4 行:解決策を出し合う(1) 行:力を合わせる(1) 行:役割分担(1) 行:納得する(1)	見守る(2) 行動の振り返り(1) 自分で考える(1) クラスのみんなで考える(1) 聞き役になる(1) 解決策を待つ(1) 気付きを促す(1) 物的援助(1) 言葉を補う(1) 仲間の一員として一緒に遊ぶ(1) 見通しがもてるモデリング(1)	材料の準備(3) 安全性(2) リレーの環境の準備(1) 園庭の遊びスペースの確保(1) 場の保障(1)	友達の姿や言葉から影響を受け伸び合う(1) 仲間意識(1)				

(4)道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:1 気:友達のを要求を知る(1)	思いを引き出す(1) 受け止める(3) 繋ぐ(1)	自分の思いを出せる雰囲気(1) 他児とのつながり(1)		気付く:1 気:気付く(1)	見守る(3) 話し合う(1)	勝敗のある遊び(1)	自分事として捉える(1) 安全やルールへの意識(1) 状況整理(1)	気付く:2 気:友達への思い(1)	見守る(2) 認める(2)	継続する(1) 関係づくり(1)	他者理解(1)	目的をもつ(1)	幼児の行動や気持ちを言語化する(1)	自分事になる活動(1)	
感じる:6 感:葛藤(3) 感:思いやり(1)	見守り(1)	限定された場(1)		感じる:6 感:葛藤(3)	時間の確保(1)	関わりが豊かになるものや場(1)		気:相手の思いに気付く(1)	話し合いの時間を設ける(1)	教える場の設定(1)	他者への思い(1)	折り合いをつける(1)	折り合いをつける(1)	葛藤(1)	
感:遊びへの執着(1)	おもしろさの共感(1)	魅力的だが数が少ない(1)		感:感じる(1)	任せて待つ(1)	雰囲気づくり(1)		感じる:4 感:自信(1)	伝える(1)	伝えるきっかけを作る(1)		認める(1)	認める(1)	葛藤(1)	
感:楽しさの共有(1)	仲間として遊ぶ(1)	協力すると楽しさが増す(1)		感:愛着(1)	代弁する(1)	ルールを守る(1)		感:愛着をもつ(1)	言葉にして言う(1)	時間を確保(1)		自分の行動の自覚(1)	認める(1)	受容(1)	
感:有限性を感じる(1)	モデリング(1)	使えるものを棚に直す(1)		感:達成感(1)	共感(1)	体験を積み重ねる(2)		感:我慢(1)	気持を受け止める(1)	ものや場の整理を促す(1)		我慢(1)	相手に納得してもらおう(1)	理解する(1)	
感:満足感(1)	ジャッジしない(1)	互いに納得するまで向き合う場作り(1)		感:自信(1)	モデリング(1)	道具の数(1)		感:我慢(1)	話し合いを進める(1)	場の構成(1)		相手の行動の自覚(1)	相手に納得してもらおう(1)	理解する(1)	
考える:4 考:自己主張(3)	姿を見せる(1)			考える:6 考:考える(1)	認める(1)	幼児との調整(1)		考:調整する(2)	気付けさせる(1)			振り返る(1)			
考:他者理解(2)	使えるか尋ねる(1)			考:他者への思い(1)	状況整理(2)			考:考える(1)	励ます(1)						
考:振り返る(1)	待つ(1)			考:問題をもつ(1)	確認(1)			考:認められる(1)	寄り添う言葉かけ(1)						
考:善し悪しの判断(1)	新しいものをすぐには出さない(1)			考:目的の共有(1)	考えを引き出す(1)			考:自分を振り返る(1)	信じる(1)						
行動する:7 行:折り合う(3)	相手に直前の経緯を話す(1)			考:提案(1)				考:推し量る(1)							
行:伝える(2)	相手の気持ちを聞かせる(1)			行動する:10 行:気持ちの切り替え(2)	行:伝える(1)			行動する:6 行:折り合いをつける(3)							
行:他者理解(2)	別の言い方を提案する(1)			行:役割を見つける(1)	行:受け入れる(1)			行:伝える(1)							
行:自分中心(1)	一緒に遊ぶ(1)			行:ルールを守る(1)	行:相手の様子に気付き行動する(1)			行:自発性(1)							
行:粘り強さ(1)				行:他者理解(1)	行:他者への思い(1)			行:自己主張(1)							
行:行動の変容(1)				行:目的の共有(1)	行:気持ちの切り替え(1)			行:話し合う(1)							
				行:相手の様子に気付き行動する(1)				行:相談する(1)							

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:1 気:気付く(2) 感じる:7 感:感じる(2) 感:愛される(1) 感:大切に思う(1) 感:親しみの気持ち(1) 感:感謝する(1) 感:身近な場所や地域への親しみ(1) 感:驚きを共有する(1) 考える:4 考:考える(3) 考:知る(2) 考:思い出す(1) 考:目的をもつ(1) 行動する:8 行:伝える(2) 行:触れ合う(1) 行:自発性(1) 行:能動性(1) 行:知らせる(1) 行:真似る(1) 行:自己発揮(1) 行:行動する(1)	共感する(2) モデリング(2) 説明する(2) 遊びコーナー(1) ふれあい(1) 一緒に楽しむ(1) 素材の提案(1)	利用計画(2) 打ち合わせ(2) 生活の場(1) 一緒に楽しむ(1) 家族を思う気持ち(1) 年間を通した園開放の実施(1) 遊びやすい場作り(1) 広い空間利用(1) 自由に使える素材の提案(1) 下見(1) 遠足グッズ(1) 関係作り(1) 憧れのモデル(1) 見通し(1) 身近な旗(1)	楽しみにする(1) 小さい友達存在を知らせる(1) 認める(1)	気付く:1 気:気付く(1) 感じる:8 感:感じる(2) 感:楽しむ(1) 感:大切に思う(1) 感:親れ合う心地よさ(1) 感:親しみの気持ち(1) 感:充実感(1) 感:達成感(1) 感:感謝する(1) 考える:5 考:考える(1) 考:イメージする(1) 考:新たな思いつき(1) 考:知る(1) 考:ものの表す意味(1) 行動する:10 行:行動する(2) 行:応援する(1) 行:関わる(1) 行:楽しむ(1) 行:ふれあい(1) 行:自己表現(1) 行:真似る(1) 行:感謝する(1) 行:情報(1) 行:社会の話題(1)	安心(2) 認める(2) 遊びコーナー(1) ふれあい(1) 交流する中学生への事前指導(1) 意欲付け(1) 安全(1) 共感(1) 共に楽しむ(1) モデリング(1) 説明する(1) 身近なもの(1) きっかけづくり(1)	打ち合わせ(3) 練習計画(2) 関係作り(2) 生活の場(1) 家族を思う気持ち(1) 外部講師(1) 活動の趣旨説明(1) 活動しやすい場所(1) 必要な素材や材料の用意(1) 高さや段差のある空間(1) 興味を引く教材(1) 活動に合った素材(1)	誇りに思う(1)	気付く:2 気:気付く(3) 気:考:好奇心(2) 感じる:13 感:感じる(2) 感:親愛の気持ち(1) 感:感謝の気持ち(1) 感:親しみの気持ち(1) 感:信頼(1) 感:自己有用感(1) 感:大切に思う(1) 感:感動する(1) 感:充実感(1) 感:達成感(1) 感:実感(1) 感:共感する(1) 感:思いやり(1) 考える:7 考:考える(2) 考:好奇心(2) 考:目的・めあて(1) 考:知る(1) 考:比較(1) 考:知識の活用(1) 考:疑問をもつ(1) 行動する:10 行:リードする(1) 行:深める(1) 行:共に楽しむ(1) 行:触れ合う(1) 行:行動する(1) 行:自発性(1) 行:能動性(1) 行:観察(1) 行:探究(1) 行:知識の活用(1)	見守る(2) 遊びコーナー(1) ふれあい(1) 共感する(1) 一緒に考える(1) 称賛の言葉かけ(1) 教材の提案(1) 任せる(1) 体験(1) 段階を大切にすること(1) 予備知識(1) 認める(1) きっかけをつくる(1) つなげる(1) 見立てる(1) 記す(1)	生活の場(1) 共に楽しむ(1) 家族を大切に思う(1) 継続した交流活動の実施(1) 思いが実現する材料や道具(1) 思考を促す視覚教材(1) 環境季節に適した書籍の用意(1) 利用しやすい配置(1) 保育計画(1) 園外保育(1) 行き先の選択(1) 作品展示(1) 選択できる(1) 可視化する(1)	つながりを促す(1) 誇りに思う(1)				

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考え方があることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:3 気:気付く(3) 気:興味・関心(1) 気:発見の喜び(1) 感じる:5 感:感じる(2) 感:共感(1) 感:興味・関心(1) 感:発見の喜び(1) 感:達成感(1) 考える:5 考:考える(2) 考:見立てる(1) 考:イメージの共有(1) 考:見通し(1) 考:ひらめく(1) 行動する:10 行:試す(3) 行:伝え合い(1) 行:話を聞く(1) 行:確かめる(1) 行:自己表現(1) 行:発想(1) 行:真似る(1) 行:繰り返す(1) 行:自分なりの工夫(1) 行:粘り強さ(1)	問いかける(2) 共感する(2) 提案する(2) 思考過程の理解(1) 説明する(1) 介入する(1) 見守る(1) 安全面の配慮(1) 手伝う(1) 言葉にする(1) 提案(1) 一緒に試行錯誤(1)	興味・関心(1) 自然の不思議(1) 自然を生かす(1) 自然に触れる(1) 自然(1) 社会のインフラ(1) 観察しやすい場の工夫(1) 空間(1) 見立て(1) リアリズム(1) 事前調査(1) 環境の設定(1) 目に付く場所(1) 即応性(1) 共通理解(1)		気付く:2 気:気付く(2) 気:驚き(1) 感じる:5 感:本物(1) 感:リアル(1) 感:考:実体験との結びつき(1) 感:感じる(1) 感:驚き(1) 考える:8 考:実体験との結びつき(1) 考:自発性(1) 考:イメージする(1) 考:考える(1) 考:試行錯誤する(1) 考:思いを出す(1) 考:思いを巡らす(1) 考:集中(1) 行動する:14 行:工夫(2) 行:繰り返す(2) 行:生活経験(1) 行:観察(1) 行:創造(1) 行:追求(1) 行:選ぶ(1) 行:準備する(1) 行:試す(1) 行:友達と意見を出し合う(1) 行:利用(1) 行:思いを出す(1) 行:真似る(1)	認める(2) 提案する(2) 思考過程の理解(1) イメージの整理(1) 言語化(1) 事前準備(1) 目的の共有(1) 意識化(1) 共感する(1) 教える(1) 共同者(1) 励ます(1)	興味・関心(1) リアルな体験(1) 同調(1) 素材提供(1) 空間づくり(1) 共感性(1) 事前準備(1) 環境の設定(1) 即応性(1) 観察(1) 工夫(1) 創意(1) 十分な量の素材と用具(1)	イメージの実現(1) 共感(1) 継続(1) 目的の共有(1)	気付く:2 気:自分と異なる考えに気付く(1) 気:気付く(1) 感じる:1 感:達成感(1) 考える:9 考:試行錯誤(2) 考:目的・めあて(2) 考:生活経験を土台にした思考(1) 考:共通のめあて(1) 考:役割分担(1) 考:考える(1) 考:理解する(1) 考:アイデア(1) 考:見通しをもつ(1) 行動する:17 行:物の選択(2) 行:試行錯誤(2) 行:問題解決(1) 行:困難の克服(1) 行:協同性(1) 行:創造性(1) 行:挑戦・試す(1) 行:こだわり(1) 行:役割分担(1) 行:伝える(1) 行:新しい遊び方を作る(1) 行:適材適所(1) 行:使いこなす(1) 行:経験を生かす(1) 行:出し合う(1) 行:改良する(1) 行:思いの実現(1)	認める(2) 見守り(1) 思考過程の保障(1) 共感する(1) 仲間になる(1) 提案(1) 共通のイメージ(1) 言語化(1) 見守る(1) 尋ねる(1) 考えさせる(1) 賞賛する(1) 広める(1) 言葉で伝える(1) 紹介する場作り(1) 楽しさの共有(1)	挑戦する環境(1) 安全確保(1) 材料の準備(1) 意図的な素材(1) 遊びを保証する場(1) 素材の量(1) 場の確認(1) 場の再構成(1) 多様性(1) 日常性(1) 廃材コーナー作り(1)	試行錯誤(1) 考えを出し合う(1) 引き算の環境構成(1) 折り合いをつける(1) 考え直す(1) 遊び方の共有(1)				

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかえりをもって関わるようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:2 気:気付く(2) 気:発見の喜び(1) 感じる:9 感:安心(2) 感:愛着(2) 感:感動(1) 感:満足感(1) 感:感じる(1) 感:共感性(1) 感:楽しみ(1) 感:自分中心(1) 感:発見の喜び(1) 考える:6 考:観察力(2) 考:記憶力(1) 考:信頼をもつ(1) 考:不思議に思う(1) 考:慎重さ(1) 考:イメージ(1) 行動する:7 行:共有(2) 行:信頼をもつ(1) 行:自発性・能動性(1) 行:共感性(1) 行:楽しみ(1) 行:自分中心(1) 行:慎重さ(1)	共感的に受け止める(3) 好奇心を引き出す(1) 幼児同士をつなげる(1) 共に楽しむ(1) 生き物への愛着(1) 個々の思いの伝え合い(1) 命を感じる(1) 捕獲の喜び(1)	気付きの共有(2) 園庭の環境を生かす(1) 拠点となる場(1) 繰り返し関わることの出来る環境(1) 幼児の目線に合わせた場の構成(1) 自然との関わり(1)		気付く:1 気:気付く(2) 感じる:8 感:思いやり(2) 感:葛藤(2) 感:愛着(2) 感:連帯(1) 感:達成感(1) 感:感動の心地よさ(1) 感:安定・安心(1) 感:感動(1) 考える:7 考:観察力(3) 考:葛藤(2) 考:イメージする(1) 考:不思議に思う(1) 考:考える(1) 考:見通しをもつ(1) 考:賛同(1) 行動する:5 行:連帯(1) 行:行動する(1) 行:工夫(1) 行:賛同(1) 行:提案(1)	共感する(2) 一緒に見る(1) 気付かせる(1) 見守る(1) 発見の共有化(1) 共に楽しむ(1) イメージが広がる「もの」との出会いを促す(1) 体験との関連(1) 自然に対する関心(1) 多様な気づき(1) 提案する(1) 考えを促す(1)	園庭の自然環境の保持(1) 継続的関わり保障(1) 季節感(1) 安定感(1) 香り(1) 食感(1) 雰囲気(1) 幼児が考えたことが試せる場の構成(1) 気付きの共有化(1) 観察(1) 物の準備(1)		気付く:1 気:発見(1) 感じる:5 感:仲間意識(1) 感:美感(1) 感:達成感(1) 感:思いやり(1) 感:好奇心(1) 考える:3 考:興味の追究(2) 考:疑問をもつ(1) 考:折り合いをつける(1) 行動する:13 行:観察(3) 行:挑戦(2) 行:自発性・能動性(2) 行:興味の追究(2) 行:目的(1) 行:共有(1) 行:こだわり(1) 行:試す(1) 行:粘り強さ(1) 行:伝え合い(1) 行:自己主張(1) 行:継続(1) 行:折り合いをつける(1)	身近な自然への関心(2) 驚きや発見への共感(2) 見守る(1) 目的に向かうための関わり(1) 話し合う環境作り(1) 食育(1) 生命の循環(1) 主体的な関わり(1) 変化への気づき(1) 提案(1)	素材の提供(1) 繰り返し試せる環境(1) 園庭の自然環境を生かす(1) 季節感(1) 香り(1) 気付きの共有(1) 継続的関わり保障(1) 情報の共有と振り返り(1) 自分で試す(1) 偶発の活用(1) 時間・場の確保(1)	園外の人との関わり(1)				

(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:1 気:気付く(2) 感じる:5 感:期待感(1) 感:楽しさの共有(1) 感:ファンタジーの世界(1) 感:量の感覚(1) 感:喜び(1) 考える:4 考:発想(1) 考:思考力(1) 考:知る(1) 考:やってみたらどうなるかを考える(1) 行動する:5 行:数える(1) 行:楽しさの共有(1) 行:試行(1) 行:協同(1) 行:真似(1)	数の経験を引き出す(1) 共有(1) イメージの共有(1) 共感する(1) 問いかける(1) 量感覚を意味付ける(1) 価値付ける(1) 知らせる(1) 思いを形にする(1)	経験の積み重ね(1) 遊びに必要な物が選べる環境作り(1) 道具の置き方や表示の工夫(1) 扱いやすい材料を準備する(1)		気付く:1 気:気付く(1) 感じる:3 感:刺激を受ける(1) 感:達成感(1) 感:空間・数量感覚(1) 考える:2 考:めあて(1) 考:考える(1) 行動する:5 行:試す(1) 行:共有(1) 行:やり抜く(1) 行:知らせる(1) 行:示す(1)	数や量への意味付け(1) めあての意識化(1) 認める(1) 確認する(1) 支える(1)	教材の数と種類の確保(1) グループ化(1) 場や空間(1) 楽しめる関係づくり(1)		気付く:2 気:落下する法則性(高さ、速さ)に気付く(1) 気:気付く(1) 感じる:3 感:必要性を感じる(1) 感:共感(1) 感:楽しみにする(1) 考える:5 考:受容(2) 考:めあてをもつ(2) 考:数量意識(1) 考:予想する(1) 考:考える(1) 行動する:9 行:比べる(1) 行:試す(1) 行:伝え合い(1) 行:協同(1) 行:図形を同じ形に切る(1) 行:数を数える(1) 行:試す(1) 行:共同(1) 行:体験を生かす(1)	幼児の気付きを引き出す(1) めあての意識化(1) 数量の意識化(1) 見守る(1) 高低差・速度感覚への意味付け(1) 共有への価値付け(1)	遊びの予測(1) 有効な材料の準備(1) いろいろな形や大きさの段ボールや空き箱や紙類、秋の自然物を準備(1) 視覚的に分かりやすい場の配置(1)					

(9)言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:0 共感(2) モデリング(2) 友達とつなぐ(1) 一緒に遊ぶ(1) 感じる:6 感:意欲(2) 感:安心(1) 感:不満足感(1) 感:満足感(1) 感:楽しさの共有(1) 感:安定・安心(1) 考える:4 考:目的をもつ(1) 考:イメージを共有(1) 考:考える(1) 考:楽しさの共有(1) 行動する:12 行:真似る(2) 行:イメージを共有(1) 行:同じ遊びをずす(1) 行:試す(1) 行:自己表現(1) 行:自分でもやってみる(1) 行:共有(1) 行:表現(1) 行:なりきる(1) 行:結び付ける(1) 行:取り入れる(1) 行:自発性(1)	共感(2) モデリング(2) 友達とつなぐ(1) 一緒に遊ぶ(1) 認める(1) 安定・安心(1) 受容(1) 楽しさの共有(1)	新しい遊びの提示(1) 使いやすい積み木の種類・数(1) 安心(1) 幼児でもできる環境(1) 教材選定(1) 全員で共有する場の設定(1) 安定・安心(1) 受容(1) 自発性(1)	言いたいことを言う(1)	気付く:1 気:絵の意味に気付く(1) 感じる:7 感:伝えたい思い(1) 感:不安(1) 感:意欲(1) 感:言葉を楽しむ(1) 感:好奇心(1) 感:感動(1) 感:伝え合う喜び(1) 考える:6 考:具体物(1) 考:友達に分かるように(1) 考:考える(1) 考:想像力(1) 考:観察力(1) 考:連想(1) 行動する:6 行:友達に分かるように(1) 行:モデルを見る(1) 行:試す(1) 行:言葉を楽しむ(1) 行:観察力(1) 行:伝え合う喜び(1)	みんなで共有する(2) 共感する(2) 一緒に調べる(1) 幼児同士をつなぐ(1) 見守る(1) モデリング(1) イメージする(1) 目的をもつ(1) 驚きの共有(1) 気付き(1)	生き物への愛着(1) 図鑑の準備(1) みんなに伝える場(1) モデルの提示(1) 園庭にある環境を生かす(1) 関心・興味(1) なりきる(1)	みんなの意見を聞く(1)	気付く:0 伝え合い(2) 具体的に伝える(1) 感じる:3 感:好奇心(2) 感:葛藤(1) 感:達成感(1) 考える:4 考:相手の言葉の意味を理解し話す(1) 考:共有(1) 考:疑問をもつ(1) 考:友達のよさを認める(1) 行動する:6 行:自分の言葉で話す(1) 行:葛藤(1) 行:自己主張(1) 行:伝え合い(1) 行:友達のよさを認める(1) 行:観察(1)	伝え合い(2) 肯定的(1) 待つ(1) 共感(1) 満足感(1) 必要感(1) 共有(1) 協同性(1) 工夫(1) 好奇心(1) 自発性(1) 分かる喜び(1)	特別な時間と場を設ける(1) 素材や用具の準備(1) 集いの用い方(1) 表現を楽しみながら話し合える場の提供(1) 雰囲気作り(1) 自発性(1) 比べる(1) 伝え合い(1)	相手を気遣う(1)	興味・関心(1) 期待(2) 緊張(1) 意欲(1) 一体感(1) 受容(1) 張り切る(1) 言葉で説明(1) 自発性(1) 挑戦(1)	1年生に任せる(1) 見守る(1) 言葉で認める(1) 緊張感を解く(1) 受容(1) 称賛(1) 発見の喜び(1) 支え合い(1) 表現する(1) 達成感(1)	学校と園との協力(1) 接続した関係作り(1) 児童相互の関わり(1) 児童の学びに沿った単元構成・授業展開(1)	優越感(1) 満足感(1) 自信(1) 責任感(1)

(10)豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

第Ⅰ期:3歳児～4歳児前半 (初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期)				第Ⅱ期:4歳児後半～5歳児前半 (遊びが充実し自己発揮する時期)				第Ⅲ期:5歳児後半 (人間関係が深まり学び合いが可能となる時期)				接続期:小学校1年生 (新しい環境に適応し人やものとの関わりを通して「自覚的な学び」へと移行する時期)			
幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴	幼児理解	援助	環境	特徴
気付く:2 気:気付く(1) 気:興味・関心(1) 感じる:6 感:満足感(1) 感:安心(1) 感:楽しさの共有(1) 感:感じる(1) 感:喜び(1) 感:楽しむ(1) 考える:2 考:観察力(1) 考:考える(1) 行動する:7 行:工夫(1) 行:自発性・能動性(1) 行:楽しさの共有(1) 行:人との関わり(1) 行:動き出す(1) 行:歩く(1) 行:なりきる(1)	共感する(2) 環境の再構成(1) モデリング(1) 仲介する(1) 役になって動く(1) 動きを引き出す言葉(1) 受け止める(1) イメージを合わせる(1) 即興で弾く(1)	即時に(1) 扱いやすさ(1) 自分で(1) 工夫できる(1) 十分な遊具の数(1) 囲われた場(1) 遊びの様子が見やすいコーナー作り(1) それらしいしつらえ(1) 絵本の掲示(1) 場の確保(1)	自発性(1)	気付く:0 感じる:8 感:満足感(2) 感:共感性(1) 感:感動(1) 感:驚き(1) 感:仲間意識(1) 感:手応え(1) 感:承認の欲求(1) 感:意欲(1) 考える:2 考:共感性(1) 考:友達よさを認める(1) 行動する:11 行:自発性(1) 行:試す(1) 行:共有(1) 行:観察(1) 行:美の追求(1) 行:思いの共有(1) 行:賛同し合う(1) 行:つながる(1) 行:役割を担う(1) 行:友達よさを認める(1) 行:歩み寄り(1)	見守る(1) 待つ(1) 遊びに共感する(1) イメージに合う素材の提供をする(1) 受け止める(1) 焦点化(1) 問いかける(1) 提案する(1) 友達存在に気付かせる(1) 共感(1) 聞く姿勢(1)	必要な素材(1) 材料を用意する(1) 心を落ち着ける場や空間を用意する(1) 遊びに関わる素材を目に付きやすいところに配置する(1) 視覚化(1) 共有(1) 年長児への興味・憧れ(1) 幼児だけの場(1)		気付く:0 感じる:8 感:意欲(2) 感:喜び(1) 感:居場所(1) 感:手応え(1) 感:満足感(1) 感:創造する喜び(1) 感:充実感(1) 感:連帯(1) 考える:4 考:思いの共有(1) 考:役割(1) 考:受容(1) 考:友達よさを認める(1) 行動する:7 行:協同性(2) 行:表現(2) 行:共有(1) 行:思いの表出(1) 行:伝え合い(1) 行:友達よさを認める(1) 行:連帯(1)	選択・決定の機会(1) 後押し(1) 幼児の言葉を補う(1) 認める言葉(1) 共感(1) 認める(1) 友達支えに気付かせる(1) 動きの見直しもたせる(1)	場の保障(1) 季節や幼児のイメージに合った材料や道具(1) 話し合いの場作り(1) ほどよい数の選択肢を用意する(1) 手作りに着用(1)		意欲(2) 工夫(2) イメージ(2) 共感性(2) 友達よさを認める(2) 気付き(1) 興味・関心(1) 安心感(1) 期待感(1) 探究(1) 見直し(1) 目的をもつ(1) 繰り返し(1)	モデリング(1) 投げかけ(1) 授業計画(1)	保護者への依頼(1) 教材準備(1) 板書の工夫(1) 豊富な材料の準備(1) 掲示(1) 場づくり(1) ワークシート(1)	

(4) 発達区分に沿って整理した幼児の姿

(3)で述べたように、「気付く」「試す」といったキーワードは、どの発達区分でも見られた表現であった。同じ「気付く」というキーワードで表しても、その意図する幼児の姿は異なるのではないかという課題が残った。そこで、考察文より、それぞれの発達区分における姿を丁寧に読み取り、キーワードが示す姿を明らかにしたいと考えた。なお、幼児の姿には、先にまとめたキーワードも参考にし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」ごとにまとめていくこととした。各発達区分に沿って整理した幼児の姿の結果は以下の通りとなった。

第Ⅰ期：3歳児から4歳児前半（初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期）

	幼児の姿
(1) 健康な心と体	<p>園生活の流れが分かり、片付けをし、帰り支度をするという見通しをもつ。</p> <p>健康な生活を送るための習慣について教師の問いかけに応えたり、日々継続して実践したりする中で身に付けていく。</p> <p>自分たちで野菜を育てることで、成長に興味をもち、みんなで食べる楽しさやおいしさを実感する。</p> <p>友達の真似をして繰り返し遊ぶ中でおもしろさやスリル感、開放感を感じると共に危ないことを知る。安定・安心感や憧れの気持ちをもち、友達の様子に興味をもって挑戦する。できたことで満足感や自信をもつ。</p>
(2) 自立心	<p>泣くことで思いを表現するが、落ち着くと言葉で伝える。</p> <p>教師を信頼し、安心感をもち安定する。</p> <p>友達と一緒に遊んだり友達の真似をしたりすることで親しみや関わる心地よさを感じる。</p> <p>教師が関わることで、協力して活動するよさを知る。</p>
(3) 協同性	<p>友達との関わりの中で出来事を共有し、嬉しい、楽しい、悲しい、悔しいなどの感情をもち、友達の思いや考えに気付いたり、自分なりの考えをもったりする。</p> <p>一緒に遊ぶ楽しさを味わい、心が通い合った心地よさを感じる。</p> <p>友達と一緒に思いや願い、目的を共にし、自分の意見を出し合って行動する。</p>
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	<p>自分の思いを教師から相手に伝えてもらい、相手の気持ちを教師から聞くことで理解する。教師の提案を受け入れ、自分の思いを抑え折り合いをつけたり、気持ちを切り替えたりする。</p> <p>教師の話聞きながら、自分の行動を振り返り、してよいことや悪いことが分かる。</p>
(5) 社会生活との関わり	<p>自分が住んでいる身近な場所が分かる。</p> <p>経験を通して、地域のよさを感じたり、マナーに気付いて気をつけようとしながら行動したり、遊びに生かしたりする。</p> <p>挨拶と一緒に遊ぶことを通して、親しみの気持ちや大切に思う気持ちをもち、人と関わる楽しさを感じる。</p>
(6) 思考力の芽生え	<p>友達がする様子を見て真似たり、今までの経験からやりたいことをひらめいたりして、友達と大まかなイメージを共有し見立てて遊ぶ。</p> <p>見通しをもって、水や砂など素材そのもので試して遊び、その様子に気付き、おもしろさを感じて、自分なりに工夫する。</p>

(7) 自然との関わり・生命尊重	教師を頼りにして安心して出かける。 身近な生き物に親しみをもち、見つけることに喜びや楽しみを感じる。自分で捕まえることで愛着をもち、自分なりの方法で大切にしようとする。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	友達と一緒に10までの数唱をし、それ自体が楽しい。 同じ入れ物に入った水などの「同じ量」が分かる。 5歳児の遊びから、憧れの気持ちをもち、看板に書いたりお金を作ったり遊んだりすることを知り、自分なりの絵や線で描く。
(9) 言葉による伝え合い	言葉のイメージや響きのおもしろさや楽しさを味わう。 やりたいという自分の思いが言葉に表れ、相手に思いを伝えようとする。 絵本や物語にある新しい言葉に出会って興味をもち、真似て役になりきったり、言葉を使う楽しさを感じたりする。
(10) 豊かな感性と表現	遊びや生活の中で、色や形、動き、音の強弱、高低など、美しいものや心を動かす出来事、ものに出会う。 興味・関心をもち、感じたことや考えたことを自分から動きや言葉に表現したり、なりきって遊んだりするを楽しむ。

第Ⅱ期：4歳児後半～5歳児前半（遊びが充実し自己発揮する時期）

	幼児の姿
(1) 健康な心と体	一日の流れに見通しをもち、学級みんなでの活動を楽しみに感じて生活する。 周りの状況や自分の身体の調子を考え、どうするのか自己決定し、行動する。 自分たちが育てた野菜に愛着をもち、感覚を働かせながら調理活動に参加する。 少し難しいことに挑戦したい思いをもち、新しい活動に繰り返し挑戦する。友達の姿に刺激を受け、一緒に遊ぶ中で相手の動きに応じたり真似たりする。
(2) 自立心	自分のイメージを教師に伝えたり、互いに共有したりして仲間意識をもって行動する。 教師の仲介を受けながら、互いの行動や思いを受け止める。継続的な動植物の世話の中で愛着が育まれる。
(3) 協同性	自分とは異なる友達の思いや考えに気付き、自分の行動を振り返り、気持ちの表し方を考えて伝え合おうとする。 友達と自分のイメージが重なることで共通の願いをもち、自分なりの役割を見つけたり、友達のよさを感じたりして、伝え合い、受け入れ合いながら活動を楽しむ。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	教師が入ることで冷静になり、自分の行動を振り返ったり、葛藤しながらも気持ちに折り合いをつけたり、思いや考えを出し合い互いにより方法を考えたりする。また、今までの体験から友達の気持ちを察したり共感したりする。 当事者でなくても、解決に向けてとりなしたり考えを言ったりする。
(5) 社会生活との関わり	国旗とテレビなどで扱われる情報をつなげて話す。国旗を見比べて共通していることや違いに気付く。 体験を通してマナーを知り、守りながら行動したり、大変さに気付くことで昔の人々を誇りに思ったりする。 繰り返し関わる中で、祖父母や園外の他者と触れ合う心地よさを感じ、親しみの気持ちや大切にする気持ちをもって接する。

(6) 思考力の芽生え	今までの経験や友達のやり方を見て使う道具や材料を選んだり、やり方を真似たりする。自分の知っていることを利用したり友達と意見を出し合ったりしながら、目的を共有し思いを実現しようと試行錯誤する。
(7) 自然との関わり・生命尊重	生き物の観察や植物で遊ぶ体験を通して、予想と違うことを目の当たりにしたり、不思議さや生命の尊さを感じたりする。また、生き物の立場になることで心配したり、考えたりしながらいたわり守ろうとする。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	生活経験からチケットや案内表示の役割を知っており、自分たちで作ろうとする。看板上に数字を書き、文字は教師に書いてもらう。 三角や四角の形を組み合わせ矢印を作り向きを考える。 高さを自分の身長と比べる。作るために必要な量を考える。
(9) 言葉による伝え合い	相手に自分の思いを伝えるために、具体物を使ったり、言い方を変えてみたり理由をつけたりして話し方を考える。 生活の中の具体的なものが文字と結びついていることが分かる。 友達と一緒に言葉のもつ美しさや響きを楽しみ、絵本の世界観を感じる。 初めて出会ったものに直接接触れる中で特徴を感じ、それを捉えて自分なりに新しい言葉を生み出す。
(10) 豊かな感性と表現	やりたいことが明確になり、思いを膨らませ、友達とつながりながら一緒に表現する過程を楽しむ。友達の思いや考えに共感し、よさを認める。 認められること、友達と一緒に表現したことに対して満足感を味わう。

第Ⅲ期：5歳児後半（人間関係が深まり学び合いが可能となる時期）

	幼児の姿
(1) 健康な心と体	共通の目的があり、活動の見直しをもって、互いに役割分担したり協力したりしながら遊ぶ。 危険を予想し回避するための方法を考える。 今までの経験の積み上げから、健康に過ごすために必要な活動の意味がわかり、自分で判断し行動しようとする。 友達の姿に刺激を受けて苦手なことにも自分から粘り強く取り組む。友達の頑張っている姿を見て、教えたい、応援したい気持ちをもつ。
(2) 自立心	友達の特徴や役割を考えて行動する。 共通のイメージをもち、本物らしさを求め多様な方法で実現し自信をもつ。
(3) 協同性	友達と共通の目的に向かって仲間意識をもち、みんなで力を合わせようと、自分の気持ちを抑えたり切り替えたりする。 イメージの実現に向けて、個々のよさや持ち味を発揮し、試行錯誤しながら協力してやり遂げる充実感を感じる。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	友達の心の動きや状況を推し量り、思いやりをもって行動しようとする。 自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりして、自分の行動を振り返り、気持ちに折り合いをつけて自分の行動を調整しようとする。
(5) 社会生活との関わり	外国に興味をもち、国旗を描いたり、場所などの情報を知ろうとしたりする。また、図鑑などで自分の探求したい情報を調べる。 身近な施設を利用したり、遊びを通して自分の地域の武将に対して憧れや興味をもったりして、地域を誇りに思う気持ちをもつようになる。 お世話になったという思いから感謝の気持ちをもつ。 自分の思いを伝えたり、他者と共に活動したりすることの喜びを感じると共に、

	相手に喜んでもらうことで自己有用感を感じる。
(6) 思考力の芽生え	過去に見たことや経験したことを生かし、友達とアイデアを出し合う中で折り合いを付けて遊びを共有し、必要な材料や道具などを選び見通しをもって遊ぶ。 役割分担し協力しながら遊び、うまくいかないところを試したり工夫したりしながら改良する。
(7) 自然との関わり・生命尊重	友達の興味関心や疑問をクラスみんなで受け止め、自分なりの意見を持ちやりとりしたり、実際に確かめてみたりする。 好奇心をもち、自分たちで調べ育てる体験を通して、植物の変化や季節の移り変わりを感じ取る。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	今までの遊びの体験から、文字や絵が相手に伝える手段として有効なことが分かり、看板等を作ることを思いつき、書く内容を考えて文字を自分たちで書く。 遊びに必要な量を考える。 繰り返し試して比べながら、自分たちのやりたい高さ、大きさ、量、速さになるようにする。
(9) 言葉による伝え合い	場の状況や相手との関係性に着目して言葉を選び、思いを伝える。伝わる経験を通して、言葉で伝えるよさを感じる。文字を使って書くことで自分たちの遊びが楽しくなる経験をする。 言葉からくるイメージや動きを具体的に表現することを楽しむ。 知らないものを図鑑や本などと照らし合わせて明らかにしていく中で、新しい言葉を獲得する喜びや満足感を味わう。
(10) 豊かな感性と表現	友達と一緒に工夫して創造的な活動を生み出し、表現する喜びを感じている。 表現したことに対して自分なりに感じたり考えたりし、みんなで振り返ることができる。 みんなで表現したことに充実感や満足感を味わい、さらなる意欲が高まる。

【結果】

第Ⅰ期から第Ⅲ期の幼児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の項目ごとでまとめていくと、どの項目においてもそれぞれの発達段階を土台として、次の段階へとつながっていることが分かった。

例えば、(9)言葉による伝え合いでは、第Ⅰ期では、言葉がもっている意味は分からないが、イメージや響きのおもしろさや楽しさを味わっていた。そして、やりたいという自分の思いが言葉に表れ、相手に思いを伝えようとしていた特徴が見られた。第Ⅱ期は、友達と一緒に言葉のもつ美しさや響きを楽しむようになり、相手に思いを伝えるために、具体物を使ったり、言い方を変えたり理由をつけたりして話し方を考えていた。第Ⅲ期は、場や状況や相手との関係性に着目して言葉を選び、思いを伝えていた。また、思いが伝わる経験を通して、言葉で伝えるよさを感じていた。さらに、知らないものを図鑑や本などと照らし合わせて明らかにしていく中で、新しい言葉を獲得する喜びや満足感を味わうという特徴が見られた。

一方で、事例による考察をもとにまとめたため、第Ⅰ期の(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚の「友達と一緒に10までの数唱をし、それ自体が楽しい」「同じ入れ物に入った水などの「同じ量」が分かる」等の姿のように、まとめた幼児の姿について全ての幼児がこの時期に示す姿なのか、この時期になると見られるようになり始める姿なのか、事例でのみ見られる姿なのかについて、明らかにすることが課題として残った。

(5) 発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成

(3)のキーワード分析では、教師の援助のポイントとして「共感する」「認める」「見守る」といった表現が、どの発達区分でも見られた。幼児の姿と同様にその示す内容が異なるのではないかと考え、教師の援助、環境の構成についても考察文より読み取り、キーワードが示す教師の援助や環境の構成について具体的に示すことで明らかにしたいと考えた。なお、まとめる際には、先にまとめたキーワードや幼児の姿を参考にし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」ごとにまとめていくこととした。

各発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成の結果は以下の通りとなった。

第Ⅰ期：3歳児～4歳児前半（初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期）

	教師の援助	環境の構成
(1) 健康な心と体	<ul style="list-style-type: none"> ・やり方や手本を教師が示し、意欲付けをする。 ・まずは思いを受け止めて認め、寄り添いながら一緒に考える。 ・恐怖心を和らげ安心感がもてるようにする。 ・幼児なりの気付きや納得ができるように促す。 ・遊びのイメージを投げかけ、幼児と一緒に遊びながらイメージを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・常に目に触れる場所、すぐ手に取れる場所に置く。 ・分かりやすい表示、発達に沿った時間の流れの設定 ・安心感の中で安全に遊べる場の設定 ・一人一人の幼児との関係を軸に、友達同士の深まりに留意する。 ・紙芝居、模型など具体的な物で示す。 ・傾斜などチャレンジしたい意欲をかきたてる場の設定
(2) 自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちに共感し受け止め、信頼感をもてるようにする。他の幼児とつなぐように言葉をかける。 ・気持ちが向くような言葉かけをする。 ・納得できるように考えを聞きながら話をする。 ・遊びながらやり方を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近に感じられる玩具 ・やりたいと思うような魅力的な環境を作る。 ・幼児が使いやすい安全な道具を用意し、片付ける場所を明確にする。 ・ゆったりと過ごすことができる存在と時間
(3) 協同性	<ul style="list-style-type: none"> ・思考を焦点化して状況を整理できるように問い返す。 ・共に考えている姿を肯定する。 ・個々の思いを認めながら、互いに問いかけることで気持ちの調整を図る。 ・自分の行為を振り返るきっかけを作り、自分で考えて行動できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師も一緒に体験して共有する。 ・日々の環境の管理、小動物のいる環境作り ・異年齢児の遊びを見たり一緒に遊んだりできる場の保障 ・見通しのもてる1日の流れ

<p>(4) 道徳性・規範意識の芽生え</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを受け止め一緒に遊びながら、自分で気付けるように声をかける。 ・具体的にモデルや選択肢を示すなどして、自分で決めて行動できるようにする。 ・相手の気持ちを大切にされた行動を認め、相手に伝わる嬉しさを感じられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に言葉を示す。 ・互いに納得するまで向き合う場を作る。 ・まだ使える物は棚に戻す。 ・魅力的だが数が少ない物を用意する。 ・自分の思いを伝えられるような雰囲気作り
<p>(5) 社会生活との関わり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の疑問や驚きに共感し、思いを受け止める。 ・行動のモデルを分かりやすく説明し、教師自身が示す。 ・経験を遊びに生かそうとする姿を認める言葉をかけ、素材の提案をする。 ・祖父母と触れ合う機会を作り、関わることの楽しさや喜びが味わえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目に見える場所に掲示する。 ・事前に下見や打ち合わせを行い関係作りをする。 ・友達と共に遊べる広い空間で遊びやすい場を作る。 ・自分より年齢の小さい友達の存在 ・日頃親しんでいる遊びコーナーの配置
<p>(6) 思考力の芽生え</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・試行錯誤しているときは、教師も一緒に考えたり試したりする。 ・自分だけでは難しいことは手伝う。 ・様子を言葉にして伝えたり幼児が自ら気付くように問いかけをしたりする。 ・幼児の思いに寄り添った言葉を返し、思いを汲み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然を生かし、身近な場所に用意する。 ・目につく場所に見本や道具を置き、幼児の願いにすばやく応じる。 ・空間を用意し、場の工夫をする。
<p>(7) 自然との関わり・生命尊重</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児のありのままの動きや言葉を受け止め、自分なりに生き物に関わろうとする姿を認める。必要に応じて生き物の立場に立つような言葉を投げかける。 ・一人一人の驚きや発見を受け止める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に生き物に触れ、繰り返し関わる機会が生まれる場を保育室や、保育室の周辺に作る。 ・不安になったときに戻って来られる拠点の場
<p>(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの思っていることが分かるように声をかけ、思いが形にできるようにする。 ・幼児の気付きや発想の過程を認め、価値付けをしたりイメージや楽しさに共感したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・扱いやすい材料を準備する。 ・遊びに必要な道具が自由に選択できるようにする。 ・分かりやすい表示 ・数を数える経験の積み重ね
<p>(9) 言葉による伝え合い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動きや言葉で表現する姿を受け止め、友だちと一緒に遊ぶきっかけを作ったり、安心して表現できるようにしたりする。 ・教師もなりきって表現し、イメージを広げ楽しさを共有する。 ・幼児の思いに共感し、自分の思いを表現する一つの方法としてモデルを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れた場所で活動する。 ・幼児が興味をもつ題材をクラス活動で取り上げる。 ・身近なものを使って表現できる環境 ・扱いやすい積み木の種類、数 ・安心感

	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の思いや困っている言葉と動きを受け止める。 ・教師が役になりきって話したり動いたりする。動き方を具体的に言葉をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに見合えるコーナー設定 ・思いが高まっているときに素材を用意する。 ・扱いやすい物を用意し、自分で工夫できるようにする。
--	---	---

第Ⅱ期：4歳児後半～5歳児前半（遊びが充実し自己発揮する時期）

	教師の援助	環境の構成
(1) 健康な心と体	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに考えた行動を肯定的に受け止め、自分なりに試す姿を見守る。 ・具体的な動作やモデルを示す。 ・幼児が自ら気づき、自分で状況を判断し行動できるようにする。 ・絶対に守らないといけないことは具体的に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがもてるような1日の流れの設定 ・活動が分かりやすい場の設定 ・ねらいに沿った置き場の工夫、幼児のイメージを読み取り再構成する。 ・職員全体で保育する関係を築く。 ・事前の安全確認、下見 ・イメージを共有したり分かりやすくなったりするように可視化する。
(2) 自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで具体的にイメージして遊びを展開できるように、幼児の思いに寄り添い、提案する。 ・自信をもって考えられるようにする。 ・幼児の気持ちを丁寧に捉え、葛藤を受け止める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭の環境を生かす。 ・共通の経験 ・共に調べたり気づいたことを伝え合ったりする友達の存在 ・複数の図鑑や手に取れる場所 ・友達と共通の目的をもってがんばれる活動を取り入れる。 ・継続して遊べるよう場所の再構成をする。
(3) 協同性	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で気づき行動できるように、大きな身振りや幼児の求めに応じた動きをする。 ・すぐに答えを言うのではなく、周りの幼児を巻き込みながら、思いを伝え合うきっかけ作りとする。 ・相談に乗ったり、遊び仲間として参加したりするなど場に応じた役割を担い、幼児に任せる場面と援助する場面を見極める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動能力に合わせて場の広さ ・遊びが継続できるように場を残す。 ・幼児と一緒に置き場所を決める。 ・自由に使える素材を普段から準備しておく。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の話聞きながら、相手の様子に気付くまで見守りつつ待ち、状況を整理し、解決方法について考えを出し合えるようにする。 ・幼児の気づきに共感し、心の揺れを見守りつつ気持ちの調整や折り合いの付け方を認めていく。 ・経験を通して約束やルールの必要性を理解したり確認し合ったりできるようにし、 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が先に判断せず、幼児と話し合う中で気付けるようにする。 ・共通の問題意識 ・道具は葛藤や交渉が生まれるように少数にする。 ・体験の積み重ね ・勝敗のある遊び ・思いを巡らせる十分な時間の確保 ・思いを伝えられる雰囲気作り

	見守る。	
(5) 社会生活との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児にとって身近な国旗、国旗の形や色の相違に気付けるように見せる順番を工夫する。 ・マナーや挨拶のモデルを教師が示す。 ・経験したことを遊びにつなげる姿に共感し、認め、共に楽しむ。 ・意欲的に活動に取り組めるように幼児の姿を認める。 ・安心、安全に遊べるようにする。 ・ねらいに沿った活動の機会を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味を引く教材 ・活動に適した大きさの素材 ・事前の打ち合わせ、関係作り ・幼児のイメージに合った素材の準備 ・外部講師に活動の趣旨を伝える。 ・活動しやすい場の設定
(6) 思考力の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちなりに解決しようとする姿を認め、作り上げた喜びに共感する。 ・幼児が行動の理由を意識し、言語化できるように質問をする。 ・幼児の姿やイメージに共感し、共に行動し、励ましたり提案したりして友達と活動できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本物の道具を取り入れる。 ・自由に使える遊びの道具 ・事前に予想して十分な量の素材と用具を準備する。 ・幼児の興味関心を汲み取った環境を整える。
(7) 自然との関わり・生命尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物を大切にしようとする思いを受けとめ、幼児なりの発想で実現しようとする姿を認める。 ・幼児の気付きや意見を出し合い、自然に対する関心がより深まるような雰囲気作り。 ・幼児と共に感じたり、他の幼児にも伝えて考える場をもったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物について調べられる状況作り ・幼児の考えたことが試せる場 ・観察しやすい容器や用具の準備 ・身近な自然の安定感、季節感 ・自然の香り、触覚、雰囲気 ・園内の自然環境の保持、継続した関わりの保障
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	<ul style="list-style-type: none"> ・しようとする姿を認め、具体的に示したり、適切に使えるよう支えたりする。 ・幼児自身で意識できるように意味付けたリ価値付けたリする言葉をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要感が生まれるような場や空間の設定 ・異年齢の友達と関わりを楽しめる関係作り ・比べる・繰り返し試す・模倣するといった経験が生まれるような環境を構成する。
(9) 言葉による伝え合い	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児なりの表現と本来の名前がつながるような声かけをする。 ・絵本と現実との世界観を楽しんだり、イメージが膨らんだりするように関わる。 ・幼児の思いに共感し、一緒に調べたりモデルを見て援助したりする。 ・友達と一緒に考えるよう提案したり幼児同士をつないだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内の自然環境を整える。 ・5歳児の行動をモデルとする。 ・みんなで共有できる時間を設ける。
(10) 豊かな感性と表現	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びに共感して見守り、イメージに合う素材を提供する。 ・幼児の考えを分かりやすく言葉にして受 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児だけの活動の場を確保する。 ・話し合っていることや決まったことを視覚的に分かるようにして友達

	け止め、周りの幼児が理解できるようにする。	と共有できるようにする。 ・静かに遊びに集中できる場を用意する。
--	-----------------------	-------------------------------------

第Ⅲ期：5歳児後半（遊びが充実し自己発揮する時期）

	教師の援助	環境の構成
(1) 健康な心と体	<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児や4歳児が憧れの気持ちで見ていることを伝える。 ・自分たちで判断できるように具体的に情報提供や、思考を促すような言葉かけを行う。 ・お互いに伝え合っている姿を見守りながら、必要に応じてアドバイスや提案をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・広い場で友達とたくさんの物を使って遊ぶ経験ができるようにする。 ・幼児と作るルール ・安全に遊ぶための点検・補修とともに教師間の連携をとる。 ・ゲストティーチャーの活用 ・見ながら考えられるような工夫 ・活動に合わせた場の構成
(2) 自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・揺れる思いに寄り添い、それぞれのよさを発揮し、思いが実現でき、自信につながるように言葉をかける。 ・イメージが膨らむように口調や動きを工夫する。 ・幼児に寄り添いながらアイデアを伝え、自分たちの力でやり遂げた体験となるように支える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで使える場の設定 ・広い空間 ・幼児の必要感を待ち、素材を提示する。 ・本物らしい掲示の提案 ・取り組む時間を十分に取る。 ・視覚的に分かりやすい状況を用意する。
(3) 協同性	<ul style="list-style-type: none"> ・予想や期待を相手に伝えながら共通の目的をもととする姿や、活動を見通そうとする姿を認め励ます。 ・必要に応じて言葉を補いながら、言葉や話し方に気付けるようにする。 ・悩んでいる姿を捉え、あえて見守りながら幼児たちの言葉を引き出し、自ら気付く喜びが味わえるようにする。 ・行動を振り返り、学級みんなで考える時間をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と力を合わせて使うと楽しくなる材料を準備 ・必要な道具を用意し、安全確認を行う。 ・得点やチームが分かりやすくなるような物の準備 ・場の保障
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・見えない気持ちの揺れや動きを感じ取り、幼児を信じて見守る。 ・一緒に遊んでいた友達と共に話し合うことで、話し合いのやり方に気付けるようにする。考えを認め、気持ちに折り合いをつけ、気持ちを切り替える姿を励ます。 ・友達の新しい一面を発見できるように、思いを十分に聞く機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適度な距離からの見守り ・自分たちで整理できる物の準備 ・トラブルやルールを話し合う機会とし、時間を十分に設ける。 ・相手の様子がつかめるよう少人数での活動の場を設ける。 ・遊びが継続するために、互いに意見を伝えられるように教師がモデルを示す。
(5) 社会生活との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の話を取り上げながら、国旗だけでなく国に興味が向くようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・可視化して掲示する。 ・繰り返し体験の積み重ねをする。

	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に話をするなど行事が単発にならないようにする。 ・幼児が自分で調べ、情報を得ていこうとするきっかけを作る。 ・本物みたいにしたいという思いに共感し、実現できるように一緒に考えたりヒントを提示したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本物に出会う体験 ・身近な場所に必要な情報が載っている本などを用意しておく。 ・思いが実現できる材料や道具
(6) 思考力の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに手を貸さず、幼児の思考を見守ったり、紹介する場を設けたりする。 ・イメージや考えを明確に意識できるように言葉にして伝える。 ・互いに自由に発言できるようにし、幼児同士で解決できるように促す。 ・幼児たちと仲間になってイメージを広げたり提案をしたりして、幼児の気持ちに共感する。 ・経験に裏打ちされた思考を大切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に材料を使えるコーナー ・大きさや厚み質感の異なる素材 ・安全に遊ぶための場の設定や事前の確認 ・物の少ない環境設定 ・様々な工夫ができるように事前に材料を準備する。 ・試行錯誤して挑戦する環境を保障する。
(7) 自然との関わり・生命尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・全体の場で話す機会を設け、幼児の意見を引き出す役に徹する。 ・幼児なりに予想し、見通しをもてるように促す。 ・変化に気付く様子を見取り、共に驚いたり発見の喜びを受け止めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・考える日にちを確保する。 ・偶然を生かす。 ・園外の人との関わり ・直接試すことができるように用具を準備する。 ・幼児の発見を廊下などに掲示する。 ・学年を超えた関わりを通して季節の体験を継続する。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	<ul style="list-style-type: none"> ・共通の目的を提案し、お互いの考えを出し合う機会を設け、めあてを明確にする。 ・必要なものに気付けるように提案し、自分なりの役割を果たせるように支える。 ・発想を引き出すための問いかけや、気付きを促すための援助を行う。 ・幼児の遊びを見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的に分かりやすいように場の配置を工夫する。 ・大きさ、形、高さなどが異なる素材 ・遊びを予測し、材料を準備する。
(9) 言葉による伝え合い	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに答えを出さず、ヒントとなるような言葉をかけ、自分で考える時間を作り調べる意欲を高める。 ・興味をもったタイミングを逃さずに関わる。 ・幼児の思いを代弁するような尋ね方をしたり具体的に言い方を伝えたりしながら、思いを出し合って話す機会を設け、満足感が味わえるようにする。 ・文字を使う必要感が感じられる援助をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べるきっかけとなるものを置いておくと共に、調べようと思ったときに調べられるように準備しておく。 ・学級での話し合いの仕方を工夫し、楽しみながら話し合える雰囲気を作る。 ・幼児が必要に応じて自由に使える素材や用具を準備する。

(10) 豊かな感性と表現	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の一員として一緒に進めていこうとする姿勢を認める。 ・自分たちで作ることで意欲を高め、役をイメージできるようにする。 ・自分のイメージや考えを伝えられるように話し合える場を作り、考えを伝えられるように後押しする。うまくいった手応えを感じ、自信をもって表現できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほどよい数の選択肢と選択・決定の機会 ・イメージに合った材料や道具 ・場を保障する。
---------------	---	---

【結果】

援助を見ていくと、第Ⅰ期は幼児と共に行動しながら、思いを引き出したり受容したりすることが多いことが分かる。第Ⅱ期になると、幼児の近くで行動しながら、幼児同士を橋渡しする援助が出てくる。第Ⅲ期になると、見守るといった一歩幼児から離れたところからの援助へと変化していることが分かった。例えば、(4)道徳性・規範意識の芽生えでは、第Ⅰ期は思いを受け止め一緒に遊びながら、自分で気付けるように声をかけたり、具体的にモデルを示したり選択肢を示したりして、自分で決めて行動できるように援助していた。第Ⅱ期では、教師が先に判断せず、幼児と話し合う中で気付けるように状況を整理したり言葉で橋渡ししたりしていた。第Ⅲ期では、一緒に遊んでいた友達と共に話し合うことで話し合いのやり方に気付けるようにしたり、考えを認め、気持ちに折り合いをつけ、気持ちを切り替える姿を励ましたりするという援助が特徴として見られた。

また、同じ「共感」という言葉を使っているも、第Ⅰ期は幼児の思いや行動をありのまま「共感」していた。第Ⅱ期になると、幼児の意図を汲み取りながら思いに「共感」していた。第Ⅲ期になると、幼児の表面に表れている思いや行動の結果だけでなく、その過程についても認め「共感」していた。

教師の援助や環境の構成は、幼児理解に基づいて行われていることも明らかになった。例えば、先に述べた(9)言葉による伝え合いの幼児理解に沿って考えてみる。第Ⅰ期では、イメージや響きのおもしろさや楽しさを味わっていた。そのため援助では、教師もなりきって表現し、イメージを広げ楽しさを共有していた。第Ⅱ期では、相手に思いを伝えるために、具体物を使ったり、言い方を変えたり理由を付けたりして話し方を考えていた。そのため援助では、幼児の思いに共感し、一緒に調べたりモデルを示して援助したり、友達と一緒に考えるよう提案して幼児同士をつないだりしていた。第Ⅲ期では、場や状況や相手との関係性に着目して言葉を選び、思いを伝えていた。また、知らないものを図鑑や本などと照らし合わせて明らかにしていく中で、新しい言葉を獲得する喜びや満足感を味わっていた。そのため、援助では調べるきっかけとなるものを置いておくと共に、調べようと思ったときにすぐ調べられるよう準備していた。また、幼児の思いを代弁するような尋ね方をしたり、具体的に言い方を伝えたりしながら、思いを出し合って話す機会を設け、満足感が味わえるようにしていた。

2 教育実践と学びの共有

(1) 生活場面における事例の中の学び

本園では、これまでも多くの事例を収集し、教育実践と学びの共有を図ってきた。その事例の多くは、日々の遊びの中で多くの幼児たちが行った遊びを取り上げた内容が多く、生活場面や短時間で行われた遊びに視点を当てた事例は少なかった。言うまでもなく、幼児は遊びだけでなく、日々の生活場面でも多くの学びをしている。


そこで、平成 28 年度、神戸大学附属幼稚園が全国の国立大学附属幼稚園が行った先行研究の様式を活用し、事実と解釈を書き分けた実践記録を通して、生活場面でどのような学びの姿が見られるのか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながるのかを明らかにしていくこととした。同時に、教師の読み取りや意図を書くことで、日々の教育を振り返り教師の評価の視点とすることができるのではないかと考えた。

事例の様式については以下の通りである。なお、例示による書式及び詳細な工夫については、次頁を参照されたい。

- <様式について>◎は神戸大学附属幼稚園の様式
○は本園が今年度加えた点
- ◎事実を基に幼児の学びを捉えられるように、事実と解釈を書き分ける。
 - ◎必ず幼児の事実に基づいて、一人一人の幼児の内面を解釈する。
 - ◎どの資質・能力の観点からの解釈かを記録者が自覚的に分析できるように、事実を解釈する際に、発揮、伸長している資質・能力の観点を明記する。
 - その際、見られた資質・能力について、10 の姿で記述する。
 - ◎環境の構成や教師の援助の事実を振り返り、そのときの教師の意図を明らかにする。
 - その際、教師の援助の評価の観点としても振り返り記述する。

事例として、3 歳児 3 事例、4 歳児 5 事例、5 歳児 4 事例収集した。その中で、本報告書には、各年齢 1 事例を示す。

事例収集を通して、片付け場面、食事場面など生活場面での幼児の姿や学びに着目することで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識し、日々教育することができた。また、教師の援助や見取りを事実と分けて書くことで、客観的に事例を振り返り、自分自身の教育の中での言葉の選び方、援助の仕方について評価の視点をもつことにつながった。

平成 29 年 8 月 4 日	3 年保育 3 歳児		
みんなでおいぎりを食べよう			
事実	・ 解釈 ◎教師の意図		10 の姿
<p>夏休みの登園日の夕方。これから誕生会があり、その後おいぎりを食べる。今まで組の友達と弁当を食べたことはあるが、2 学級一緒においぎりを食べるのは初めてである。誕生会の前にみんなで集まって話を聞く。</p> <p>教①「もう少ししたらお誕生会が始まるでしょ？その後」 A（教師の話の途中ですぐに発言する。）「おいぎり」</p> <p>教①「その後おいぎりを食べるよね？なので、おいぎりのお話をします」 A「梅干しもある？」</p> <p>教①「梅干しもあるかもしれないね」（絵本「おいぎり」の読み聞かせを始める。） A（絵本の梅干しの絵を見つけて立ち上がり、絵本の方を指さしながら）「あ！梅干し、梅干し。（両手をグーで握りながら大きな声で）酸っぱい、酸っぱいの。ばあばんちにもあった」 B「Bちゃんちにもある」 C「ぼくんちにも、ぼくんちにも」</p> <p>教①（絵本を見せながら）「みんなもご飯に梅干しを乗せて、ギュッ、ギュッ、ギュッ」 A（立ち上がり、大きな動作で両手で握ったり足でリズムをとったりする。） 教①（絵本を見せながら）「みんなも海苔を巻いて」 A（海苔を巻きながら）「あああ、引っ付けちゃった。引っ付けちゃった」</p> 	<p>◎この日の活動の流れを知らせ、見通しをもってほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おいぎりを食べることを楽しみにしている。 <p>◎おいぎりの絵や作り方を見せて、これから食べるおいぎりに興味や楽しみな気持ちをもってほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おいぎりに入っている中身を予想し、教師に尋ねている。 <p>◎幼児の思いを受け止め、期待感をもって見ることができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・梅干しを食べたことを振り返り、梅干しについて感じたことや知っていることを伝えようとする。 <ul style="list-style-type: none"> ・友達の発言を聞き、自分も同じことがあったことを思い出し、教師に伝える。 <p>◎絵本の内容のように自分も動作をつけてみることで、おいぎり作りを楽しんでほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ご飯を握っておいぎりを作ることに楽しさを感じている。 <p>◎絵本の内容のように自分も動作をつけてみることで、おいぎり作りを楽しんでほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海苔がご飯に付いたことへの喜びを教師に伝える。 		<p>健康な心と体</p> <p>言葉による伝え合い</p> <p>豊かな感性と表現</p> <p>言葉による伝え合い</p>

<p>教①「引っ付いちゃった？みんなはどう？」</p> <p>C (何回も両手で丸めた後、教師に手のひらを見せ、にっこりしながら) 引っ付いちゃった」</p> <p>D (A、Cの方を見た後、自分の手のひらを見る。教師に手のひらを見せながら) くっ付いてないよ、くっ付いてないよ」</p>	<p>◎友達のイメージを共有し、自分の思いを教師や友達に伝えてほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イメージしたことを教師に伝えている。 ・友達の思いを聞き、自分がイメージしたことを教師に伝えている。 	<p>言葉による伝え合い</p>
<p>教①「お腹がすいたから、みんなもおにぎりを食べようか」(幼児たち一人一人の顔の前に、おにぎりの場面の絵を提示して回る。)</p> <p>A (手を鼻と口の前に持ってきて目を閉じ、大きな声で)「すっぱ」(絵本からすぐに顔を遠ざける。)</p> <p>C「パクッ。(大きな声でにっこりしながら) おいしい」</p>	<p>◎以前にも読み聞かせで、食べる真似をして楽しんできた。今回も食べ物をみんなで楽しみながら食べてほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分がイメージしたことを、動作や言葉で表し、楽しんでいる。 ・梅干しおにぎりに興味をもち、食べる真似をすることを楽しんでいる。 	<p>豊かな感性と表現</p> <p>健康な心と体</p>
<p>教①「今日みんなもおにぎりを持ってきたよね」</p> <p>D「ぼく、お魚」</p> <p>E「わたし、たらこ」</p> <p>D「たらことお魚、入ってるよ、おにぎりに」</p> <p>F「ぼく、何も入ってない」</p>	<p>◎絵本で見たおにぎりをきっかけにして、実際に持ってきたおにぎりにも関心を向けてほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・持ってきたおにぎりの中身について教師に伝えている。 ・友達の発言を聞き、自分も教師に伝えようとしている。 ・友達の発言を聞いて他にも入っている食べ物を思い出し、付け加えて伝えようとしている。 ・友達の発言を聞き、自分のおにぎりは違う(具が入っていない)ことを伝えようとしている。 	<p>言葉による伝え合い</p> <p>言葉による伝え合い</p>
<p>教①「先生も何も入ってないことが多いけど、入ってなくてもとってもおいしいよね」</p> <p>A「梅干しジュース、作った。ばあばんちで作った」</p> <p>D「Dちゃん、包丁で切った」</p>	<p>◎具があってもなくても、どんなおにぎりでもおいしいことを伝えたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活を振り返り、知っている梅干しのことを伝えている。 ・友達の発言を聞き、自分も作ったことを教師に伝えようとする。 ・自分でおにぎりを作った話をみんなに紹介したい。 ・「切る」から「血」をイメージして伝えている。 	<p>健康な心と体</p> <p>言葉による伝え合い</p>
<p>教①「何を包丁で切ったの？」</p> <p>D「お魚」(指を見せて)「D、血は出ないよ」</p> <p>教①「Dちゃんが切ったお魚が今日のおにぎりに入っているの？」</p> <p>D(うなずく。)'さんま'(驚いている教師をじっと見ている。)</p> <p>誕生会が始まる時間になったので、誕生会に参加する。</p>	<p>◎具があってもなくても、どんなおにぎりでもおいしいことを伝えたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の思いを教師が整理し、みんなに分かるように伝えたい。 ・自分がしたことを振り返って伝えようとする。 	

学び (A)	絵本で食べ物の絵を見たり、友達と食べ物を作る真似をしたりして楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。	健康な心と体
<p>誕生会が終わり、おにぎりを食べる。もう一つの3歳児の組の友達や教師と一緒に食事をするのは初めてである。</p> <p>教①「さっきみんなでギュッギュッってしたおにぎりだね。食べてみてどうかな？」 B（にっこりしながら両手でおにぎりを握る真似をする。） 教②（おにぎりを持ち）「中身は何でしょう。ヒントは（表情を作りながら）うん！酸っぱいってなるもの」 AF「(大きな声で)梅干し！」 A(当たったことを知り)「やったあ！」 (ガッツポーズをしてにっこりする。) F（ガッツポーズをしてにっこりする。）」 教③「月組さん、星組のミニトマトだけど、配ってもいいですか？」 全員「ありがとう」</p> <p>教①「今日は月組さんと星組さんで初めて食べているけど、食べてみてどうかな？」 G（食べながら）「おいしい！」</p> <p>教①「星組さん、月組さんと食べてみて、どうかな？」 H「嬉しい」</p> <p>教④「Hちゃん、嬉しいんだって」 教①「月組さん、星組のHちゃんが月組さんと食べられて嬉しいんだって。ありがとう、Hちゃん」 H「いいえ」</p> <p>I「(教①に)何おにぎりですか？(教④と一緒に尋ねる。）」</p> <p>教①「(Iに)明太子おにぎりです」</p> <p>I（足をバタバタしてにっこりする。教④に）「(明太子を)パンに乗せてる」</p>	<p>◎おにぎりを握る真似をして楽しかったことを思い出しながら、おにぎりをおいしく食べてほしい。 ・おにぎりを作る真似をすることを再び楽しんでいる。</p> <p>◎おにぎりに興味をもったり、友達との食事を楽しく食べたりできるように、クイズを出し、雰囲気を作る。 ・教師や友達と食べ物に関するクイズをしながら、楽しく食べている。</p> <p>◎星組で育てたミニトマトを食べて、星組の友達に関心をもってほしい。 ・教師に感謝の気持ちをもつ。</p> <p>◎もう一つの3歳児の組の友達と食べるとおいしく楽しいという思いを感じてほしい。 ・友達と一緒に食べるとおいしいという思いを感じている。</p> <p>◎みんなで食べるとおいしく楽しいという思いを感じてほしい。 ・もう一つの年少組の友達と食べて嬉しさを感じている。</p> <p>◎星組の友達が、月組と一緒に嬉しいと感じていることを月組に伝え、他の組の友達について関心をもってほしい。 ・自分の思いを伝えようとしている。</p> <p>・他の3歳児の組の教師に関心をもち、自分が知りたいことを、教師と一緒に尋ねようとしている。</p> <p>◎教師に関心をもって関わってほしい。 ・教師から聞いた明太子を、自分の生活の中ではどう使っているか振り返り、教師に伝える。</p>	<p>健康な心と体</p> <p>健康な心と体</p> <p>言葉による伝え合い</p> <p>健康な心と体</p> <p>健康な心と体</p> <p>言葉による伝え合い 言葉による伝え合い</p> <p>言葉による伝え合い</p>

学び G	友達と一緒に食べることの楽しさを感じている。	健康な心と体
<p>【考察】 夏休みの登園日、3歳児の組と一緒に初めておにぎりを食べる。おにぎりについての絵本を見たり一緒に食べたりして、おにぎりを食べることへの興味や関心、期待感が高まっている。</p> <p>◆「健康な心と体」の観点から 登園日にみんなでおにぎりを食べることから、おにぎりの絵が描いてある絵本の読み聞かせを行い、持ってきたおにぎりのことについて尋ねたり、みんなでおにぎりをにぎる真似をして遊んだりすることで、これから食べるおにぎりに興味をもち、楽しみにしていた。また、もう一つの3歳児の組の友達や教師と食事をする機会を作り、友達と一緒に食べることの楽しさを感じることができた。</p> <p>◆「言葉による伝え合い」の観点から 幼児の発言に対して思いを受け止めることで、認められる楽しさや喜びを感じることにつながり、安心して自分の思いを教師に伝えることができた。また、友達の思いを周囲に紹介することで、たくさんの友達のことを知ったり、自分のことを振り返って考えたりすることができた。</p>		



平成29年7月3日	3年保育4歳児	
年長児の預かり保育のために積み木の部屋を片付ける		
事実	・解釈 ◎教師の意図	10の姿
<p>預かり保育は、積み木の部屋で行っている。通常は、13時45分の3歳児の降園から実施されるため、13時20分には片付けに入るようにしている。この日は、5歳児が個人懇談のため通常より早い13時30分降園、4歳児はいつも通り14時降園の日だった。</p> <p>積み木の部屋では、4歳児の幼児たちが積み木をたくさん出して遊んでいた。</p> <p>13時10分にやってきた教師は教「みんなごめんなさい。先生すっかり忘れてたけど、今日、年長さんお帰りが早くって、6になったらもうわくわく（預かり保育）に来ちゃうんだ」</p> <p>A「え～。4でお片付けって言ったのに？」</p> <p>教「そう。ごめんなさい。4からお片付けしたらどうなる？」</p>	<p>◎時間変更を忘れていたことは謝り、預かり保育に間に合うように片付けを始めてほしい。</p> <p>・教師が13時20分で片付けと伝えていたことを覚えていて訴えている。</p> <p>◎Aが教師の言った時間を覚えていたことを認めると共に、早く片付けに取りかからないといけない理由を考えてほしい。</p>	健康な心と体

<p>B「大変！わくわくさん間に合わなくなっちゃう？」</p> <p>教「そう、年長さんが困っちゃうんだ」</p> <p>C「急いで片付けなきゃ」</p> <p>A「そだね。年長さん困っちゃうもんね」</p> <p>教「ありがとう。先生も片付けるから、急いで片づけよう」</p> <p>幼児たちは、</p> <p>D「先生見て！2個重ねて運んでるよ」</p> <p>Aは板の上にカラー積み木を乗せ、「○くん反対持って」と言って運んでいる。他の幼児も、積み木を片付け始めた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもより早くに預かり保育が始まることが分かり、間に合わないことを予想している。 ・そのためにしないといけないことを考えて伝えている。 <p>◎幼児たちが片付けに気持ちを切り替えた姿を認めたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く片付けるために頑張っている姿を認めてほしい。 	<p>健康な心と体</p>
<p>学び（幼児たち）</p>	<p>積み木の部屋は預かり保育でも使う部屋だということが分かり、預かり保育に間に合うように積み木の部屋を片付けないといけないという見通しをもつ。</p>	<p>健康な心と体</p>
<p>E「先生、ぼく今日わくわく？」</p> <p>教「今日はわくわくじゃないけど、明日わくわくだよ。さ、Eくんも片付けるのがんばろうか」</p> <p>E「片付けない。まだ遊ぶ」</p> <p>教「遊びたいのはよく分かるけど、明日遊ぼうよ。Eくんがわくわくさんの時、積み木が残ってるからわくわくできませんってなったら困るでしょ？」</p> <p>Eはしばらく黙って周りの友達が片付ける様子を見ていた。</p> <p>A「Eくん早く片付けてよ」</p> <p>E「片付けない。まだ遊ぶ」</p> <p>A「わくわくさんできなくなっちゃうよ」</p> <p>F「そんな子は、わくわくさん来ないでって言われるよ」</p> <p>何人か幼児たちがEの周りに集まって言っている。</p> <p>教「そんなことは言わないけど、片付けてくれたらありがとうって言われるだろうね。Eくんももう片付けようって思っているから、そんな責める言い方だと嬉しくないよね」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が預かり保育の日なら片付けようと思っている。 <p>◎明日預かり保育だということを伝えることで、片付けの意欲を高めたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まだ遊びたい思いを伝える。 <p>◎思いを認めつつ、自分から納得して片付けに取りかかってほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・片付けないといけないことは分かっているが遊びたい思いと折り合いがつかない。 ・片付けていないEの姿を見つけ、指摘している。 ・友達に注意されたことで、意地をはり始める。 ・自分たちの考える理由や言葉でEを説得しようとしている。 ・徐々に責めるような口調になっている。 <p>◎片付けない幼児は利用できないということを言わないことを押さえない。言い方がきつくなり、Eが意地をはり始めているので周りの幼児の関わり方を変えたい。</p>	<p>健康な心と体</p>

<p>Eは黙ってうんうんうなづいた。幼児たちは積み木の片付けに戻り、Eの周りの積み木だけになった。</p> <p>そこに預かり担当の教師がやってきた。</p> <p>預「わあ、にじさんすごいがんばって片付けたね。ありがとう。Eくんも片付けてね」 E「片付けたらわくわくさんできる？」</p> <p>預「できるよ。Eくんは明日だから明日待っているね」</p> <p>Eは、積み木を持って立ち上がり片付け始めた。</p> <p>教「さあ、最後の仕上げがんばろうか」と幼児に声をかけた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ Eが責める言い方が嫌だということと教師の言葉の意味が分かり、片付けに戻っている。 <p>◎急いで片付けている姿を認めたい。片付けずに座っているEを見つけ、片付けるよう促したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Fの言った言葉が気になり確認している。 ◎その前のいきさつを知らず、片付けたら今日の預かり保育ができること、Eは明日利用する日なので待っていることを伝えている。 ・ 気持ちの折り合いをつけ、片付け始めた。 ◎Eが片付け始めた姿を認めると共に、最後まで片づけるよう声をかけたい。 	<p>協同性</p> <p>道徳性・規範意識の芽生え</p>
<p>学びE</p>	<p>予定より早い片付けの時間だったが、片付けの時間になったことを理解し、遊びたい自分の気持ちを調整し、自分から片付けにとりかかる。</p>	<p>道徳性・規範意識の芽生え</p>
<p>いつもは10分程度かかる積み木の片付けを5分ほどで終わらせた。</p> <p>E「わくわくさんできる？」 預「だいじょうぶ。ありがとう。間に合ったよ」 教「みんなで片付けたら早かったね」</p> <p>幼児たちは保育室に戻っていった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 預かりに間に合ったか心配している。 ◎間に合ったことを幼児たちに伝えたい。 	
<p>【考察】</p> <p>5歳児の降園時刻が早いことを幼児たちが知り、そのために預かり保育で使う積み木の部屋も早く片付けないといけないことが分かり、片付けに取り組んでいる。</p> <p>◆「健康な心と体」の観点から</p> <p>幼稚園生活も2年目に入り、幼児たちは積み木の部屋が降園後は預かり保育の部屋として使う部屋だという見通しをもっている。この学級の幼児たちは、預かり保育を利用したことのある幼児がほとんどで、「預かり保育の時間は積み木を片付け使わない」という約束もよく知っている。</p> <p>この日は、降園時刻の変更を教師が幼児に伝え忘れ、約束より早い時間に片付けを始めることとなった。早く片付けないといけない理由が幼児たちに分かってほしいと、教師は「4から片付けていたらどうなる？」など幼児に尋ねた。幼児たちは、教師が尋ねることで、今までの経験からお預かりのために片付けないといけないという見通しをもち、自分たちから片付けに取り組むことにつながった。</p> <p>◆「道徳性・規範意識の芽生え」の観点から</p> <p>Eは、片付けの時間になったことは分かっているが、まだ遊びたい気持ちを素直に教師に伝えている。教師はその思いを認めつつ、どうしないといけないか理解して自分から片付けに移って</p>		

ほしいと考え言葉をかけながら見守った。友達に片付けをしていないことを責められると、意地になって片付けないと言っていたEだが、預かり保育は毎回とても楽しみにしており、そのためFの「片付けない子は利用できない」という言葉は気になったと推察される。預かり保育の教師から、明日待っているという言葉聞くことで、安心したというより最後の気持ちの折り合いをつけて片付け始めたと考える。

平成 29 年 9 月 8～13 日		3 年保育 5 歳児		
おじいさんやおばあさんにお手紙をかこう				
事実		・解釈 ◎教師の意図		メモ
<p>登園後、家でかいた絵入りの手紙を持ち歩いているAがいる。</p> <p>教「おうちで作ってきたの？」 A「うん、おばあちゃんにあげるの」 教「そう喜んでくれるといいね」 A「いつもお世話になってるからね。お手紙を渡すの」 教「あ、もしかして、敬老の日があるからかなあ。敬老の日って知ってる？」 A「ん？」 教「おじいちゃんやおばあちゃんにありがとうっていう日だよ。みんなもお手紙つくりたいかなあ？」 A「わたしはしたい」</p>		<p>◎家庭での遊びを認め、どんな気持ちが込められているのか知って、次の遊びへのきっかけとしたい。</p> <p>・おばあちゃんに喜んでもらいたいと考えている。</p> <p>◎Aの手紙をきっかけに、祖父母にお手紙を書く活動につなげたい。</p> <p>・みんなもした方がいいのではないかと考えている。また、友達と一緒に手紙づくりをやってみたいと考えている。</p>		<p>社会生活との関わり</p>
学びA	<p>祖母にお世話になっていることを感謝し、手紙という形で伝えて喜んでほしいと考えている。</p>		<p>社会生活との関わり</p>	
<p>その日のみんなが集まる時にAの手紙と敬老の日の話をし、みんなで祖父母に絵か文字で「ありがとう」を伝える手紙をかくことになる。</p> <p>教「おじいさんやおばあさんにどんなことでお世話になっているかな」 A「幼稚園への送り迎えしてもらってる」 B「家事、自分の面倒を見てくれる」 C「会いに来てくれる」 D「ものを買ってくれる」 E「やさしいよ」 F「ちゃんと叱ってくれる」</p>		<p>◎どんなことにお世話になっているか、どのように祖父母が大好きなのか、祖父母に対する気持ちを引き出し、やる気をもたせたい。</p> <p>・それぞれが祖父母との関わりの中で、自分がしてもらっていること、自分への接し方、大切なことなどを考えて発表した。</p>		<p>社会生活との関わり</p>
学び（幼児）	<p>祖父母にどんな場面、どんなことでお世話になっていることを考えて発表している。</p>		<p>社会生活との関わり</p>	

<p>次の日、早速登園後に絵をかいたり、知っているひらがなをつかって文字を書いたり、教師に分からないひらがなを聞いたりしながら、手紙を書き始めている。</p> <p>教「誰にかくの？」 G「おばあちゃんにしようかな」 教「どんなお手紙にしたい？Gちゃんの好きなものの絵をかいてもいいし、おばあちゃんとGちゃんの絵をかいてもいいよ」 G「じゃあ、おばあちゃんと私の絵をかく」 F「好きなものかいてもいいの？」 教「うん、Fちゃんが好きなものを書いて、おうちの人が見て喜んでくれそうだったらいいんじゃないかな。」 F「そうか。喜んでくれるかな。じゃあ、そうしょ」</p> <p>教「Aちゃんは どうする？誰にかく？」 A「もうひとりのおばあちゃんにしようかな」 教「そうか、それいいね。2人のおばあちゃんのどちらかがいつもお迎えに来てくれるからね」 A「うん、そうだよ」 教「お手紙を書く？絵をかく？」 A「両方書こうかな」 教「そう、いいね。なんて書くの？」 A「いつもおむかえありがとうって書こうかな」 教「じゃあ、すてきなお手紙を作っかね」</p>	 	<p>◎ただ手紙をかくのではなく、誰に喜んでもらいたいのか、どんなことを伝えたいか考えながら、相手意識をもってかかせるようにしたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんが喜んでくれる手紙にしようとしている。 <p>社会生活への関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かわいい手紙を渡したら喜んでくれるかもしれないと、自分の好きなものを書くことを選んでいる。 <p>社会生活への関わり</p> <p>◎すでに祖母に手紙を書いているので、これからの活動が意味のある楽しい活動になるようにさせたい。</p> <p>◎お世話になっていること、愛されていることを意識させ、自分なりに表現させたい。</p> <p>社会生活への関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的にお世話になっていることをイメージして、感謝の気持ちを伝えようと文章を考えている。 <p>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</p> <p>言葉による伝え合い</p>
<p>学び（幼児）</p>	<p>祖父母からお世話になっていること、愛されていることに気づき、自分なりに思いを巡らせて、感謝の気持ちを表す。</p>	<p>社会生活への関わり</p>
<p>学び（幼児）</p>	<p>より自分の思いを伝えるには文字を書いた方がよいと、文字の必要性を感じ、自分の伝えたい思いを文字に書き表す。</p>	<p>数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</p>
<p>学び（幼児）</p>	<p>自分の祖父母への感謝の気持ちや大好きな気持ちを、文字化し、より分かりやすく伝えようとしている。</p>	<p>言葉による伝え合い</p>
<p>【考察】 友達のおばあさんへの手紙をきっかけに、敬老の日に合わせて、お世話になっている祖父母に対して手紙を書いている。具体的にお世話になっている内容を思い出したり、大好きな気持ちを思い起こしたり、「手紙を渡して喜んでもらいたい」という思いをもったりしながら、手紙をかく活動に取り組んでいる。</p>		

◆「社会生活への関わり」の観点から

学級で集まった時に、幼児におじいさんやおばあさんにどんなことでお世話になっているか聞いたところ、様々な意見が出てきた。友達の意見を聞いている幼児の顔が笑顔になっていき、自分の祖父母の好きなところを自慢するように意見を発表した。幼児が祖父母に対して温かい感情をもっていることが伝わってきた。幼児は、感謝を言葉に表したり、祖父母を喜ばせようとしたりと自分なりに考えて手紙を作成していた。

◆「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の観点から

自分の思いをより明確に相手に伝える手段として文字にすることを選び、知っている文字を書いたり、分からないひらがながあると、「先生、あ、見本書いて」と形を知りたがり、それを見て自分で書いたりして、手紙を書いていた。友達が文字を書いている様子を見て、さらに自分も文字で伝えることにチャレンジしようとする幼児が増え、半数以上の幼児が絵に文字を書き加えた。幼児は、文字の果たす役割の確かさを無意識に感じている。そして、自分で書けたことに満足しているようだった。

◆「言葉による伝え合い」の観点から

みんなで話し合ったときに発表したお世話になっている内容を思い浮かべ、手紙を受け取るおじいさんやおばあさんに喜んでほしい、思いを伝えたいという欲求が高まった。そして、喜んでほしいだけでなく、自分の思いを言葉で伝えたいと考えた幼児が多かった。半数以上の幼児が絵だけでなく、文字で自分の思いを伝えようとしていた。

(2) ドキュメンテーションによる学びの共有

(1)で述べたように事例を文章で記述し、教育実践と学びの共有を図ってきた。その中で、保護者や小学校教員、次学年担任等と幼児の学びを共有するためには、日々の記録や実践などを写真などに残し、可視化する「ドキュメンテーション」が伝わりやすいのではないかと考えた。

第1段階として、幼児たちが楽しく遊んでいるたくさんの遊びの中から、月に1つ、遊びを取り上げ、1枚にまとめていった。はじめは、あえて細かな形式は決めず、①幼児のつぶやき②幼児の思い③教師の読み取り、幼児の学びは必ず入れることとし、各教師の裁量で取り組んだ。

第2段階に向け、カンファレンスでそれぞれが書いたものを基に検討した。育っている姿を明確にするために、その事例でどのような幼児の育ちが見られるのか「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に④幼児の育ちを加えることとした。1つの遊びにはたくさんの育ちが見られるので、その中でも特に見られる育ちを2~3つ入れた。それによって、育ちを明確化すると共に、教師が幼児の育つ姿をさまざまな観点から見ているのか振り返ることができるのではないかと考えた。

第3段階に向け、カンファレンスを行った。その中で、各年齢を見比べたときに、教師の援助、環境の構成が明記されていると、より年齢の特徴、違いが分かるのではないかと、⑤教師が特に大切にしたい援助や環境の構成を教師のイラスト付きで加えることにした。そうすることで、教師が自分自身の援助や環境の構成を評価することにもつながると考えた。

このような検討を重ね、以下の様にドキュメンテーションの形式を定めた。

2学期1事例、3学期1事例を示す(53から59頁参照)。

《ドキュメンテーションの例》



- ①幼児のつぶやき
- ②幼児の思い
- ③教師の読み取り、
幼児の学び
- ④この事例から特に見られる幼児の育ち
- ⑤教師が特に大切にしたい援助や環境の構成

の5項目を整理して載せる。

ステージごっこ (3歳児) (11月)

10 豊かな感性と表現

園の発表会で、客席に向かって友達と歌ったり踊ったり楽器遊びをしたりして楽しんだことがきっかけとなり、保育室でのステージごっこが始まりました。

お客さんが座れるように椅子を用意しよう。

友達と一緒に歌うのが、楽しいな。

みんなあ！始まるよう！

みんなあ！見に来てえ！

カスタネットで遊ぶのは楽しいな。

僕もステージでマイクを使いたい！

ステージと客席に見立てた、大型積み木と椅子を準備しています。

ステージの上で、マイクを使い、CDを聴きながら歌ったりカスタネットを使ったり踊ったりしています。その楽しい雰囲気、真似をして次々とステージに上がったり、客役になったりしました。

マイクは、トイレトペーパーの芯と小さく丸めた色紙をセロテープでつなげて作っています。マイク作りは、1学期の後半から楽しんでいました。

客席では、CDを聴きながらカスタネットを使っています。

インタビューしたいな。

う～ん。

ステージにいる友達のために、ドングリ弁当を作ろう！

ごしごしシュツシュツ

作ったマイクを使って、客役の友達にインタビューの振りをしています。

ステージの上で遊んでいる合間に、疲れたということで、お風呂で身体をこすったり、友達が作ってくれたドングリ弁当を食べたりしています。元気が出ると、再びステージに上がります。

園の発表会で使った段ボール製の背景を、教師が折り曲げて保育室に用意すると、温泉ごっこが始まりました。「ごしごしシュツシュツ」の言葉は、他の組の劇中での台詞です。

共通体験を通して

集いの時間に、教師がマイクを持ち「あなたのお名前は」の遊びをみんなで楽しんだり、誕生会で司会役の5歳児がインタビューする姿を見たりして、インタビューごっこを楽しんでいました。

発表会や誕生会、集いでの遊びなどの共通体験を通して、友達と場を共有することで、「楽しい」「おもしろい」「してみたい」という思いにつながりました。



積み木でごっこ遊び (4歳児 10月)

- 3 協同性
- 8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 10 豊かな感性と表現

おばけトンネル



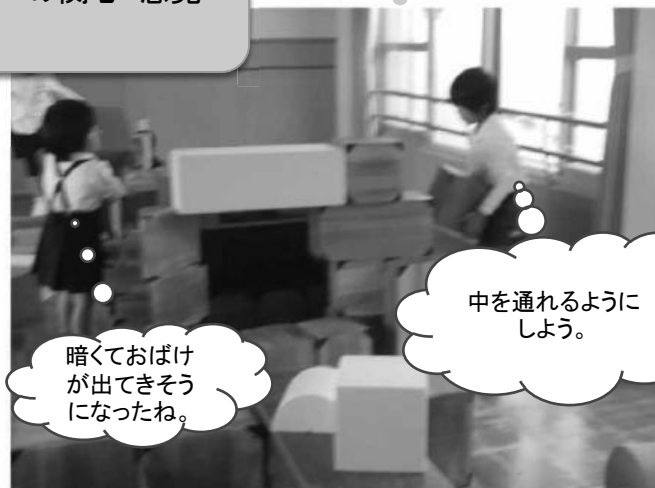
地球の平和を守るためがんばらないと。

それいいね！

わたしも入れて！

ここからパトロールに行くようにしましょう！

積み木の部屋では、自分のイメージを友達に話しながら基地やトンネル、家を作ったり、役に分かれて遊んだりしています。



暗くておばけが出てきそうになったね。

中を通れるようにしましょう。

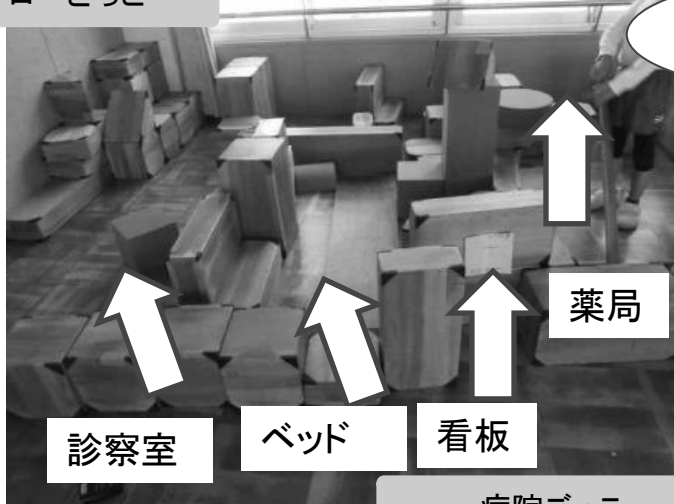
ヒーローごっこ



作りたいもの・やりたいことのイメージが細くなるからこそ..

同時にいくつかの場所でそれぞれのグループが作り始めると、使いたい形の積み木の取り合いになることも。何度も教師が入り話をすることで少しずつ、「どれなら使っていい？」「2個使いたいから貸して」「なら、これはいいよ」などやりとりできるようになってきています。

やりたい役やごっこ遊びの設定で意見が合わなくて言い合いになるときもあります。自分の思いを伝えることももちろんですが、「お友達の気持ちも聞いてごらん」と促すことで、お互いのイメージがつながったり、自分の考えに取り入れたりして「それいいね！」と遊び始めることが増えてきました。



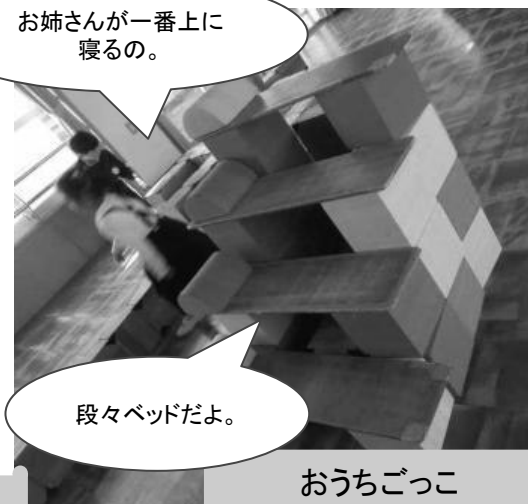
診察室

ベッド

看板

薬局

病院ごっこ



お姉さんが一番上に寝るの。

段々ベッドだよ。

おうちごっこ

10月になると、病院に行った経験を思い出しながら、積み木で病院を作って、病院ごっこを始めました。

病院には、診察室に先生の座る椅子とベッド、病室に半月の積み木を枕にしたベッド、薬局も隣に作ってあります。そして、入口には十字のマークに「にせき」と書いた看板もあります。

おうちごっこのおうちも平面から立体になってきて、これは4人きょうだいのベッドです。みんなで並んで寝て、今起きて仕事や学校に出勤しているところです。

旅行ごっこ①（5歳児 11月）

10豊かな感性と表現
6思考力の芽生え

壊れんようにガムテープでしっかり付けよう。



スーツケースが増えて、置き場にも困りました。教師が机を出し、一人一人の枠をビニールテープで区切っておき、場所を設定しました。すると、コインロッカー風に、お金を入れる機械ができ、個人の名前も書いて、毎日そこへ片付けます。

韓国に 出張に行ってきます！



モデルとなる
友達の遊びを広げて
～思考の継続、遊びの発展～

一人の幼児が、「スーツケースを作りたい」と言い、段ボールでスーツケースを作りました。その幼児がスーツケースを持って遊び始めると、他の幼児たちも次々にスーツケースを作って「旅行ごっこ」が始まりました。

スーツケースができると、早速、東京、羽田、ロシア等々、行き先を言って園内を闊歩し始めます。すると、国旗や時刻表に興味をわき・・・本で調べる。家に帰ってから、駅で時刻表をもらってくる。ツアーのように国旗を作って持って歩く。このように様々な遊びへ広がりました。長期にわたって思考がつながり、遊びのイメージが別の遊びへと発展していきました。

中も、2つに分けるで。



自分が作った作品の宝物や、旅行に持っていくアイテムを考え、書類なども入っています。



時刻表を調べたり、国旗をかいたりしています。



旅行ごっこ②（5歳児 12月）

9 言葉による伝え合い
5 社会生活との関わり
8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚



北海道に行くなら、どの飛行機かな。

時刻表やパンフレットを調べていると、一生懸命知っている文字を読み始めます。どんなツアーがいいか調べています。



遊びの意欲が途切れないように

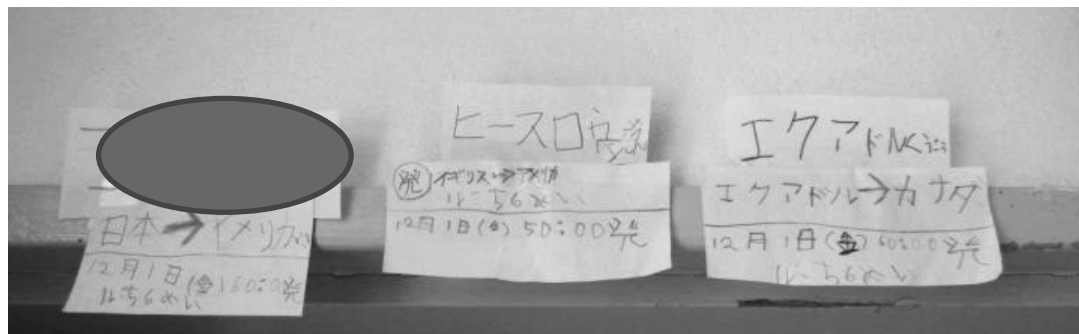
旅行ごっこから、パンフレットや時刻表を使った遊びが始まると、幼児たちの中から、「〇〇列車ごっこ」「〇〇旅行会社」の遊びが始まりました。一つの遊びが、次の新しい遊びへとつながっていきました。

教師は、幼児の思考が続いていこう、欲しがっていた列車のマークをプリントしたり、壊れた幼児のスーツケースと一緒に直したりと、援助を行いました。するとまた、遊びへの意欲が高まりました。

「〇〇旅行会社」のデスクで、幼稚園の部屋や遊具を使ったツアーを考えています。教師と一緒に絵や文字を使ってかいていきました。そして、それを真似て、自分でもツアーを考え始めました。



どんなツアーをつくらうかな？



自分が知っていることをもとに想像を膨らませて、世界旅行を考えます。すると、看板や目印を書き始めました。わかりやすく、そして、人の目につくように幼児たちの工夫は続きます。

軸付きのこま回し (3歳児)(1月)

教師と



先生、こうなったよ!

教師がこまを回していると、真似をして、いろいろなこまを回そうとしていました。

こま回し(軸付き)の道具を保育室に用意すると、こまに興味をもち、触ったり、回そうとしたりしていました。教師がいろいろなこまを回して見せると、自分も真似をして何度も回そうとしたり、次々といろいろなこまを試してみたりしていました。また、教師や友達がしているのを周りで見ている幼児もいました。

9 言葉による伝え合い 6 思考力の芽生え

教師・友達と



これとこれ、回せるよ。

友達がしているのをしばらく近くで見えていましたが、自分から試そうとしました。

こまの様子を見て



止まった!

小さいのと 大きいのがある。

こまの様子や気付いたことを教師や友達に伝えています。

さっき、こんなんになつた(逆さまで回っていた)!

止まるようにする



ぶつかってる。

ぶつかると止まるんだな。

止まれー!

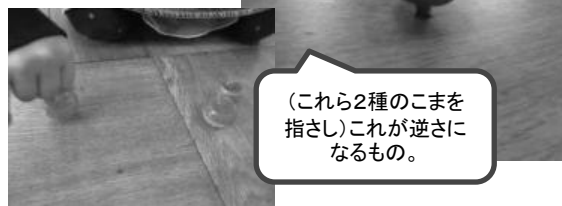
おもしろい。全部止まった。

カチカチ音がる。

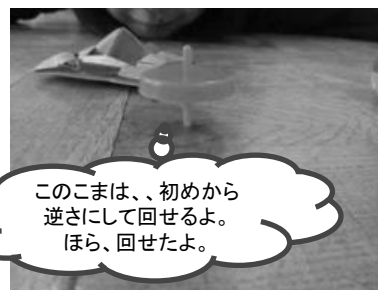


こま同士がぶつかると止まることが分ると、こまを止めようとしていました。また、たまたまあった水筒にぶつかっても止まる様子も見ました。ぶつかった時の音も聞いていました。

気付いたこと



(これら2種のこまを指さし)これが逆さになるもの。



このこまは、初めから逆さにして回せるよ。ほら、回せたよ。



これ、10秒以内に止まった。これ、すぐ止まっちゃう。

(回すと)きれい。

いろいろなこまを何度も回して試し、こまの特徴を自分なりの言葉で教師や友達に伝えていました。

教師が遊びを紹介して



教師がこま回しをやってみせ、遊び方を知らせることで、楽しさが感じられていこうとしています。その中で、思いを言葉で表現できるように、幼児の気持ちを受け止めたり、教師や友達の考えを紹介したりしています。

こま遊び (4歳児 1月、2月)

逆さこま

逆さに投げ
て回せるよ。



紐引きこま

もう一人で
できるよ。



紐引きこまの紐を、始めは教師と一緒に巻いていましたが、数回すると「自分でやってみる」と挑戦し、一人で巻けるようになりました。繰り返して遊んでいました。

持ち上げ
ても
回った！



何度も回して遊ぶうちに、色々なやり方を試して、軸を持って上げてもこまが回り続けること、てのひらに乗せても回っていることなどできたことを嬉しそうに教師に見せてくれました。

見て！てのひら
でも回ってる。



誰のが一番長く
回る？

最後まで
止まらんで。

せえのでしょ！

軸付きのこまを、始めは軸を持って回していましたが、しばらくすると逆さにして投げて回すことが始まりました。友達と「せえの」で投げて誰のこまが最後まで回るのか競争する姿も見られました。

- 1 健康な心と体
- 2 自立心

紐で回すこま

先生と一緒に
なら。



回った。



うまくできない。



保護者の方が紐でこまを回す姿を見て、自分たちも挑戦したくなった幼児たち。一人で紐を巻こうとしますがうまく巻けません。教師に紐を巻いてもらって一緒に投げる幼児、あきらめて別のこまで遊ぶ幼児がいました。

一人一人のめあ
てに寄り添って



色々なこまを環境として用意しました。軸で回すこまを軸も持って回すこと、紐引きこまの紐を一人で巻いて回すこと、紐で回すこまを紐を回そうとすることなど、一人一人が自分なりのめあてをもって挑戦する姿を認め、言葉をかけています。

必要に応じて一緒に紐を巻いたり、投げたりして、こまが回る喜びや達成感を感じることができるようになっています。回ると、嬉しくてずっとそばで回る様子を見ていました。

こま回し（5歳児 1・2月）



憧れの気持ちから
広がる遊び

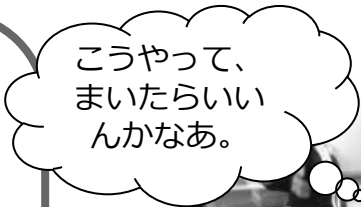
伝承遊びで最後にチャレンジし始めたのは、こま回し。紐の巻き方、巻く力加減、そして、紐とこまの持ち方、紐の引っ張り具合、投げ方など、なかなか難しいようでした。始めは教師がひもの巻き方を教えたり、友達の様子を見て真似たりしていましたが、そのうちに幼児同士が教え合い伝え合いながら、チャレンジの輪が広がっていきました。遊び方にも、工夫が見られます。的を作ったり、友達の真似をして技にチャレンジする姿も見られました。「こま名人」とみんなに認められる幼児もできました。

あらら。ひもがうまく巻けん。



こま回しが得意な幼児が紐を巻いている姿を見て、真似をしようとしています。次第に、「こうするだが」と教え始めました。

こうやって、
まいたらいい
んかなあ。



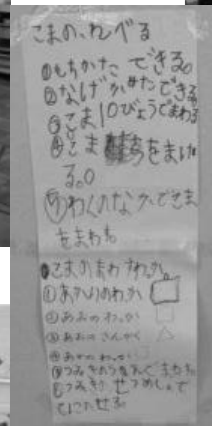
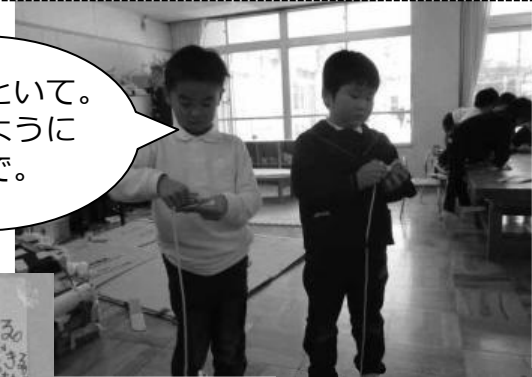
6 思考力の芽生え

1 健康な心と体

8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

小学生との交流や、誕生会での大人の人のお手本などを見て、チャレンジをする幼児が増えました。床にテープで的を作り、「一番大きいのが100点、この小さい枠が1000点」と目標を立て始めました。

先生見といて。
できるように
なったで。



四角や三角の的の中でうまく回せるようになる幼児、こまのレベル表をつくって貼る幼児など、様々な遊び方が見られました。集いでも面白いまわり方をするこまを回して紹介しました。

また、より幼児の育ちの系統性を見ていくため、10月・11月に「ごっこ遊び」、1月に「伝承遊び～こま遊び」を共通のドキュメンテーションのテーマとし、記録、検討していくことにした(53から59頁を参照)。そして、そのドキュメンテーションから読み取った幼児の姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に沿ってまとめ、考察を行った。

【ごっこ遊びから読み取った姿】

	3歳児 「ステージごっこ」	4歳児 「積み木でごっこ遊び」	5歳児 「旅行ごっこ」
(1)健康な心と体	・安心して楽器を使って、歌ったり踊ったりする。	・大型積み木を持って運ぶ、組み立てる、片付ける。	・旅行会社を開くための場や物を選び遊びを進める。
(2)自立心	・友達や教師の楽しそうな様子を見て、遊びに加わる。	・自分なりに考えてごっこ遊びの場を作る。	・教師や友達に助けを借りて自分で最後までやり遂げる。
(3)協同性	・友達と同じことをして遊ぶ。	・相手の気持ちを聞いて考える。	・実現のために、工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わう。
(4)道徳性・規範意識の芽生え	・楽器を大切に使う。 ・順番を待つ。	・友達に積み木を譲る。 ・みんなで使うものを大切に使う。	・作ったものを大切ににする。 ・作ったコインロッカーに片付ける。
(5)社会生活との関わり	・直前にあった発表会を遊びに取り入れる。	・自分が体験して得た情報を遊びに取り入れる。	・必要な情報を資料から見つけ、友達に伝えたり、計画を立てたりする。
(6)思考力の芽生え	・思いついたことをやってみる。	・友達の考えを取り入れながら、遊びを進めていく。	・より深い興味を抱き、興味をもったことなどを探究する。
(7)自然との関わり・生命尊重			
(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	・友達が座れるように椅子を並べる。	・形を生かして作る。 ・保育者に手伝ってもらって、看板を作る。	・パンフレットを読んだり、自分たちで文字を書いたりする。
(9)言葉による伝え合い	・インタビューをする。	・自分のイメージを友達に話す。	・自分の思いや考えを相手や状況に応じて分かるように話す。

(10)豊かな感性と表現	<ul style="list-style-type: none"> ・発表会で体験したことを生かして歌ったり、踊ったりして楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・病院に行ったことを思い出しながら、役になりきって遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に行き先を決め、時刻表を調べて出張や旅行に行ったり、国旗をかいたりして遊びを生み出す。
--------------	---	--	---

【結果】

3歳児の特徴としては、発表会や誕生会、集いでの遊びなど、身近で分かりやすい共通の体験がきっかけとなりごっこ遊びが始まっていた。場を共有し、みんなで同じことをして遊び、つながり合うことを楽しむ姿が見られた。4歳児の特徴としては、イメージや考えを伝え合い、相手の気持ちを聞いて遊ぶ姿が見られ始める。また、自分の体験を思い出しながら、役になりきって表現する楽しさを味わっていた。5歳児になると、目的を実現するために、工夫したり、協力したりしてごっこ遊びを楽しみ始め、その過程を通して楽しさや充実感を味わっていた。また、一つの遊びを楽しむ期間が長くなり、友達の刺激を受けながら、遊びが発展したり、幼児なりに知っている知識を生かしてより本物に近づけるよう工夫したりして遊ぶようになった。

協同性では、3歳児の友達と同じことをして遊ぶ姿から、4歳児の友達の思いを聞きながら遊び始め、5歳児の友達と話し合いながら遊ぶ姿へとつながっていることが確認できた。

【伝承遊び～こま遊び～から読み取った姿】

	3歳児 「軸付きのこま回し」	4歳児 「こま遊び」	5歳児 「こま回し」
(1)健康な心と体	<ul style="list-style-type: none"> ・こまに興味をもち、何度も試そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりのめあてをもって挑戦する。 ・教師の姿を見て挑戦するが、できないことで諦めて別の遊びをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紐が巻けなかったり、こまが回せなかったりしても、諦めないでチャレンジする。 ・腕の振りなど、体をうまく使ってこまを回そうとする。
(2)自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・自分からこまを回そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできないことができるように工夫したり、教師と一緒にやったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や教師に教えてもらったり助けてもらったりしながら、自分でやろうとする。
(3)協同性	<ul style="list-style-type: none"> ・友達が回しているこまに興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の遊んでいる姿を見たり、一緒に競争したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の様子を見て、教え合い、伝え合う。

			・「こま名人」と友達から認められる。
(4)道徳性・規範意識の芽生え	・こまを大切に使う。	・こまを大切に使う。 ・遊びのルールを守る。	・こまを大切に使う。 ・友達とぶつからないように、自分で回す場所を確保する。
(5)社会生活との関わり	・教師が回すこまに興味をもつ。	・季節の遊びを楽しむ。	・小学校との交流で1年生に憧れの気持ちをもつ。
(6)思考力の芽生え	・こま同士がぶつかったり、物にあたって止まることに気付く。 ・逆さにして回るこまを知る。	・こまの回し方を工夫する。	・回すだけでなく、さらに回すことが楽しくなる方法を考える。
(7)自然との関わり・生命尊重			
(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	・こまの大きさを比べる。 ・回っている時間を数える。	・回っている時間を比べる。	・難しさが表せるように回す枠の大きさを考える。 ・難しいものが点数が高くなるようにする。
(9)言葉による伝え合い	・こまの大きさ、こまが回ったり止まったりして気付いたことを自分なりの言葉にする。	・こまを回せたことやいろいろな回し方を見つけたことを喜んで伝える。	・こまの回し方を自分の経験を生かしながら、相手に分かるように話す。
(10)豊かな感性と表現	・教師の回しているこまを見て自分でも回したり、ぶつかると止まることが分かると自分でも止めようとしたりする。	・こまの投げ方、回し方を考える。	・友達と一緒に新しい遊び方を工夫してつくり出す。

【結果】

こま回しは3歳児にとって初めての体験であるので、幼児たちが回しやすい軸付きのこまを環境として用意している。初めての体験だからこそ、教師がこまを回すところを見せることで、ゆっくり時間をかけて興味をもち、やりたい気持ちを高めていっている。指でひねって回すという動きを繰り返し試しながらこまを回し、回ることに喜びや達成感を感じている。回せるようになると、試したり、気が付いたことや思ったことを自分なりの言葉で表現をしたりする姿も見られるようになっていた。

4 歳児は、軸付きのこま、紐引きごま、紐で回すこまなど、こまの種類を増やし、自分なりのめあてをもって取り組む姿を援助した。両手をすり合わせて回す、紐を巻くなどの動きが増えていた。こまを回せるようになると、例えば軸付きのこまを高さをつけて上から落として回すなど、遊び方の工夫が見られた。

紐で回すこまは難しく回せないため、諦めて自分が回すことのできるこまで遊ぶ姿があった。一方で、紐引きこまは何度か挑戦すると自分で回せるようになるため、自信をもち、繰り返す楽しむ姿が見られるなど、自分なりのめあてをもってこま回しを楽しむ姿へとつながっていた。

5 歳児になると、紐で回すこまに挑戦する幼児が増えている。少し難しいことに挑戦したいという気持ちがそれを支えていた。紐で回すこまは、紐の巻き方、こまの持ち方、投げ方など、難しさがあるため興味が向かない幼児もいるが、回せる友達、小学生、教師などの姿を見て、挑戦する幼児が少しずつ増えた。5 歳児では、根気よく何度も繰り返して、こま回しができるように頑張ろうとする姿が見られ、教師は励ましたり一緒に回したりして援助していた。他にも回せる幼児の紐の巻き方、投げ方を真似したり、教えてもらったりして、幼児同士の関わりも増え、友達に教えることで、自信をもっていた。遊び方も、さらにこま回しが楽しくなるように、レベルを考え、大きい枠や小さい枠を作ったり、けんかごまをして友達と競ったり、硬い紙でこまをすくったりするなど、新しい遊びを考え出して楽しんでいた。

こま回しという同じ遊びを通して検討していくことで、身体の動かし方やできるまで根気強く取り組む時間などが明らかになった。一方で、どの発達段階でも回せた喜びや達成感が幼児の遊ぶ意欲につながっていた。幼児の発達に合わせたこまの種類を用意する環境の構成の大切さや、回せる喜びを味わえるよう援助していくことの必要性が分かった。

3 指導計画の見直し

幼稚園教育要領の改訂を踏まえ、指導計画を見直した。

見直し1：年間指導計画を新しい幼稚園教育要領の改訂のポイントを踏まえ見直す。
見直し2：5歳児1月から3月までのⅫ期は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10の項目に留意して編成し直した。

見直しでは、指導計画の文章1つ1つについて、どの項目に属しているのか書き記し、全ての項目が網羅されているか確認した。その結果、社会生活との関わりで、『地域の公共施設を訪れたり、地域で働く人々に感謝の気持ちをもったりする』と内容に付け加えた。実際には活動していることであり、改めて内容に明記することで意識づけることができた。そして、ねらい、内容は今まで教育要領で示された5領域のねらいに沿って作成した指導計画に沿って教育を積み重ねることで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながることを確認した。

〈期の指導計画の見直しの実際〉

5歳児Ⅻ期 【じしんをもって】 (この時期の子どもの様子) ○1年生になることへの自覚が徐々に
○友だちとのかかわりの中で一人一人
○園全体の片付けやウサギの世話の仕

2月

○一人一人が自信をもって自分の力を発揮し、主体的に自分たちの生活や遊びを進め
○就学への期待と喜びを感じながら、最後の園生活をしようとする。

一人一人が自信をもって自分の力を発揮し、よりよく・より楽しくするために生活や

① 自信をもって生活や遊びに自分からかかわる。
② 自信をもって自分の思いを伝えるたり、友だちの話を注意して聞いたりする。
③ 「より○○する」という思いをもって人やものにかかわる。
④ 自信をもって取り組めたことに充実感を味わう。
⑤ 少しでも自分のめあてやイメージしていることに近づいたことに喜びを感じる。
【「そらフェスティバル」、修了式練習、修了式、跳び縄遊び、フープ遊び、雪遊び、製作遊び、など】

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

○組全体が共通の目的に向かい、見通しをもちながらよりよいものを目指し、話し合ったり力を合わせたりして目的を実現していく。(人・環・言・表)

○組全体が共通の目的に向かって取り組める遊びを見つける。(もの)

○自分たちで共通の目的に向かって、みんなで力を合わせる。(人)

○みんなに楽しんでもらいたいという思いをもち続ける。年少・年中の友だちの立場に立って

○遊びに必要なもの、役割について自分たちで考える。

○見通しをもって自分たちで準備を進める。

○友だちが困ったり悩んだりしていることを自分のこととして考え、アイデアを伝える。

○友だちの考えにふれ、新しい考えを生み出して課題解決をする。(もの) 自分とは異なる

○目的を実現していく楽しさと大変さ・葛藤を味わう。

○みんなが楽しんでくれたことに満足感と達成感を得る。
【「そらフェスティバル」】

○素性の特徴を生かしながら、作りたいものを作る過程を楽しむ。

○自分の責任を果たし
① 年長児としての仕事を履
② 年長児の仕事を4歳児に
③ 「これからよろしくね」と
④ 最後までやり遂げたこと
【園全体の片付け、ウサギ

1文ごとに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどの項目かを確認する。

加筆修正を行った。

具体的に表記することで意識できるように加筆を行った。

4 小学校教育との接続のための取組

(1) 鳥取大学附属学校部教員研修会・幼小連携部会

鳥取大学附属学校園では、平成 29 年度に附属学校園の研究テーマが統一されたことを受け、夏休み、冬休みを利用して、4 校園の教師が集まり研修を行っている。その中で「幼小連携部」「国語部」「音楽部」など、12 の教科・領域等別小部会に分かれて4校園の連携を進めている。今年度の幼小連携部会での取組の概要を以下に示す。

〈平成 29 年度の取組の概要〉

第 1 回 4 校園研修会 平成 29 年 7 月 31 日

今年度、重点として取り組むことについて話し合った。

- 昨年、年間連携計画を初めて作成した。課題として、幼児の交流は少しずつ深まっているが、さらに連携を進めると共に地域に発信できたらよい。また、交流や幼児の様子を伝えるなどの連携は行っているが、教育課程について互いに見合い、小学校との接続をさらに図っていききたい。
- 本年度の取組については、公開研究会に参加するだけでなく、幼稚園での遊びや学びを伝える、事前に学習を参観するなどの協力をしていく。
- 幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂された点や、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について小学校とどのように共有していくかなど勉強会を開くことを決めた。

第 2 回 自主勉強会 平成 29 年 11 月 7 日

- 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の 3 歳以上の「ねらい及び内容」など、幼児教育に関する記載が共通化されたこと、幼児期に育てたい資質・能力の 3 つの柱が示されたこと、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10 の項目が示されたことなど、幼稚園教育要領の改訂のポイントについて確認した。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の詳細と、小学校学習指導要領でも幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することが明記されていることを確認した。

第 3 回 4 校園研修会 平成 29 年 12 月 26 日

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校と共有するための具体的な方法について話し合った。
 - ・具体的な遊びの中で、幼児がどう考え、どんなことに興味をもち、そこでどういう工夫をしているのかなどを伝えることが必要である。場の状況がイメージしやすいドキュメンテーションなどを活用し、教師の意図を伝え、幼児の学びを共有できるとよい。
 - ・ドキュメンテーションを書きため、具体的に幼児がどのような経験をし、学びを積んできているかを小学校に引き継いでいきたい。遊びの様子を実際に見る、その学びを話し合う、教育要領の勉強会をする、ドキュメンテーションを共有する等、いろいろな資料があるからこそ、初めて一人の幼児像がより分かってくる。個人のドキュメンテーションは難しいが、学年全体としての幼児たちの学びを引き継ぎたい。

○指導要録でどのようなことを引き継ぐのかについて話し合った。

- ・技能スキルではなく、その幼児の人となりやその幼児独自の見方・考え方が分かるものがよい。学びや育ちを伝える。また、その幼児の長けているところ、その子の個性が見られるものがよい。
- ・要録では書けないが、一見好ましくない行動の状況下でどのような支援を行ったか、それをどのように見取っているのかなど、マイナス面として捉えるのではなく、幼児が葛藤している内容、背景やどんな欲求などがあるのかなどを引き継いでいけるとよい。

(2) 5歳児と小学校1年生の学びのつながりを秋の遊びを通して考える

これまで述べてきたように、幼児は入園から修了までの3年間の様々な体験を通して、各発達区分に沿って姿が変容し、教師の援助や環境の構成もそれに伴って変化していた。そして、それは小学校以降も続いていくと考えられる。そこで、これまでの経験や各発達区分に見られる特徴的な姿、中でも「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」が小学校教育につながっているのか、この項では、交流活動の中で1つの具体的な姿を追いながら検証していくことにした。

5歳児は1年に4回、附属小学校1年生と交流を行っている。第3回は小学校で、「秋のものを使って遊ぼう」をテーマに交流を行った。秋の自然物を使った遊びは、幼稚園でもドングリやマツボックリなどの自然物を使って作って遊んだり、3歳児や4歳児を招待してお店屋さんを開いたりして経験している。小学校では、生活科で秋の自然物等を利用したおもちゃやゲームを作り、みんなで楽しむ『きせつとともだち「大大大すき！あきのにっこにこまつり」あきをつかって』の単元がある。そのため、幼稚園での遊びや学びがどのように接続されているのか、また、培った力が小学校でどのように発揮されているのかを検証するのに適していると考えた。

①「秋のものを使って遊ぼう」の活動について

交流の目的は以下の通りである。幼稚園、小学校それぞれがねらいをもって取り組んでいる。

(幼稚園)

- ・自分の思いや考えを伝えたり、小学校1年生の考えを聞いたりしながら、一緒に遊ぼうとする。
- ・秋の自然物を遊びの中に取り入れながら、作ったり遊んだりすることに楽しさを感じる。
- ・遊びを通して体験したことや小学校1年生のアイデアを自分の遊びに取り入れようとする。

(小学校)

- ・これまでの体験を生かし、幼児や友達と協力しながら進んで計画・製作に関わり、みんなで遊びを楽しむことができる。
- ・自然の材料を使って遊んだり、遊びに使うものを工夫して作ったりし、そのおもしろや自然のよさに気付くことができる。

毎年、秋の交流では、秋の自然物を使った交流を行っている。例年、小学校1年生が考え、準備した遊びを楽しむのだが、すでに幼稚園でも経験している遊びも多く、より工夫した遊び、発展した遊びとなるためには、幼稚園で経験した遊びについて小学校に伝えていくことが課題であった。そこで、今年度は、前年度までの反省を踏まえ、幼稚園の5歳児の時に体験した遊びについて小学校に事前に伝えた。また、5歳児担任が交流までに小学生の学習を参観する機会を設けた。それによって、当日の幼児の活動を予想したり、幼稚園では体験したことがない新しい遊び方で楽しんだりできるようにした。

②幼稚園での遊びや学びのつながりが見られた児童の様子

ドングリ転がし

【幼稚園】

- ・壁や段ボール箱、テーブルを使い、トイレットペーパーやラップの芯などを角度をつけて貼ってコースを作り、上から下にドングリを転がす。ゴールには入れ物を置く。
- ・ドングリが転がる様子を一人で楽しみ、納得するまで転がして遊ぶ。
- ・空き容器の中に硬い紙で仕切りを作り、仕切りの間にドングリを転がす。空き容器を自分で持ち、向きを付けながらドングリを転がしてゴールする。



【小学校】

- ・大きな段ボール板にラップの芯を向きを変えて貼り、四方を幼児たちが持って角度をつけながらドングリを転がして筒の中を通す。
- ・複数の人数でコミュニケーションをとりながらドングリが転がる様子を楽しむ。



<考察>

幼稚園では、5歳児になると、コースを考えて作ったり、長さが長くなったりコースが複雑になったりするなど工夫が見られるようになる。また、遊びが深まる中で、ドングリの転がり方を予想したり、確かめたりする姿が見られるようになり、ゴールまで転がそうと、諦めずに試行錯誤する姿もある。ドングリが転がる様子を楽しみ、自分が納得するまで転がす姿が多く見られた。これらの姿は、「自立心」や「思考力の芽生え」の項目に見られる力が育っていると推察される。

小学校になると、角度をつけるとドングリが転がることを生かして、筒の中を通すなど複数のコースを作ったり、難しいコースを考えたりしていた。また、活動の過程で友達のことを取り入れ、新しい遊び方を生み出していた。みんなで段ボールを持ち、どこをドングリが通るか分からない偶然性を楽しむなど、遊び方も工夫していた。5、6人の集団で一緒に遊び、みんなでどきどきわくわく感を味わい、楽しさが共有できるようになっている。

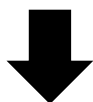
このように、繰り返しドングリを転がすという活動を経験しているからこそ、ドングリは高いところから低いところに転がる、角度がある方が速く転がるといった性質を小学校の児童は経験を通して理解しており、どのようにドングリが転がるのかさらに工夫して遊ぶ姿につながっていると考えられる。

また、やりたいことや作りたいことが明確になり、それを言葉で伝える力が育っているからこそ、活動の過程で友達と話をし、考えを取り入れる姿につながっていると考えられる。

お店屋さんを開く

【幼稚園】

- ・お店屋さんを開店するまでに作った物を準備しておく。できあがったものを小さい友達にあげたり、売ったりする。
- ・3歳児・4歳児のときにお店に招待された経験から、組でやりたいことを出し合う。やりたいことが同じメンバーがグループとなり、お店を開くために必要なものを作り、準備をする。当日は、3歳児・4歳児を招待し、店員になり接客する。



【小学校】

- ・相手に作り方を説明したり、一緒に作ったりして、作る過程を楽しむ。
- ・ゲームを楽しむ部屋、作る部屋など、広さや場所を考えてコーナーを設立する。
- ・「あきのにっこにこまつり」全体をイメージし、楽しい雰囲気となるようなモニュメントや会場の飾りを作ったりする。



<考察>

幼稚園では、教師と一緒に計画を立てる経験をしている。その中で、開店までの日数を知り、見通しをもちながら準備をする。そして、どのくらいの数を用意したらよいか考えて準備したり、3歳児にどのように接すればよいのか考えたりする幼児もいる。当日は、店員として「いらっしゃいませ」「どれにしますか」などの言葉を使いながら接客をしている。「協同性」や「言葉による伝え合い」で示されている姿が育っていることが伺われた。

小学校になると、幼稚園でお店屋さんを開くことを経験しているため、相手意識や目的意識がより明確になって、お店屋さんを開こうとしている。今までの経験を通して自分たちで見通しをもち準備をしている。さらに、自分の役割に責任をもつようになり、協力することやみんなで行うおもしろさを感じられるようになっている。作るコーナーでは、店員としての言葉を使うだけでなく、幼児が分かりやすいように言葉

を選びながら場に合った説明をするなど、場や状況に応じて話すようになっている。

このように、お店屋さんを開くという活動を経験しているからこそ、コーナーを工夫したり、場の使い方を考えたりするなど見通しをもちながら自分たちで準備をする姿につながっていると考えられる。また、店員になる経験を積み重ねることで、場や状況に応じて臨機応変に対応する姿につながったと推察される。

幼稚園での遊びや学びは多くの場面で接続が見られ、培った力が小学校でも発揮され、次の育ちへつながっていることが伺われた。

③ 小学校・生活科の単元設定と児童の姿

交流後に附属小学校 1 年教諭と、幼稚園の遊びと小学校の生活科の学習がどのようにつながっているのか、またどのように児童の活動を評価しているのかについて児童の具体的な姿を基に振り返った。その内容を以下に示す。

○幼稚園の遊びと小学校の生活科の学習がどうつながっているのかについて

平成 29 年 3 月 31 日に幼稚園教育要領、小学校学習指導要領が告示され、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められた。

生活科では、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすることが示された。幼児期の教育において育成された資質能力と、小学校低学年で育成する資質能力のつながりを明確にすること、そして、スタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とし、国語科、算数科、音楽科、図画工作科、体育科、特別活動との関連についても検討していくことが必要とされている。

生活科は、一人一人の思いや願いを生かす学習を重視している。具体的な活動や体験を通して感じ、考え、工夫し、問題を解決しながら、自らの思いや願いを実現していく学習過程を大切にしている。これは、幼児教育の、遊びを通して達成感や満足感を味わったり、葛藤やつまずきなどを体験したりすることから様々なことを学ぶ教育と密接に関連している。

○『きせつとともにだち「大大大すき！あきのにっこにこまつり」あきをつかって』の学習で見られた姿について

本単元では、児童が昨年幼稚園で行った同素材の活動の内容や様子を伝達、共有して、内容や設定を検討した上で単元計画を立てた。幼稚園での経験を基にしながら、児童がさらにイメージを広げ、考え、工夫し、問題を解決しながら活動していく単元となるよう設定した。

導入では、日々の季節の変化や植物への気付きや感動を大切にして、休憩時間や単元内における遊びを展開した。そして、単元の最後に幼稚園 5 歳児を招いて秋のお祭りを開催し、相手を意識してお祭りを計画、準備することにした。この単元では、児童同士の連携や協力といった協働学習に重点を置き、身近な自然との関わりを通して秋を体全体で感じ、たくさんの自然物を使って遊びを考えたり、みんなで話し合ったり工夫したりしながら楽しく遊ぶとともに、児童同士がつながり合うことを期待した。

児童は、「秋見つけ」を行ううちに、自然な流れで幼稚園での楽しんだ体験を思い出

し、「また、～したい」「もっと～ようなことを考えてやりたい」という思いや願いをもつようになることが生活科の単元への入り口となった。自分たちで作上げた学びが第三者に喜ばれることに満足感や充実感を味わい、繰り返したり、対象を広げたり、さらに遊びを展開させたりするなど、学びと生活を往来する学習を展開することができた。

○単元を通した学びと評価について

本単元では、以下の単元目標を設定している

- 季節の変化や自然の不思議さを感じ、自然と触れる遊びや遊びに使うものを工夫してつくっていくおもしろさが分かる。 【知識及び技能の基礎】
- 季節に応じた遊び方や楽しみ方を考えたり、遊びに使う材料を工夫したりして、自分なりの表現であらわす。 【思考力、判断力、表現力等の基礎】
- 身近な秋の自然に親しむとともに、それを利用した遊びに関心をもち、みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする。 【学びに向かう力、人間性等】

秋のお祭りという形式で秋の遊びやものづくりの店を作っていたが、「巨大ころめいろ」や「まつぼっくりモンスター」など、幼稚園で作ったものを発展させた遊びやものづくりが見られた。製作過程の中で、児童の思考の中に幼稚園での活動で得た知識・技能を生かしている場面が多く、「前は～とやったけど、もっと…した方がおもしろくなりそう」「幼稚園のときよりもすごいやつを作りたい」「自分たちだけの力で作りたい」「もう1年生だからみんなで考えればいいアイデアになって、幼稚園のときよりも上手に作れるはず」という発言が聞かれ、幼稚園での学びが知識・技能面、情緒面において発揮されていたと捉えることができる。

また、体験活動と表現活動を繰り返し行い、評価を行った。具体的には、調べたり、作ったりする活動について、自分なりに考えたり、工夫したり、振り返ったりしてそれを表現する場面の様子やこの単元での活動によって秋の自然や自分との関わり、自分自身のよさに気付いているかなどを生活科カードなどから評価を行った。

児童が学習活動を通して、無自覚な状態から知識・技能を自覚していき、これまでの体験と関連付けながら目の前の対象を多面的に捉えることや、自分自身への気付きが深まったことに成果があったと考える。

(3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有と幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に向けて

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をつなげていくかを考える中で、各発達段階の遊びを通して達成感や満足感を味わったり、葛藤やつまずきなどを体験したりすることなど、幼児期の学びの過程の具体的な姿を伝える必要性が明らかになった。交流活動で共有したことは、幼稚園での同素材の活動の内容や様子を小学校に伝達、共有したことであった。この取組を通して、幼児たちが幼稚園での遊びの中で得た経験、知識・技能を生かしている場面を確認することができた。このことから、活動の内容、流れ、幼児の学びが分かるものを引き継ぐことが有効だと言える。そのため、場の状況がイメージしやすいドキュメンテーションなどを活用し、教師の意図を伝えることが円滑な接続に向けた1つの方法となることが推察された。

5 幼児理解に基づいた評価に向けて

本研究では、これまでの「一人一人の幼児のよさや可能性を評価する」という考え方を基本として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という視点を加えて幼児期にふさわしい評価の在り方を示そうとしている。

前述のように、発達区分に沿った幼児理解のキーワードの分析や考察に記述された幼児の姿をまとめることを通して、それぞれの発達区分における大まかな幼児の発達の道筋が明らかになった。そこで、これらのキーワードや「(4)発達区分に沿って整理した幼児の姿 (31 から 34 頁参照)」の表を参考にし、「幼児が～しようとしているか」と読み替えることで、その時期らしい幼児の育ちや学びを評価する視点とすることができないのではないかと考えた。また、幼児の姿を育むための「(5)発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成 (35 から 41 頁参照)」の表についても同様に、「教師は～しようとしているか」と読み替えることで、教師の振り返りにつながる視点となり、指導の改善に生かすことができるのではないかと考えた。そこで、「2 教育実践と学びの共有 (2)ドキュメンテーションによる学びの共有」で示した 4 歳児 3 学期「こまで遊ぶ」を具体的事例として検討していった。

幼児理解の姿の中で、「こまで遊ぶ」の事例とかがわる部分は以下の網掛けで示した通りであった。

第Ⅱ期：4 歳児後半～5 歳児前半（遊びが充実し自己発揮する時期）

	幼児の姿
(1) 健康な心と体	<p>一日の流れに見通しをもち、学級みんなでの活動を楽しみに感じて生活する。周りの状況や自分の身体の調子を考えどうするのか自己決定し行動する。自分たちが育てた野菜に愛着をもち、感覚を働かせながら調理活動に参加する。</p> <p>少し難しいことに挑戦したい思いをもち、新しい活動に繰り返し挑戦する。友達の姿に刺激を受け、一緒に遊ぶ中で相手の動きに応じたり真似たりする。</p>
(2) 自立心	<p>自分のイメージを教師に伝えたり、互いに共有したりして仲間意識をもって行動する。</p> <p>教師の仲介を受けながら、互いの行動や思いを受け止める。</p> <p>継続的な動植物の世話の中で愛着が育まれる。</p>
(3) 協同性	<p>自分とは異なる友達の思いや考えに気付き、自分の行動を振り返り、気持ちの表し方を考えて伝え合おうとする。</p> <p>友達と自分のイメージが重なることで共通の願いをもち、自分なりの役割を見つけたり、友達のよさを感じたりして、伝え合い、受け入れ合いながら活動を楽しむ。</p>
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	<p>教師が入ることで冷静になり、自分の行動を振り返ったり、葛藤しながらも気持ちに折り合いをつけたり、思いや考えを出し合い互いにより方法を考えたりする。また、今までの体験から友達の気持ちを察したり共感したりする。</p> <p>当事者でなくても解決に向けてとりなしたり考えを言ったりする。</p>
(6) 思考力の芽生え	<p>今までの経験や友達のやり方を見て使う道具や材料を選んだり、やり方を真似たりする。</p> <p>自分の知っていることを利用したり友達と意見を出し合ったりしながら、目的を共有し思いを実現しようと試行錯誤する。</p>

また、教師の援助・環境の構成について「こまで遊ぶ」に関わる部分は、以下の網掛けで示した通りであった。

第Ⅱ期：4歳児後半～5歳児前半（遊びが充実し自己発揮する時期）

	教師の援助	環境の構成
(1) 健康な心と体	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに考えた行動を肯定的に受けとめ、自分なりに試す姿を見守る。 ・具体的な動作やモデルを示す。 ・幼児が自ら気づき、自分で状況を判断し行動できるようにする。 ・絶対に守らないといけないことは具体的に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがもてるような1日の流れの設定 ・活動が分かりやすい場の設定 ・ねらいに沿った置き場の工夫、幼児のイメージを読み取り再構成する。 ・職員全体で教育する関係を築く。 ・事前の安全確認、下見 ・イメージを共有したり分かりやすくなったりするように可視化する。
(2) 自立心	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで具体的にイメージして遊びを展開できるように、幼児の思いに寄り添い、提案する。 ・自信をもって考えられるようにする。 ・幼児の気持ちを丁寧に捉え、葛藤を受けとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭の環境を生かす。 ・共通の経験 ・共に調べたり気付いたことを伝え合ったりする友達の存在 ・複数の図鑑や手に取れる場所 ・友達と共通の目的をもってがんばれる活動を取り入れる。 ・継続して遊べるよう場所の再構成をする。
(3) 協同性	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で気づき行動できるように、大きな身振りや幼児の求めに応じた動きをする。 ・すぐに答えを言うのではなく、周りの幼児を巻き込みながら思いを伝え合うきっかけ作りとする。 ・相談に乗ったり、遊び仲間として参加したりするなど場に応じた役割を担い、幼児に任せる場面と援助する場面を見極める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動能力に合わせた場の広さ ・遊びが継続できるように場を残す。 ・幼児と一緒に置き場所を決める。 ・自由に使える素材を普段から準備しておく。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の話を聞きながら、相手の様子に気付くまで見守りつつ待ち、状況を整理し、解決方法について考えを出し合えるようにする。 ・幼児の気づきに共感し、心の揺れを見守りつつ気持ちの調整や折り合いの付け方を認めていく。 ・経験を通して約束やルールの必要性を理解したり確認し合ったりできるようにし、見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が先に判断せず、幼児と話し合う中で気付けるようにする。 ・共通の問題意識 ・道具は葛藤や交渉が生まれるように少数にする。 ・体験の積み重ね ・勝敗のある遊び ・思いを巡らせる十分な時間の確保 ・思いを伝えられる雰囲気作り

そして、「幼児は～しようとしているか」「教師は～しようとしているか」と読み替えることで、その時期らしい幼児の育ちや学びを把握していった。

- ・少し難しいことに挑戦したい思いをもち、新しい活動に繰り返し挑戦しようとしているか。

幼児は、3歳児の頃には環境として用意されていなかった紐で回すこまに挑戦したい思いをもち遊び始めた。しかし、紐を巻くこと、投げることがかなり難しく諦める姿が多く見られた。そのため、幼児にとって少し難しいこま遊びは何かを考え、紐引きこまを購入し、環境として用意した。紐引きこまは、紐を巻くという今までとは違う遊びができる一方で、こまの溝に紐を巻くだけで回すことができる玩具であり、幼児が少し難しいことに挑戦したい思いをもち、新しい活動に繰り返し挑戦しようとする姿につながった。

- ・友達のよさを感じたりして、伝え合い、受け入れながら活動を楽しんでいるか。
- ・今までの経験や友達のやり方を見て使う道具や材料を選んだり、やり方を真似たりしているか。
- ・自分の知っていることを利用したり友達と意見を出し合ったりしながら遊んでいるか。
- ・教師は、すぐに答えを言うのではなく、周りの幼児を巻き込みながら思いを伝え合うきっかけ作りとしているか。

幼児は、友達と一緒にこまで遊ぶことを楽しんでいた。しかし、やり方が分からなかったり、うまくいかなかったりするとすぐ教師に聞く姿が見られた。そこで、友達が遊ぶ様子を見てやり方を真似たり、自分の知っていることを友達に伝えたりするように、教師はすぐ援助するのではなく、「(回せている)〇〇ちゃんはどうやってしているのかな?」「聞いてみたら?」など言葉かけを意識した。すると、幼児同士で「こうやって紐を持ちながら回したらいいよ」とやり方を伝えたり、友達が回す様子を見たりする姿につながった。

- ・自分の行動を振り返ったり、葛藤しながらも気持ちに折り合いをつけたり、思いや考えを出し合い互いにより方法を考えているか。
- ・今までの体験から友達の気持ちを察したり共感したりしているか。
- ・当事者でなくても解決に向けてとりなしたり考えを言ったりしているか。
- ・教師は、幼児の気付きに共感し、心の揺れを見守りつつ気持ちの調整や折り合いの付け方を認めているか。

こまは、もともと各こま5個程度しかなく、何度も取り合いになった。時には「全部同時に自分で回したいから、一人で使いたいんだ」と理由をつけて友達に交渉する姿も

見られた。そういった場面で、教師が先に判断せず、「どうしたらいいかな？」と幼児と話し合った。そうした教師の姿勢が、そばにいた幼児の「一人1個使えばいいのに」など、解決に向けて自分なりの考えを伝える姿につながったと考えられる。また、話し合いを通して、順番に使うことや一人1個ずつ使うことなど幼児なりに解決方法を考え、全部同時に回してみたいという自分の思いと葛藤しながらも気持ちに折り合いを付ける姿が見られた。教師は、その姿を認めると共に、他にこまを回したい幼児がいない時に、声をかけ、全部回してみたいという思いが達成できるようにした。

このように、「～しようとしているか」と読み替えることで、その時期らしい幼児の育ちや学びをふまえた自らの指導を評価する手立てとなることが明らかになった。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究の成果

○実践記録を基にした「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と学びの可視化

本園のみならず、各附属幼稚園が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して教育実践を行い、事例として記録を残した。今回の事例収集では、A4用紙1枚で事例と考察を書く様式とした。A4用紙1枚と紙面が限られているため、ポイントを絞った事例となった。また、共通の様式のため、各発達段階の特徴等を比較・検討が行いやすいという利点があった。そして、ドキュメンテーションを作成したことで、普段の遊びやその遊びからの学びを改めて可視化することができ、園内での研修の充実と教師自身の振り返りになり、教育の見直しを図ることができた。

○幼児理解に基づいた評価の手立て

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点を当てた実践事例の分析を通して、幼児理解につながるキーワードが多種・多様であることが確認された。また、幼児の姿を基に教師の援助や環境の構成も各段階に沿って変化していることも明らかになった。今回の研究では、幼児期にふさわしい評価とは、幼児自体を評価するのではなく、幼児の理解を進め、幼児の姿から教師の指導を振り返ることであることを共通理解している。今後、今回示されたキーワードや「発達区分に沿って整理した幼児の姿」、「発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成」の表を一つの視点として、教師の援助や環境の構成について、幼児理解に沿った評価をすることにつながることを期待される。

○教育課程の改善に向けて

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に指導計画を見直した。これまで教育要領で示された5領域のねらいや内容に沿って教育課程や指導計画を作成し、実践を積み重ねてきた。今回、新しい指導要領の改訂のポイントや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点を当てて見直しを行ったが、ほぼ全ての内容が既に網羅されており、5領域のねらいに沿って教育を積み重ねることで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながることを確認した。また、今回10項目で幼児の姿が示されたことで、さらに具体的に幼児の姿をイメージし、教育課程や指導計画を加筆修正し、改善することができた。

○小学校教育との接続

鳥取大学附属小学校と一緒に幼児の姿を基に学びの場をもつことで、新しい教育要領、とくに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、少しずつ理解を深めることができた。また、小学校教育、特に生活科の学習では、秋の自然物を使った遊びを例に、幼児の遊びや学びの姿を伝えることで、幼児教育と小学校教育の接続を意識した学習の展開ができることを示した。その際、活動を可視化して示すドキュメンテーションを活用することで、小学校教員が幼児の活動をイメージしやすいことも分かった。

2 今後の課題

○幼児理解に基づいた評価の妥当性や信頼性の実証

今回の研究では、各発達区分に見られるキーワードを意識し、「発達区分に沿って整理した幼児の姿」や「発達区分に沿って整理した教師の援助、環境の構成」の表に挙げた文章を「幼児は～しようとしているか」「教師は～しようとしているか」と読み替えることで、その時期らしい幼児の育ちや学びを把握していった。今後は、評価の妥当性や信頼性を高めるために、日々の実践記録を基に幼児の学びの捉え方について協議をしたり、ドキュメンテーションで幼児の遊びを可視化、言語化をしたりするなどして、幼児理解を深め、その評価方法を実証していくことが課題である。

また、今回は収集した事例から読み取った評価の手立てであり、今後はさらに多くの事例を検討し、一般化していく必要がある。そのためには、数年にわたる研究期間と研究体制が必要である。

○小学校教育との接続に向けて

今年度は鳥取大学附属小学校と幼小連携部会を通じて勉強会をもった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、話し合いの機会をもつことで少しずつ理解が進んでいる。しかし、他の小学校とは、幼児期の評価の在り方等について共有されておらず、また今回の改訂の趣旨の周知も低いと感じられる。小学校と幼児・児童の交流、研修の参加、幼稚園の様子などを伝えるなど連携をとっているが、カリキュラムで幼児教育と小学校教育をつなぐとともに、研究大会や研修会などを通し、県内の幼稚園、保育所、小学校などへ発信していきたい。

今回の研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点を当てた各発達段階の幼児理解の実践事例の分析を通して、必要な経験や各発達段階にふさわしい指導の積み重ねの過程、評価の視点を示すことができた。今後は、これを指導要録にどのように記述し、次年度の担任、あるいは小学校教師に伝えていくのかについて、具体的な方法の検討をしていく必要がある。

○幼児の学びと育ちを伝える

学びの過程と姿を可視化したドキュメンテーションを、今後は、保護者へ発信し、幼児の遊びの過程や学びの姿を共有し、幼稚園と保護者が共に幼児を育てる意識を高めていきたい。また、ドキュメンテーションを幼児と一緒に作ることを通して、幼児が自分たちの活動を振り返る機会とすることについても検討していきたい。

実践記録（抜粋）

IV 実践記録（抜粋）

次頁からの実践記録は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各項目について、幼児の育ちのつながりが明確に見られたものを各発達区分1事例ずつ取り上げたものである。どのような特徴が見られたのか以下に示す。なお、幼児の育ちに沿った教師の援助や環境の構成についても参考とされたい。

(1) 健康な心と体（事例4,5,6）については、身体を動かす気持ちよさや自ら身体を動かそうとする意欲をもち、進んで運動するようになる幼児の姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、友達の様子を見て興味をもち、できた嬉しさから何度も繰り返し楽しむ姿が見られる。第Ⅱ期では、友達や教師の姿から刺激を受け、自分なりに考えたり試したりする姿や、少し難しいことに挑戦する姿が見られる。第Ⅲ期になると友達の取組に刺激を受けて苦手なことにも自分から取り組む姿や、できるようになったことが自信となりさらに何度も取り組む姿が見られる。

(2) 自立心（事例36,37,38）については、友達や教師と親しみ、幼児なりに支え合う経験を積み重ねていく過程で自分の感情や意思を表現する姿が取り上げられている。入園当初の第Ⅰ期では、友達との関わり方が分からず不安そうな姿も見られるが、友達と親しみあう中で友達に共感し、心地よさを感じている。第Ⅱ期になると友達にイメージを伝え、互いに共有する姿が見られ、全身でおもしろさを感じながら仲間意識をもって行動している。第Ⅲ期になると、友達と役割分担をしながら、各自がそれぞれの特徴や役割を考えて行動する姿が見られる。

(3) 協同性（事例48,49,50）については、人と共にいる喜びを感じ、学級みんなで目的や願いを共有し思考する中で、みんなの考え方をまとめたり折り合いを付けたり問題を解決したりして協力する楽しさや充実感を味わう姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、「カタツムリを見つけたい」という願いを友達と共有し、自分の考えを伝えながら行動する姿が見られる。第Ⅱ期になると、仲間と協力しながら工夫したり自分の考えを伝え合ったり、遊びを楽しむ姿が見られる。第Ⅲ期になると、イメージの実現に向けて、個々のよさや持ち味を発揮して工夫したり協力したりして充実感を感じている姿が見られる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え（事例54,56,57）では、友達の気持ちを理解し、他者の気持ちに共感したり相手の立場から自分の行動を振り返ったりする姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、互いに自己主張をし続けながら、なんとか気持ちに折り合いを付けようとする姿が見られる。第Ⅱ期になると、年下の幼児の寂しい気持ちに気付き、共感する気持ちが生まれ、思いやりをもってかかわろうとする行動が見られる。第Ⅲ期になると、自分から相手のことを思って行動する姿が見られる。

(5) 社会生活との関わり（事例83,84,85）では、日常生活の中で国旗に接し、親しみを感じることで日本の国旗や国際理解への意識や思いが芽生える姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、国旗は見たことはあるものの、日本という意識より、自分が住んでいる場所や祖父母が住んでいる場所が身近であることが分かる。第Ⅱ期になると、教師が見せた国旗を見比べて、共通している要素や違いに気付いている。第Ⅲ期になると、見聞きしたことのある国が増え、自分の知っている国の場所や日本からの距離など位置関係に興味を示す姿が見られる。

(6) 思考力の芽生え（事例89,90,91）では、様々な環境に積極的に関わる中で、より深い興味を抱き、不思議に思ったことなどを探求するようになる姿が取り上げられている。

第Ⅰ期では、何のたまごか不思議に思い、その成長の過程を観察したり世話をしたりすることでさまざまな事柄に気付いていく姿が見られる。第Ⅱ期では、友達と一緒に身近な素材を使ってどうやって立体で再現しようか考えながら製作する姿が見られる。第Ⅲ期になると、設計図を作り、友達とイメージを共有したり完成の見通しをもって試したりしている姿が見られ、うまくいかないところは作り直す姿も見られる。

(7) 自然との関わり・生命尊重 (事例 104,105,106) では、自然に触れて感動する体験を通して、自然の不思議さを感じ、好奇心をもってかかわる姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、自然への気付きが見られ、具体的には、空の様子に気付き雲の色や天気に関心をもってかかわっている。第Ⅱ期になると、自然への積極的な関わりが見られ、メダカの池の様子を観察し、メダカのために池をきれいにしようという思いをもち掃除をする姿が取り上げられている。第Ⅲ期になると、自然への気付きから探究心をもち、ヒマワリの種の量に驚き、種の数を確認しようと積極的に関わり粘り強く挑戦し自然のすごさを実感する姿が見られる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 (事例 121,122,123) では、遊びや生活の中で標識や文字が人と人をつなぐ役割をもつことに気付き、読んだり、書いたり、使ったりすることを通して、文字等への関心・感覚が高まる姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、5歳児のお店屋さんに行った経験から、紙に書くことで伝えることができることを知り、自分なりの線や絵で描いて伝えようとする姿が見られる。第Ⅱ期になると、これまでの経験から必要感をもってチケットを作る姿が見られる。第Ⅲ期になると、これまでの経験を生かして、文字や絵、記号を使いチケットやポスター、看板などを作る姿が見られる。

(9) 言葉による伝え合い (事例 124,125,126,127) では、相手の話の内容を聞いて分かり、自分の思いや考えなどを伝える相手や状況に応じて話そうとする姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、「パーティー」という幼児に身近な言葉や擬音語の響きを楽しみながら、イメージを共有し遊ぶ姿が見られる。第Ⅱ期では、自分の伝えたい思いを言葉を使って友達に分かるように伝えようとしたり、友達の意見を聞こうとしたりする姿が見られる。第Ⅲ期になると、相手の言葉の意味を理解して話したり、思いを自分の言葉で話そうとしたりする姿が見られる。また、うまく言えない友達を気遣う姿も見られる。

(10) 豊かな感性と表現 (事例 141,142,143,144) では、遊びや生活の中で感じたことや考えたことなどを音や動きなどで楽しんだり、思いのままに演じたりして表現するようになり、友達と一緒に工夫して創造的な活動を生み出していく姿が取り上げられている。第Ⅰ期では、友達や教師と楽しさを共有しながら患者や医師になりきってやりとりをする姿が見られる。第Ⅱ期では、一人の幼児の疑問をきっかけに動きをそろえて踊りたいという思いを共有し、互いの動きを意識しながら一緒に踊り、友達と一緒に一つのものを作り上げていくおもしろさを感じている。第Ⅲ期になると、役のイメージで動きを考えることを楽しみ、自分たちのアイデアを実現させるためにどうしたらよいか考える姿が見られる。仲間と一緒に想像するおもしろさを味わい、うまくいった満足感を味わう姿が見られる。

このような具体的な事例こそ、幼児理解の一助となると考える。しかしながら、本冊子に掲載できる事例は、紙面の都合上、一部に限られる。そこで、本研究の基になっている事例はすべてデータで添付することにした。是非、それぞれの事例に目を通していただきたい。

事例 4

健康な心と体

2016年5月31日（火）

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「一本橋を渡りたいな」

園庭のハンモックで横になっている年長児の姉Aのそばで、楽しそうにハンモックを揺らしているB。姉妹二人で楽しんでいると、Aがハンモックから下りて①草むら迷路にかかる一本橋の方へ駆け出していく。①Aは、傾斜のある一本橋をいとも簡単に渡っていき、「Bちゃん、おいで」と手招きした。Bは怖いのか四つん這いになり、両膝をついてハイハイの姿勢で渡り始める。Aは一本橋の上から手を伸ばして「Bちゃん、がんばって」と声援を送る。Bは懸命にがんばるが、バランスを崩して地面に足が着いてしまった。その後も、何度かチャレンジするが上まで渡ることができない。教師が②「Bちゃん、足を着いてクマのように歩いてごらん」とアドバイスをする。Bは両手両足で体重を支えながら、ゆっくりと上にいるAのところまで何とかたどり着くことができた。③「Bちゃん、やったね。すごいよ」と声をかけると、にこっと笑い「もう一回やってみる」と話し、また渡り始める。④自分一人で、お姉ちゃんのように渡ることができた達成感から、またやってみようという意欲がわいてきたようである。



すると、近くで見ていた年少児のCが、ぼくだってできると言わんばかりに一本橋の前にやってくる。CはBと同じように四つん這いになって両膝を着いているので、バランスがとりづらくなかなか進んでいくことができない。⑤「Cくん、大丈夫だよ。クマさんのように歩いてごらん」と教師がアドバイスをする。Bは、さっき姉にしてもらったように一本橋の上からCを見守っていた。Cはバランスを崩しては落ち、またチャレンジすることを繰り返し、ようやくBのところまで渡ってくることができた。⑥AとBとCと一緒に手を叩いて大喜び。「Cくん、やっとできたね。がんばったよ」と声をかけると、にっこり笑った。



その後、三人はかわるがわる一本橋を渡ることを楽しんでいった。

考察（キーワード）

①幼児理解（年長児への憧れ、まねる、挑戦する）

年長児の姉が傾斜のある一本橋を軽々と渡ったことがきっかけとなり、自分たちもやってみようという意欲の喚起につながった。また、大好きな姉のまねをしたいという思いや姉への憧れが、活動の原動力となっている。

②援助のポイント（イメージ化、励まし、認める）

はじめはうまくできなかったことでも、教師や友達の援助や励ましを受け、認められる体験をすることで満足感を味わい自信をもって遊びに向かうことができる。また、傾斜のある一本橋を渡るためには「足を着いてクマのように渡る」等、年少児なりに動きをイメージすることのできる言葉かけをしている。

③環境の構成のポイント（適度な負荷）

年少児にとって傾斜のある一本橋は、「怖いな」「できるかな」という気持ちにさせる環境であると同時に、ちょっとしたきっかけでチャレンジしたいという意欲をかき立てるものである。少し困難を感じるような環境をあえて構成している。

（事例提供 弘前大学教育学部附属幼稚園）

健康な心と体

2017年1月19日(木)

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「雪だるまを作ろう」

年長児が雪遊びをしている様子を見て、①「先生、雪遊びをしたいなあ」とAが言い出した。教師は「一回片付けをしてから、外に出ようよ」と応え、保育室を片付けてから身支度を調べて、幼児たちは雪の積もったグラウンドへ出て行く。教師と幼児たち5人で雪合戦をした後、AとBが「雪だるまを作ろう」と雪を丸め始めた。柔らかい雪を手にとって少し固くして、ころころと転がしていく。①AもBも競い合うように無言で雪の中を歩き回る。次第に雪玉が大きくなった。Bが「だんだん重くなってきたよ」と言って腰を低くして力を入れて押す。「わたしも」と言って、Aも力を入れて、大きくなった雪玉を前に押しながら歩く。②教師は幼児たちの側で見守った。雪玉が幼児の頭より大きくなり、なかなか前に押し進まなくなる。周りで見ていたCが「手伝うよ。」と言って一緒に雪玉を押し始めた。それからDEがBを手伝って押し始めた。みんなで「うーん」と唸りながら大きな雪玉を少しずつ動かす。③近くにいた教師も一緒になり、大きな雪玉を押して歩く。だんだん雪玉が大きくなっていくが重いと不満も言わず、みんなで転がし続ける。④教師は、「大きくなったね」とAに言葉をかける。「疲れたんじゃない？」とまたAに言葉をかけると①「疲れない。全然疲れない」と言って微笑む。①Aは、「あと1個作れるよ」と大きな声で教師に話す。A、Bが中心となって二つの大きな雪玉が出来上がる。一つの雪玉を、もう一つの雪玉にのせようとみんなで持ち上げ始めた。教師も一緒に持ち上げるが、重くてなかなか持ち上がらない。近くにいた他のクラスの教師を「先生。来て」とFが呼んで、もう1人教師がやってくる。教師2人と幼児5人で「せーの」のかけ声でやっとのことで雪玉を持ち上げて1つのせる。⑤落ちないように雪玉と雪玉の境目に雪を付けるように教師が提案し、幼児たちと一緒に雪を付ける。出来上がった雪だるまの前で教師が「頑張って作ったね。写真を撮るよ」と話す。近くにいた幼児たちも加わり、雪だるまの前に並び、笑顔でポーズをとっていた。



考察 (キーワード)

①幼児理解 (気付く、考える、行動する)

年長児の雪遊びをしている様子を見て、刺激を受けて雪遊びをしたくなった幼児たち。教師に話をしたことによって、大きな雪玉をなんとかしてもう1個にのせようと力を合わせ、のせるために教師を呼ぶなど考えながら遊びを展開している様子が見られた。

②援助のポイント (提案する)

どうしたら雪玉をもう一つの雪玉にのせられるか、実際に試行したり、人数を増やして雪玉をのせたりするよう試みた。

③環境の構成のポイント (関係作り)

雪が積もったグラウンドに天気の良い時間に遊ぶことができるように幼児たちの好きな遊びの時間を設定した。他のクラスの担任でも容易に言葉をかけられる関係を築いている。

(事例提供 弘前大学教育学部附属幼稚園)

健康な心と体

2016年2月上旬

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「秘密基地を作ろう」

冬休み明け、毎日のように広いグラウンドでソリ滑りなどの雪遊びをしていた。この年は例年に比べて積雪が少ないので、遊びにマンネリ化が感じられてきた。①そこで、園庭（グラウンドから離れた固定遊具のある所）でも遊んでも良いことを認める。

幼児たちは園庭の奥に行き、雪がたくさん捨てられ、大きな雪山ができていることに気づいた。「ここを俺たちの秘密基地にしよう」と話し、周りにいた幼児も賛同する。プラスチック製のスコップで、雪山に横から穴を掘っていく。①「できたら、この穴の中でミカンを食べよう」とAが話し、気持ちが高まる。①Bは、「上からも穴を掘って、つなげるぞ」と大きな声で提案する。他の幼児もBの考えに賛同し、横穴を掘り続ける幼児と上から掘る幼児に分かれる。AとBは「鉄のスコップどこ行った?」と、小屋に探しに行く。鉄製のスコップは固いものを掘るのに適しており、穴掘りの作業効率が上がるだろうとは思いますが、②危険も伴うため取扱いに十分気を付けるよう話し、掘る様子を見守る。鉄製のスコップで固く氷状になっている所を削り、その削った雪をプラスチック製のスコップや手で掻き出す作業を繰り返していた。窪みができてきたところで片付けの時間になる。



次の週明け、再び秘密基地に張り切って向かう幼児たち。「調子はどう?」と声をかけると、「上の穴は、除雪の雪捨てられて埋められてたあ」との返事。ややがっかりしていたが、また新たに掘ることに意欲が湧いていた。「俺、こっちから掘る」「鉄スコ取ってえ」と会話をしながら互いの動きを確認し、仕事を交代しながら掘り続けていた。しばらくして、横穴を掘っていたBが、①「明るくなってきた! 明かりが見えてきた!」と大きな声で叫ぶ。「えっ? どれどれ」「私も見たい」と交代で横穴に入って見る。その後、全員の作業がさらに速くなり、わいわい会話が増えていった。

3日目、いつの間にか仲間が増え、大勢で秘密基地に向かう。教師は少し遅れて外へ行くと、「穴が開いたんだよ」と明るい声。Aは「でも、これじゃあ、ミカンの自動販売機だよ」と笑いながら言う。見ると、小さな穴が開いていた。②教師は花植え用の小さな鉄製のスコップを数本出す。大勢で少しずつ丁寧に掘り進め、大きな穴になった。①幼児たちは「先生!」と大きな声で呼び、一人ずつ上の穴から滑り降りて横の穴から出てくる。Hは、「明日ミカン持ってくるね」と満面の笑みであった。

考察 (キーワード)

①幼児理解(目的、目当て、自己主張、仲間意識、粘り強さ、挑戦、共有、達成感)

以前にかまくらを作りその中でミカンを食べた経験や、去年は幼児たちだけでは大きく穴を掘ることができなかった経験を思い出している。Bが大きな声で面白い提案をしたことにより、仲間全員の遊びのイメージと目的が一つになった。これまでの経験を生かし、自分たちで遊びのめあてを考え、目的に向かって役割を交代したり必要な物を準備したりしながら根気強くやり抜く心が育っていることを実感できた。また、仲間と一緒に共通の目的意識をもてたことが、寒さに負けず自ら戸外に出て体を動かすことにもつながった。



②援助のポイント(認める、見守る、提案する)

教師は仲間の一員としてのスタンスで、Aをはじめとする幼児の考えややりたいことを肯定的に後押ししたことで、目的の実現に向け、協力したり楽しさや充実感を味わいながらやり遂げたりする経験へとつながった。また、花用の小さな鉄製スコップは、仲間が増えてきたことや少し繊細な作業になることを考え、準備した。

③環境の構成のポイント(教師間の連携、安全確保)

全園児が遊んでいたグラウンドから離れて、反対側の園庭でも遊ぶことができるよう、安全面を考え、園全体の教師の動きを確認し、相談しておいたことで、年長児だけで秘密基地作りができるようになった。

(事例提供 弘前大学教育学部附属幼稚園)

自立心			
2017年6月6日	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「ツゲの木の中で」			
<p>教師が園庭へ出ると、①「せんせえい」と教師を呼ぶ声が遠くから聞こえた。Aの声だと思ったが姿が見えず、辺りを見回しながら声のする方へ向かった。再び「せんせえい」と言う声が聞こえ、②ツゲの木の隙間から見えるAの姿に気が付いた。③教師が素知らぬふりで「Aくん？ どこお？」と尋ねると、Aは「ここだよ」と姿を見せずに言ったので、④「どこかなあ、こっちかなあ」と迷いながらツゲの方へ近付いて行った。するとBが、「どうしたの？」と教師のもとへ来た。⑤「Aくんの声が聞こえるんだけど、どこにいるかわからないの」と応えると、Bは「ぼくも探す」と言い、2人でAを探した。</p> <p>BがなかなかAを見付けられずにいたので、教師が「ああ、あそこにピンクの帽子が見える」と指さした。すると、Bがツゲの木に近寄り、「いたあ」と笑顔で言った。教師も側に行くとツゲの葉の隙間から笑顔のAと目が合った。「Aくんここにいたのかあ」と言った後、「どうやって入ったのかなあ」と呟くと、Aが「こっちだよ」と大きな隙間を指した。Aは、ツゲの枝が大きく分かれた隙間から中に入り、枝の上に乗っていた。教師が⑥「先生も入りたいな」と、その隙間へ入ろうとすると、Bは「怖い」と、砂場の方へ走って行ってしまった。</p> <p>⑦様子に気が付いたCとDがやって来て、「わたしもやる」と言いながら隙間に入り、枝の上に登った。⑧2人が登っているのを、Aは曇った表情で見ている。⑨教師がツゲの木の反対側へ回ると、Aは笑顔で「ここは、出口だよ」と言った。教師が、⑩「そっかあ、ここは出口なんだあ」と言うと、Aは「そう、あっちが入り口。ここは迷路なんだよ」と説明して、出口から出てきた。すると、CとDもAに続いて出口から出てきた。Aが入り口へ回るとCも入り口へ回り、Dが「待ってえ」と言いながら後に続いた。すると、⑪Aは迷路をあつという間に通り抜け、満面の笑みで出口から顔を見せた。3人はツゲの木に入ったり出たりを⑫繰り返し、迷路を楽しんでいた。</p> <p>⑬しばらくすると、Aは、CやEと一緒に滑り台の丸太の所に裸足になって登っていた。Cが「わたしこんなことできるよ」と、丸太の所にぶら下がって見せ、⑭AとEはまねをしてぶら下がった。Aが「これできる？」と片足を掛けると、CとEがまねをして遊ぶ姿が見られた。</p>			
		 	
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (まねる、心地よさ、自信)</p> <p>入園当初から、保育室から少し離れた池や花壇の所で、一人で遊んだり、教師と遊んだりすることが多かったAは、この日も、初めは教師と遊ぶことを楽しもうとしていた。友達との関わり方が分からずCとDがやってきたときには、不安そうであったが、自分の遊びをまねされ、友達と親しみ合う中で共感し、心地よさを感じたのだろう。別の場所でも友達と一緒に遊んだり、友達のまねをしたり、「これできる？」と提案したりする姿が見られた。</p> <p>②援助のポイント (気持ちを受け止める、思いを読み取る、幼児同士を繋ぐ)</p> <p>Aの教師と遊びたいという思いを受け止めると共に、隠れていることを楽しんでいることを読み取り、見付からないふりをしながら近づいて行った。CとDがやって来たときには、Aの不安な気持ちを受け止め、側で寄り添った。</p> <p>また、教師の存在が他の幼児を集める要因の一つとなった。Aと他の幼児をつなぐように、Aの遊びに興味をもつような言葉をかけたり、教師が遊びに加わったりした。また、Aのイメージが他の幼児に伝わるようにした。</p> <p>③環境の構成のポイント (魅力的な自然環境)</p> <p>園庭のツゲの木は、年少児でも登ったり、中に入って遊んだりできるように剪定してあり、木の中がよい遊び場になっている。枝がたくさんあり、年少児も無理なく足や腕が届く大きさである。枝と枝の間には隙間があり、暗過ぎず、中から周りの様子が見えるため、Aにとって安心できる空間となっていたのだろう。さらに、他の幼児にとっては、その隙間や空間が「入りたい」「登りたい」と思うような魅力的な環境であった。</p>			
(事例提供 群馬大学教育学部附属幼稚園)			

自立心			
2017年10月17日	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「運動会みたいな白い線引きたい」			
<p>Aは、登園すると「かけっこしよう！」と言い、素早く自分の荷物を片付け、園庭へ飛び出して行った。しばらくすると、AとBが教師のところへ来て、「一緒にかけっこしよう」と誘った。教師は、2人と一緒に園庭へ出た。Aは、「先生、ここに立って。いくよ！よういどん！」と言い、①ゴールを決めず3人一緒に、園庭の様々な場所を自由に走った。</p> <p>それを何回か繰り返した後、②教師が「運動会ときはまっすぐ走ったけど、こうやって色んなところを走るのも楽しいね！」と言うと、Bは「うん！たのしい！でも、運動会みたいに、スタートとゴールが決まっているのもいいよね」と言った。それを聞いたAは、「じゃあさ、今度はスタートとゴール決めよう」と応え、足で線を引き、「ここがスタートね」と言い、その近くにさらに足で線を引き「ここがゴールね」と付け加えた。そして、③Aは指で示しながら「あそこを曲がって、あっちに行って・・・」とコースを説明した。コースを説明し終わると、3人でスタートの位置に着き、AとBで、一緒に「よういどん！」と今度もまた走った。そして、ゴールの辺りにやって来たが、どこに線を引いたか分からなくなってしまった。AとBは、もう一度スタートとゴールの線を足で引き直し走り始めたが、またゴールが分からなくなってしまった。④その様子を見て教師は、「足で線を描くだけだと、消えちゃうのかな？」と呟いた。すると、Aが「あっ！運動会みたいな白い線引きたい！」と言い、Bも「あの粉のやつでしょ！」と応えた。そして、2人が教師に、「先生ある？」と聞いたので、⑤教師は、「何が？」と聞き返した。2人は、何が必要か詳しく説明してくれた。説明を聞いた教師は、「あるよ！今持って来るね！」と⑥ラインカーを取りに行った。</p> <p>AとBは、教師がラインカーを持って行くと、「スタートはここね」とスタート位置を示したので、教師がスタートの線を引いた。また、「そこから、こっちに行って、こう来て・・・」と教師にコースを伝え、⑦木の間を抜けたり、バラ・アケビのアーチの下をくぐったり、トンネル山の上を走ったりするコースになった。コースが完成すると、Aは「先生はここで待っていて」と、Bと2人でスタートに並び、2人で「よういどん！」と言い、かけっこをした。</p> <p>しばらく3人でかけっこをしていると、他の赤組や黄組の幼児、年長児の仲間が増え、リレーに変化していった。</p> <p>次の日、⑧AとBは、昨日と違うコースを考えた。それを教師に伝えてきたので、教師が2人の後に続き、コースの線を引いた。線を引いていると仲間がどんどん増えていき、線を引き終わると、さっそくリレーが始まった。</p> <p>そのまた次の日も、AとBは、違うコースを考えリレーを続けていた。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (面白さの追求、仲間意識、共有)</p> <p>AとBは、自分たちが楽しめるコース(くねくね曲がる・木の間を通る・山を登るなど)を考えながら、それぞれのイメージを教師に伝えたり、互いに共有したりする姿が見られた。また、全身で面白さを感じながら、仲間意識をもって行動していた。</p> <p>②援助のポイント (主体性、イメージする、安心)</p> <p>幼児が自分たちで具体的にイメージし、遊びを面白くしていけるように、経験したことを思い出す言葉を掛けたり呟いたりした。また、2人が自信をもってコースを考えられるように、教師は幼児の後に続いて線を引いた。</p> <p>③環境の構成のポイント (刺激、面白さの追求、満足感)</p> <p>園庭には樹木がたくさんあり、傾斜もついている。真っ直ぐ走る際には障害物となるが、幼児にとっては、景色が変わったり、上がったたり下がったりを楽しめる材料となっている。また木があることによってそれが目印になるため、日によってコースを変える面白さにつながる。</p>			



(事例提供 群馬大学教育学部附属幼稚園)

自立心			
2016年9月28日	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「チアリーディング」			
<p>運動会で踊ったり応援したりしたことと、チアリーディングの経験が結び付いたらしく、9月中旬の運動会後から、AとBの間ではチアリーディングが続いていた。この日は、ショーをして友達に披露したいと思ったのか、①②ビールケースとすのこを運び、客席を用意した。準備を終えると、客を呼び込み、2人のチアリーディングショーが始まった。観客はC、D、Eの3人である。③一曲踊り終わると、Aが、見ていた3人に向かって、④「チアの体験教室があります。みなさん来て下さい」と呼びかけた。「やりたい！」とEが言ったのを受け、⑤2人は相談してから腕を組み、「この上に乗って」と声をかけた。Eは、2人が組み合わせた腕の間に足を通して乗ってから、見ていた友達に笑顔で手を振ってみせた。</p> <p>⑥教師は、近くで遊んでいた幼児たちに「チアのショー、すごかったね。人が多いといろいろな技ができて楽しそうだね」と声をかけた。すると、「わたしもチアやろうかな」とFが言い、「楽しそうだよね」「わたしもやりたい」とGとHが続いた。「ねえ一緒にやっいいい？」というFたちに、「いいよ！」と2人は嬉しそうに頷いた。</p> <p>AとBの2人が前に出て、後方に他の幼児が並び、曲に合わせて全員で踊り始めた。踊りながら銘々に立ち位置を調整している。さらに、「わたしたちも交ぜて」と加わり、曲に合わせて側で側転をする子やフラフープを回す子も出てきた。Hはスタッフになり、全体を見ながら踊りに指示を出している。⑦「タワーをつくろう！」「腕を組んで！」と声が出て、「Iちゃん乗って」と普段から身のこなしが軽いIが指名され、数人がIを支えタワーをつくった。タワーが完成するまで他の幼児は、前で踊ったり側転したりして時間をつないでいた。</p>			
			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (目的、表現、役割、自信、充実感) AとBは、他者に披露したい、本物のショーを実現したいと思い、どこから見てほしいか考えて客席を用意していた。また、体験教室では、初めてするEにできることを考え、上に乗ってもらったのだろう。Eも満足そうであった。最後には各自がそれぞれの特徴や役割を考えてタワーをつくっていた。</p> <p>②援助のポイント (イメージの共有、個性の自覚、自信) 教師の言葉がきっかけとなり、チアの仲間に入る幼児が増えていった。幼児なりに支え合ったり意志を共有したりして、それぞれのよさを発揮できるように関わっている。</p> <p>③環境の構成のポイント (自発性、広い空間) テラスには、いつでも誰でも音楽をかけられるように、CD等を準備しておく。保育室前はプール設置用のスペースとして、一段高くなったゴム張りの空間があり、ステージとしても活用できるようになっている。</p>			

(事例提供 群馬大学教育学部附属幼稚園)

協同性			
2012年7月11日	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「カタツムリさがし」			
<p>①小雨の中、①10人の幼児と一緒にカタツムリを探している。Kは星組砂場横のエノキの木のところに来ると、「にこの木」と言った。②幹が二つに分かれて出ている形からそう呼んでいるらしい。</p> <p>③Kはその木に近づいて、幹から上の枝の茂みを見上げている。 「カタツムリ、前（この木に）おったのに今日はおらん」と言う。④教師は「どうして今日はいないのかな」と尋ねた。</p> <p>すると、教師の傍らにいたHは、 ⑤「雨が降ってるから」と教師に返した。Hの言葉にKは、 「前、雨が降るとる時におった」と言った。それを聞いたBは、 「風が強いけんかなあ」と話した。</p> <p>⑥教師は、幼児たちの会話を聞いて感心し、「なるほど」と頷いた。</p> <p>残念ながら、この日は一匹のカタツムリとも出会うことができなかったのだが、⑦幼児たちと教師はその次の日、さらにその次の日も続けて、築山の周辺の花壇など、カタツムリがいそうだと考えた場所を探し続けていた。 2日後には2匹のカタツムリが見つかった。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (気付く、感じる、考える、行動する、つながる) Kは以前にエノキでカタツムリを見つけた体験から、今日もエノキにカタツムリを探している。前と同じ木であるのに、なぜ今日はカタツムリがいないのか、カタツムリがいない理由を、友達と一緒に、その時の雨や風などの状況と関連付けて考えている様子が伺える。仲間と「カタツムリを見つけない」という願いや目的を共有しながら、そのために自分の意見を出し合って行動している。</p> <p>②援助のポイント (問いかける、状況を整理する、肯定する、感心する) 幼児たちの思考を焦点化して状況整理できるように問い返した。また、カタツムリを探すため、真剣に考えていることや共に考え合っていることを讃える意図で感心したり頷いたりするような態度をとった。</p> <p>③環境の構成のポイント (雨の日も外で遊べる環境と雨具の用意、園庭の樹木の管理) 教師も一緒に傘を差して戸外に出るなど、雨の日には雨の日の楽しみ方や発見があることを共有できる雰囲気を作ると共に、日常的に木々の手入れや管理を行い、小動物の集まりやすい状況をつくる。</p>			



(事例提供 鳴門教育大学附属幼稚園)

協同性			
2012年11月20日	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「こうやって逃げるといいよ」			
<p>約束の時間になると、④空組（4歳児）の幼児たちは全員園庭に出てきた。「今日は最後まで残って優勝する」「こうやってよけたらいいんよ」などと口々に話している。</p> <p>幼児たちの意気込みが感じられる。朝からやっていた通称“自主特訓”での自信が、逃げ方の工夫や場の使い方、視線のやりかたなどの具体的な動きを語る言葉に表れている。</p> <p>サッカー“なでしこジャパン”の影響で、女兒たちは女子チームでの“自主特訓”を重ねている。</p> <p>今日は男児チームからゲームが始まった。女兒チームは近くの櫓の上から男児チームを応援する。④今日のゲームは幼児のリクエストで、教師と園長が外野からボールを転がし、幼児たちを狙い打ちにすることになっている。④まず教師がボールを持つと、投げようとする教師の前を分けるように左右に幼児たちは後ずさった。④教師と園長を結ぶボールの軌跡を読んでいるような動きだ。</p> <p>男女が混合しての決勝戦になった。Lは、二人の教師から一番遠い所におり、④教師の動きを注意して見ている。ボールの軌跡を考え、円という形の特徴を活かす最小限の動きでいいところを陣取っている。自分の後ろに回り込まれる以外は当たらないということが分かっているようだ。櫓の上からゲームの様子を見たときに、円形を俯瞰図的に捉え、戦術に取り入れたのだろう。</p> <p>結果、Lは終盤まで残った。④その後Lの作戦をまねた幼児たちはラインに張り付いて、ライン上を素早くスライドステップで逃げるようになった。</p>			
<p>考察（キーワード）</p> <p>④幼児理解（気付く、感じる、考える、行動する、真似る、伝え合う、楽しむ） 初めは、Lを含め、多くの幼児がボールに背を向け、逃げるように避けていたが、何度も繰り返していく中で、ボールの転がってくる方向に気付き、その軌跡を前もってイメージして避けるようになっていった。そして、自分の後ろに転がっていったボールが、その後どうなるか（もう一人の園長によって投げ返されること）が分かり、それに合わせた身のこなしができるようになった。さらに、高いところから俯瞰的にゲームを観察するなどして、円型という形の特徴を把握した有利な動きを身につけ、仲間と協力しながら個々の工夫や気付きを発揮しながら遊ぶスキルや楽しさ充実感が皆に広がっていった。</p> <p>④援助のポイント（求めに応じた動きをする、視線で動作予告をする） 幼児たちが思い描くプレイができるように教頭と一緒に外野を務め、スピーディーなボール回しを心がけてエキサイティングな楽しさを誘った。ゲームの序盤は、教師の狙っている所を幼児が判断しやすいように、しっかりと視線を送ったり、身振りを大きくゆっくりしたりした。</p> <p>④環境の構成のポイント（オープンスペース、遊具スペース、運動能力似合わせた広さ） ドッジボールのできるオープンスペースや高いところからゲーム全体を俯瞰できる遊具スペースを構成している。円は4歳児の人数や運動能力の状況に合わせた広さにしている。</p>			



（事例提供 鳴門教育大学附属幼稚園）

協同性			
2006年11月6～24日	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「もりのレストラン」			
<p>中庭が影で暗くなるほど大きくなったカイズカイブキは、先端を切り落とした。上から光が差し込むようになった、その木の中を、幼児たちは見逃さなかった。ままごとやホテルごっこを続ける幼児たちの「上履きのまま行き来したい」という願いが叶うように、①年長組たちと保育者とで大工仕事を始めた。テラスからつづくように、すのこ板の渡り廊下をつくったり、④「トトロが入ってくるような窓をつくりたい」というNの発想で、カイズカイブキの枝打ちをしたりした。木の中は板張りにした。</p> <p>作業はまる3週間つづいた。④「一方通行では火事の時逃げられない」「お客様がいっぱい来たらどうする」など、作業の過程でいろいろな暮らし方のイメージや構造の課題、工程の修正などが話し合われた。</p> <p>まだ、床が張れたばかりの状態であるが、Rが「ねえ。今日のお弁当はここで食べよう」と提案した。みんな喜んで賛成した。中に入れない子どもたちは周りにごごを敷いて、それを眺めながら弁当を食べた。</p> <p>④「ねえねえ、なんて言う名前がいい？ このいえ」とRが言うと、Uが「トトロの家はどう」という。すぐにHが「なんだかお化け屋敷みたい」と言う。「森の家はどう」とNが提案したが、「なんだかわたしのおうちみたい」とMが言う。「だったら、やっぱり、森のレストランか」と、Tが言うと、皆「そうそう、お弁当食べているし」と、話が落ち着いた。</p> <p>傍らで会話を聞いていた教師が②「森というイメージは、みんなもっているんだなあ。そこは同じなんだなあ」といった。するとRが④「先生、すうーって、息吸ってみてよ。ねっ、森の匂いがするだろ」と目を閉じて深呼吸した。周りの皆も同じように目を閉じて息を吸った。「する、する。ああきもちいい」「食欲出るなあ」HとTはおどけて、弁当をかきこんでいる。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>④幼児理解 (インスピレーションを働かせる、連想する、納得する、役割分担・協力、和む)</p> <p>友達と一緒にいる心地よさの中で、カイズカイブキからインスピレーションを働かせ、学級皆で製作の願いや、その方法、手順、使用の目的や作業目標を明確にしている。仲間と話し合ったり思いを取りなしたり、折り合いを付けながら皆の考えをまとめ、自分の役割を意識して行動している。イメージの実現に向けて個々のよさや持ち味を発揮し工夫したり協力したりする充実感が感じられる。</p> <p>②援助のポイント (見通しがもてるモデリング、見守る、言葉を補う)</p> <p>友達と一緒に遊び方や作り方を考える場合は、「こうすれば、こうなる」という予想や期待を相手に伝えながら共通の目的をもととする姿や、活動を見通そうとする姿を励まし、一緒に相談をしたり役割を分担したりした。自分達の遊びのイメージや関係を大切にしたいという気持ちを認めながら、友達に気付いたり受け入れたりしようとする姿を温かく見守り、思いや考え、遊び方を伝える場面では、言葉を補いながら、必要な言葉や話し方について気付いていけるようにした。</p> <p>④環境の構成のポイント (材料や道具の準備、安全確認)</p> <p>木材など、多くの友達と力を合わせて作り上げていくと楽しくなる材料などを準備しておくとともに必要な道具を用意し、安全確認を行って行く。</p>			



(事例提供 鳴門教育大学附属幼稚園)

道徳性・規範意識の芽生え

2009年6月17日

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「運転席に乗りたい！」

Aが遊動円木のそばで①困った顔をしている。②遊動円木では、BとCが運転席で遊動円木を漕いでいる。Aは教師の顔を見て、③「先生、(運転席を)代わってくれへん」、教師「そうなんか、困ったね」と④Aの気持ちを受け止めながらどうやって交渉していくのかを見守る。

A「代わって！」と運転席に乗るために⑤何度もBに交渉する。しかし、Bは代わってくれない。A「次の駅で代わってや！」と、⑥今度は交代の目途を付けて交渉する。Bは⑦「あかん！」と拒否する。そのやりとりに、⑧Dが「おいで」と運転席ではないが、自分が座っている前の空いた席(乗客席)を指してAに言う。⑨AはDの誘いに応じず、乗客席には乗らない。Bは「C君は遅くしてな、Bが速くするし」とスピードの強弱を付けようと提案する。

EとFが乗客席に乗る。Bが運転席を降りてCに話しかけに行く。FはBが運転席を降りたので、運転席に立つ。それを見て、AはFに⑩「代わって」と交渉相手を変える。Aの交渉に応じて、Fは運転席を降りる。Aはやっと運転席に乗ることができた。

しかし、BはAが運転席に乗ったことに気が付き慌てて戻ってきて、⑪「だめよ、勝手に乗ったら！いいよって言わないと」と、Bは自分の「いいよ」の了承がないと乗ってはいけないことを主張する。Aは運転席を降り、無言で立ち尽くしている。



⑫突然Cが「ジャンピング～！」と冗談を言い、場を和ませる。その様子に⑬Aが笑う。

Aが折り紙の手裏剣を持っていることにCが気づき⑭「代わったら手裏剣、ちょうだい」と交換条件を提示する。しかし、Aは、⑮大事だから手裏剣はあげたくないという表情で、手裏剣を引っ込めて、「お兄ちゃんが作ってくれてんで」と主張する。Cはバツの悪さを解消するように⑯「シンケンジャー！」と叫ぶ。Aが「シンケンジャーの塗り絵、持ってるで」と応じると、Cはさらに何か冗談めいたこと(聞き取れず)を言う。Aが笑い少し気持ちが和らぐ。

Cは⑰「もうええわ、代わるわ」と運転席を降りる。Aが運転席に乗る。教師は⑱「ありがとう」と運転席を譲ってくれたことに対して、Aの代わりにCにお礼を言う。Cは気にも留めずに違う遊びに行く。

考察 (キーワード)

①幼児理解(自発性、粘り強さ、自己主張、他者理解、葛藤、思いやり、折り合う)

遊動円木の運転席に乗りたいという思いから、交代してほしいと粘り強く能動的に相手に関わっている。互いに自己主張を続ける中で、その両者のやりとりから、別の幼児が思いを理解し、空いている乗客席に誘ったり、交換条件を提示したりしている。互いの葛藤の中、険悪なムードになりそうなところを、冗談を言いながら雰囲気や気持ちを和ませ、何とか折り合いを付けようともしている。

②援助のポイント(受容、見守り、感謝、認める)

交代してくれないという不満を受け止めながらも、あえて交渉の過程を見守っている。粘り強く交渉した結果、別の幼児が運転席を譲ってくれたことに対し、感謝の気持ちを譲ってもらった幼児に代わって伝えることで、他者の気持ちを大切に考えた行動を認める。

③環境の構成のポイント(限定された場)

二つしかない遊動円木の運転席では、自ずと交渉しなければならない場面が生まれる。この交渉場面で、他者の思いを理解したり、互いに折り合いを付けたりして、相手の気持ちを大切に考えながら行動するという経験を重ねることになる。

(事例提供 京都教育大学附属幼稚園)

道徳性・規範意識の芽生え			
2015年4月20日(月) 5月7日(木)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「大丈夫やからな、僕が付いて行ってあげる」			
<p>AとBは、4歳児の時から同じクラスで、5歳児になっても毎日一緒に遊んでいる関係である。Aは、Bの妹（3歳児で入園）とも一緒に遊ぶこともあった。</p> <p>Bは、Bの妹（3歳児）の登園後の身支度を毎日手伝い、その後も3歳児保育室で遊んでいることが多いが、今日は初めてS組（5歳児）保育室に妹と共に入ろうとした。その様子を見たAは、Bの妹の前に立ちふさがるようにして、「入ってくるな」と言う。Bは、「そんなこと言わんといて。妹が遊びたいって言ってるねん。どいて」と言う。Aはさらに「あかんで言っているやろ」と言う。その様子を見ていたBの妹の表情が曇る。教師はしばらくその様子を見た後、2人に「何があったの？」と尋ねる。2人はさらに言い合っている。㊤教師は、Aに「Bの妹の顔を見て。悲しそうな顔をしている。どうしてお兄ちゃんの部屋に来てと思う？...。お母さんと離れて寂しいのよ。さっき泣いていたよ。だからお兄ちゃんと一緒にいたいってBが話していたよ」と伝える。㊦Aは、何も言わずに最後まで聞いている。その後、㊧Bと妹は、5歳児の保育室でステッキの製作を始めた。Aは2人と一緒に遊ぶことはなかったが、同じ室内で時折、2人の様子を見ていた。Bの妹が、教師の所にラピーテープを持って来て、「これ、切って」と言う。この時Bは、自分の製作に集中していたため、㊨教師は、あえて室内にいる幼児に向けて、「誰かこれ切ってあげてくれないかな？」と声をかける。すると、AはBの妹の側に駆け寄って「おれが切ってあげる」と言い、テープを切って渡した。Bの妹は、テープを受け取り微笑む。Aは照れたような表情をする。教師は「A君ありがとう」と伝える。Aは嬉しそうに笑う。</p> <p>数日後、3歳児の幼児たちが保育室前で、担任教師の周りに集まってきている。Aは向かいの自分の保育室から3歳児の様子に気付く、近くにいた教師に対して「どこかに行くの？」と尋ねる。教師「今から耳鼻科検診するんだって」、A「やったことあるん？」、教師「もしかしたらおうちの人と一緒に病院に行っていたことがあるかもしれないけど、幼稚園では初めてかな」と答える。Aは、黙って少しの間3歳児クラスの幼児の様子を見ている。㊩A「大丈夫かな？一人でできるかな？」教師「どうかな？A君、小さい組さんのこと、気に掛けてくれているの？」㊪A「うん。心配やから行ってくるわ」と言い、室内から出て3歳児クラスの幼児の所に駆け寄る。Aは、Bの妹を見つけると「大丈夫やからな。僕が付いて行ってあげるわ」と言う。Bの妹は、Aをじっと見つめ、うなずく。AはBの妹の手をつなぎ、優しい口調で「あのね、鼻とか口とか見るだけやから、大丈夫やで。ほんま、見るだけやから」と、Bの妹に付き添って保健室まで行った後、離れた場所で見守る。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>㊫幼児理解 (他者理解、思いやり、葛藤) 自分の保育室に3歳児を入れまいとするやりとりをする中で、年下の幼児の寂しい気持ちに気付いたり、共感する気持ちが生まれたりしており、そのことが、思いやりをもって関わろうとする行動を取らせている。このような経験をしたことが、後日偶然見かけた3歳児のいつもと違う様子から、3歳児の不安な気持ちを察することができ、3歳児の気持ちを大切に考えながら、自発的に不安を和らげようとする行動を取ることに繋がったと考えられる。</p> <p>㊬援助のポイント (気持ちを尊重する、代弁する) 教師は、自分の保育室に自分のクラス以外の3歳児を入れまいとするAの思いを尊重しながら、3歳児の気持ちに気付くような関わりを行っていった。そのことにより、Aは3歳児の寂しい気持ちに気付く、共感するとともに、教師の要請に応える形で、困っている3歳児に思いやりをもって関わろうとする行動を取るようになったと考えられる。</p> <p>㊭環境の構成のポイント (雰囲気づくり) 他クラスの幼児にとっても保育室に入りやすい雰囲気づくりと、自由に製作ができるように材料を整えておく。</p>			



道徳性・規範意識の芽生え

2017年3月15日(水)

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「うさちゃんのお世話の仕方を教えてもらったよ」

園で飼育しているウサギの世話を、5歳児が日替わりで行っている。⑤5歳児クラスに進級するにあたって、4歳児が5歳児にウサギの世話を教えてもらっている。この日は4歳AKM RSYが5歳BHNTに教えてもらっている。

5歳Tが水の入ったペットボトルを持ち、「水替え行く人？」と尋ねると、4歳児6人は次々に「はい!」「行く!」と言い、5歳児4人について水道まで行く。5歳Tがペットボトルについての棒状の飲み口の部分に指をかけて回す。

④教師が飲み口を開ける様子を見ながら、「ああやって開けるんやね」と言うと、4歳児6人は5歳Tが飲み口を回すのを見る。5歳Tは飲み口を開け、ペットボトルに残っていた水を流す。③教師が「どうして水替えるんだろう?」とつぶやくと、5歳Tは「水が古くなったら美味しくないので」と言う。4歳Mは「そっかあ」と言い、4歳Kは「先生、ザリガニと一緒にや!」と言う。教師は「ほんまやなあ。ザリガニも水替えたげないとしんどくなっちゃうもんなあ」と言う。4歳Kは笑顔で頷く。

5歳Nが水道の前で「水入れたい人?」と尋ねると、4歳児6人は次々に手を挙げて「はい!」「したい!」と言い、5歳Nの所へ集まる。5歳Nは「じゃあ順番ね。はい」と水道の一番近くに立っていた4歳Aにペットボトルを渡す。4歳Aは出てくる水をじっと見ながら、少しずつ蛇口をひねって水を出し、ペットボトルに入れる。5歳Nはペットボトルを持って押さえ、ペットボトルに少量水が入ったのを見て「ストップ!」と言う。4歳Aはすぐに蛇口をひねって水を止め、4歳Rにペットボトルを渡す。5歳Tはペットボトルを見ながら「ちょっと待って」と言い、5歳Nの耳に口を近づけて「何キロずつにする?」と尋ねる。5歳Nは「何キロずつって言っても分かんないじゃんそなの」と言い、5歳Tは4歳Rを見ながら「じゃあちょっとずつね。ちょっとずつ」と言う。5歳Hは5歳NTの話聞き、蛇口の前に集まっている4歳児を見て「はい並びます!並んでくださあい!やりたい人は並んでくださあい!」と呼びかける。4歳AMYはペットボトルに水を入れている4歳Rの後ろに並ぶ。④4歳KSは4歳Rが水を入れているのを隣で見ている。5歳Hは4歳Kの腕を後ろに押しなが



ら「やりたかったら並びや」と言う。4歳Kは4歳AMYが並んでいるのを見て、その後ろに並ぶ。④5歳Hは4歳Sのすぐ後ろに壁になって置いてあるワゴンを除けながら4歳Sを見て「並びや。ここに並びや」と言う。4歳Sは4歳Kの後ろに並ぶ。



考察 (キーワード)

①幼児理解 (自発性、他者理解、思いやり、他者への思い)

5歳Hは、水を入れる列に並んでいない4歳児が、皆が並んでいるのに並んでいないことに気づき、個別に声をかけたり、並ぶ場所を知らせたり、並びに行きやすいように通り道を作ったりして手助けしている。初めてウサギの世話をする4歳児が困らないようにしてあげようという思いがあるから表れた行動であると考えられる。

②援助のポイント (教えるきっかけ作り、言葉にして言う)

4歳児に向けては世話の仕方に注目したり、世話の意味を考えたりする意図で、同時に5歳児に向けては4歳児に言葉にするなどして教えようとするきっかけにしたいという意図で、していることを言葉にして言ったり、疑問に思ったことを呟いたりしている。また、5歳児が4歳児のことを考えて教えたり助けたりし始めてからは不要な口出しをせずその様子を見守っている。

③環境の構成のポイント (教える場の設定、少人数での場の設定)

修了前の時期に5歳児が自分たちがしてきたことを4歳児に伝える場を設定している。5歳児が4歳児一人一人の様子を掴んで気にかけてやすいように少人数での場を設定している。

(事例提供 神戸大学附属幼稚園)

社会生活とのかかわり			
2017年9月21日(木)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「金沢の旗は？」			
<p>のびのびフェスティバル(運動会)に向けて、全園児が毎年一人一枚、国旗をかいて園庭に掲げている。3歳児が自分なりに国旗をかいだときのことである。</p> <p>最初に、㊦5歳児がかいた国旗を幼児に見せた。幼児は口々に「すごい」「きれい」「それ(5歳児がかいたブラジルの国旗を指さして)見たことある」「僕(アメリカの国旗を指さして)知っている」などと、声をあげた。</p> <p>教師は、㊦国旗の絵本を見せながら㊧特徴的な絵や形がかかっているものやよく目にするようなものを示した。また、㊨みんなの住んでいる国は日本であること、日本の国旗は白い四角の真ん中に赤い丸がかかっていることを伝えた。しかし、㊩多くの幼児は何となくわかったような、わからないような表情になった。そこで、㊨教師はもう一度日本の国旗を示して「この旗はみんなが住んでいる国の旗なんだよ」と伝えた。㊩A「先生、金沢の旗は？」㊨教師「金沢は日本の中にあるんだよ。だから、国旗は日本の旗」㊩A「じゃあ(祖父母が住んでる)熊本は？」㊨教師「熊本も日本の中にあるの。だから同じ日本の旗」㊩Aは驚いたように「ええ、同じ！」と声をあげた。㊩B「(単身赴任のお父さんが住んでいる)富山は？」㊨教師「富山も日本の中にあるよ」㊩多くの幼児が驚いたように「えー！」と声をあげた。㊩C「じゃあ、幼稚園も？」㊨教師「そうだよ。日本の国の中にあるんだよ」㊩幼児は「えー!」「すごいね」と声をあげた。</p> <p>その後、一人一人が国旗をかき始めた。しばらくすると㊩Aが「あれは、幼稚園のマークなんでしょう」と㊦園章が刺繍されている学年カラーの旗を指さして言った。前々日、避難訓練を行った際、教師がクラスの旗について話をし、幼児の目に届く場所に設置しておいたものである。Dが「そうだよ、黄色(学年カラー)の旗がうさぎ組の旗だよ」と言うと㊩Aが「おもしろいね」とつぶやいた。</p>		  	
<p>考察 (キーワード)</p> <p>㊩幼児理解(身近な場所や地域への親しみ、知る、驚きを共有する)</p> <p>3歳児にとって、国旗は見たことはあるものの、国旗と自分の関係性を理解している幼児は少ない。幼児にとっては、『日本』よりも自分が住んでいる『金沢』や祖父母などが住んでいる場所が身近であることがわかる。さらに、より身近な『うさぎ組』の旗を思い出し、旗にはいろいろな旗があることを知る機会となった。</p> <p>また、金沢、熊本、富山、幼稚園と、別々な場所も、同じ『日本』であることを伝える教師の言葉に、声を合わせて驚いたり喜んだりする姿から、家族やうさぎ組だけではなく、所属意識の広がりを感じていることが分かる。</p> <p>㊨援助のポイント(モデルを提示する、説明する、共感する)</p> <p>3歳児なりに国旗に興味をもち、自分もかいてみたいという思いをもってほしいと願い、関わった。しかし、幼児の興味は、教師の予想とは異なり、自分にとって身近な地域へと移っていった。その幼児の疑問や驚きに共感し、思いを受け止めることで、幼児は同じ国に住んでいるというつながりを感じることに繋がった。</p> <p>㊦環境の構成のポイント(憧れのモデル、見通し、身近な旗)</p> <p>国旗に興味をもったり、運動会に国旗を使う目的を知ったりすることを願い、3歳児にとって身近で憧れの存在でもある5歳児のかいた国旗を提示した。さらに、たくさんの種類の国旗があることを知ってほしいと思い、国旗の絵本を提示すると共に日本の国旗を伝えた。また、幼児にとって身近な自分達のクラスの旗を目に見える場所に提示していたことで、国旗とは異なるが、旗を認識することにつながった。</p>			

(事例提供 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園)

社会生活との関わり			
2016年9月5日(月)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「色々な国旗を描こう」			
<p>本園では2002年の日韓ワールドカップで多くの幼児が興味をもったことをきっかけとして、運動会で幼児がつくった様々な国旗を園庭に掲げるといふ園文化がある。</p> <p>国旗づくりにつなげようと、㊦保育室に国旗の絵本を置いておいたところ、何人かの幼児が興味をもち始めた。そこで教師は㊦紙芝居台を使い厚紙に貼った紙芝居サイズの国旗を見せながらクイズを行った。</p> <p>まず㊦日本、中国、韓国など近隣の国の旗を見せた。幼児は「知ってる！それ日本や！」</p> <p>「中国も知ってるよ！」㊦「韓国はお隣なんだよ！」とすぐに答えた。次に、㊦前月にリオデジャネイロ五輪があったことから、ブラジルとジャマイカの国旗を見せた。「ブラジルや！」</p> <p>「ボルト選手や！」幼児は国旗を見て自分の知っていることを話していた。続いて、㊦パラオ・バングラディシュ・イタリア・フランスなどの国旗を見せた。㊦「(パラオ・バングラディシュの国旗を見て)日本と似とる」「色だけ違う」「(イタリア・フランスの国旗を見て)また似とるやつや」「しましまは一緒だけど、色がちょっと違う」といったように、それぞれの国旗の形や色の相違について話し始めた。クイズを終え、教師が㊦「みんな、国旗のおもしろいところをいろいろ見つけたね」と話すと、何人かの幼児が㊦「私、かいてみたくなった！」</p> <p>「かきたい！」と言い出したので、教師は白画用紙を配った。幼児は国旗クイズに出てきた国旗を見ながら、自分のかきたい国旗を選び、何枚もかいて楽しんだ。幼児のかいた国旗はクラスの壁面に万国旗として飾った。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>㊦幼児理解 (ものの表す意味、情報、社会の話題) 自分の知っている国旗と、その国の情報やその時に社会で話題となっていることをつなげて国旗を認識している。また、教師が見せた国旗を見比べて、共通している要素や違いに気付いている。相違は色だけではなく、形や並び方についても気付いている。</p> <p>㊦援助のポイント (身近なもの、きっかけづくり) 教師が幼児にとって身近な国旗から見せたことで、国の場所やオリンピックという社会の出来事とつなげて話す姿につながっている。形や色の相違に気付きやすいような順序で見せていったことで、幼児が比較して考えることを促している。</p> <p>㊦環境の構成のポイント (興味を引く教材、活動に合った素材) 幼児が興味をもちやすいよう、国旗の絵本をクラスに置いている。また、紙芝居台を使ってクイズをすることで、より幼児が楽しみながら興味をもつことができるような環境となっている。さらに、幼児が国旗をかいてみたくなることを予想し、国旗をかくにふさわしい、大きさや形の白画用紙を準備している。</p>			

(事例提供 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園)

社会生活との関わり

2016年9月12日(月)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
---------------	-----------	-------------	-------

「イギリスってどこにあるの？」



幼児はこの日までに、①様々な国旗を見たりかいたりし、この日も形、色、模様など、特徴のある国旗の中から、多くの幼児が自分のかきたい国旗を決め、見本を見ながら、運動会に向けて園庭に掲げる国旗をかいていた。どの国旗をかこうか迷っているAの姿を見て、国旗を選ぶヒントにしてほしいと願い、②2学期からイギリスに滞在しているBについて「Bちゃん、元気かな」と言った。仲のよかったBを思い出しAとCは見本を見ながら「Bちゃんが行ったロンドンってどの国旗?」「ロンドンって国じゃないよ。イギリスだよ」と、イギリス国旗

をかこうと決めた。かきたい国旗が決まると、Bが滞在しているイギリスに思いを馳せ、③Bがどこにいるのか興味をもったようで、Cと共に「イギリスってどこにあるの?」と教師に尋ねた。④教師はホワイトボードに世界地図をかき「日本がここで、ずーっと行ったところがイギリス」と日本からの距離や世界の中での位置に関心が向くようにマジックを飛行機に見立てて動かしながら印をつけた。「端っこだ」「遠い」とBが行った場所の遠さに驚いていた。教師とACが話している様子を見て、「これ何?」と他の幼児も話に加わってきた。これまでの話をACから聞くと「じゃあ、リオは?」と先月行われていたオリンピックの開催都市を思い出した。Cが「リオってブラジルだよ」と国名を伝えると「ブラジルの国旗ってどれ?」「真ん中に模様ある緑の(国旗)」「(見本を見ながら)これでしょ?」など口々に言う。教師は、「日本はここで、ブラジルはこのあたり」とマジックを日本からブラジルへと空路がイメージできるように動かし、⑤ブラジルに印をつけ、国旗の絵をかいた。⑥「(イギリスと日本の位置関係と比べて)反対側だ」「やっぱり遠い」「リオオリンピック、日本は夜だったのに昼だったよ」「イギリスとブラジルってどっちの方が遠い?」など話していた。その後、中国や韓国など知っている国をいくつか挙げ、教師がホワイトボードの世界地図にそれぞれの印と国旗をかくと、「近いね」「こんなところなんだ」と日本との距離を感じているようであった。

⑦しばらくして、国旗をかき終わった幼児が世界地図に気付き、次々とホワイトボードの周りに集まってきた。Bの滞在するイギリスや知っている国の位置関係を世界地図に示したことを話すと、Eは「フランスは?」と自分がかいた国の位置を尋ねてきた。「ここかな」と答えると、⑧「イギリスと近いね」と他国同士の位置関係にも興味をもっていた。自分のかいた国旗の国や知っている国の位置を知りたいだけでなく、すでに記してあるどの国と近いか考えながら、自分の興味をもったことについて確認していた。

考察 (キーワード)

①幼児理解(気付く、考える、比較、知識の活用、好奇心、疑問を持つ)

年少時や年中時にも運動会に向けて国旗をかいてきたことで、国旗をかくことには親しみをもっている。クラスの友達であるBの存在やオリンピックを通して、身近に感じたり見聞きしたりしたことのある国などが増え、外国に興味をもっている。自分の知っている国の場所や日本からの距離、他国同士の位置関係を知りたいと思っている。

②援助のポイント(きっかけをつくる、つなげる、見立てる、記す)

Bの話をしたことをきっかけに、国旗だけでなく国に興味に向くようにする。幼児が興味をもっている国の場所や、日本との位置関係を見て分かるように世界地図に示したり、距離感が伝わるようにマジックを飛行機に見立て動かしたりする。

③環境の構成のポイント(選択できる、可視化する)

毎年、運動会の時期に園庭に国旗を掲げて、様々な国旗に親しむことができる環境となっている。様々な国旗を知ることができるように、国旗の見本や国旗がかかれた絵本を用意しておく。友達と共有できるように、世界地図をホワイトボードにかき残す。

(事例提供 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園)

思考力の芽生え

2016年6月	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
---------	-----------	-------------	-------

「たまごの正体は何かな？」

園庭にある金柑の木に今年もアゲハチョウがたまごを付けていた。①それに気付いた教師は「あれっ、これ何だろう。」と、近くにいた3歳児の幼児たちに声を掛けた。「どれ？」と葉っぱを見て、幼児たちは、たまごに気付いた。②「何かのたまごかな。」「カタツムリのたまごじゃない？」と幼児同士で話をしながらたまごを見た。③教師は、「もっと、大きくなったら、分かるかもね。」と声をかけ、たまごが付いている枝をハサミで切り、Aに渡した。Aは、「みんなに見せてくる。」と、保育室へ駆けていった。④AはCにたまごを見せると、「ここだよ。(たまごを指さす。)」「えー、分かんないよ。」「この黄色くて、まるいの。」「あっ、ほんただ。」と黄色いたまごの存在を友達に伝えた。



⑤その日の降園活動で、教師はAが何かのたまごを見つけたことを学級の幼児たちに紹介した。すると、⑥「見せて、見せて」と、幼児たちが、たまごが入った容器を見るために集まってきた。幼児たちが葉っぱの上のたまごを確認した後、⑦教師が色や形を尋ねると、⑧「黄色」や「丸い」などの答えが返ってきた。教師が「これ、何のたまごだと思う？Aくんは、カタツムリって言っていたよ。」と言うと、⑨口々に「ぼくはね。恐竜だと思う。」「私は、オタマジャクシ！」「カブト虫になったらいいな。」などの答えが返ってきた。中には、「チョウチョだよ。」と答えた幼児もいたが、⑩教師は、すべての考えを認め、「そうだね。いろんな考えが出てきたね。でも、分かんないから、みんなで育てて確かめてみよう。」と声をかけた。幼児たちは、納得し、⑪容器に入れて、保育室で飼うことになった。

2日が経ち、たまごの入った容器を見ていた⑫Cが「先生、うまれたよ。」と伝えた。よく見ると、小さな黒い幼虫が動いていた。⑬「どこ？どこ？」と周りにいた幼児たちが集まってきた。「あっ、ここにいるね。まだ、ちっちゃいね」と、たまごからかえったばかりの小さな幼虫をみんなで確認した。

その3日後、幼虫は大きくなり、金柑の葉を食べるようになってきた。⑭教師が「この葉っぱが好きなのかな。Aくん、この葉っぱどこにあった？」と訊くと、⑮「ぼく、とってくる。」とAは答え、教師と一緒に金柑の木へ移動した。「この木だったよね。」とAは教師に確認をし、一緒に3枚くらい葉っぱの付いている枝を切って、容器に入れた。

その後、日によって葉っぱをとって入れる幼児は変わるが、幼児たち一人一人が幼虫の成長を見守った。⑯見守る中でうんちの色やオレンジ色の臭角があることなどにも気付いた。

⑰1週間後の週明け、登園してきたAが幼虫がいないことに気付いた。⑱教師は、「ここにいるのは、なあに？」と、虫かごの蓋の裏側を見せた。Aは、チョウがさなぎになっていることに気付いた。⑲教師は、「さなぎになったんだよ。さなぎになると、えさは食べなくなるんだよ。」と説明し、もうしばらく様子を見ていくことにした。

その後、夏休みになり、羽化する様子を見ることはできなかったが、⑳夏休みの園庭開放で、チョウになった様子を紹介することができた。

考察 (キーワード)

①幼児理解 (気付く、伝え合い、興味・関心、発見の喜び、考える)

たまごの発見から何のたまごになるのか不思議に思い、教師とその成長の過程を観察したり、世話をしたりすることでさまざまな気付きが生まれ、チョウになることを確かめた。

②援助のポイント (問いかける、共感する、説明する)

たまごの特徴やたまごから何が生まれるかを尋ねるなど幼児たちの気付きを生み出すように言葉をかけた。また、一緒に世話をすることで、生命の不思議さや幼児の発見に共感した。

③環境の構成のポイント (自然、観察しやすい場の工夫)

その時期の園庭の自然について知っておき、幼児の気付きにつながるような言葉をかけた。また、身近に感じられるように、目に触れやすいところに常に観察できる場を整えた。

(事例提供 鹿児島大学教育学部附属幼稚園)

思考力の芽生え			
2016年11月	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「スティラコサウルスのトゲは何本か!？」			
<p>9月に、恐竜が好きな幼児たちがソフト積み木を使って恐竜をつくり、「恐竜ショー」を開いた。①友達を招いて積み木の恐竜を見せながら、恐竜の特徴について説明した。このときは首の長さや背中のとげの特徴を表したものの、足は2本足であったり、しっぽは付けられなかったりと、やや平面的な恐竜であった。</p> <p>11月になり、今度は恐竜博物館を開きたいと言い出した。</p> <p>②幼児たちが抱く博物館のイメージを尋ねると、たくさん恐竜が並んでいて、その中を歩いて見て回るというものであった。ソフト積み木では、つくることのできる恐竜の数に限りがあることを話すと、①「じゃあ箱でつくろうよ!」と空き箱を使って恐竜をつくるアイデアが生まれた。周りの幼児たちが賛成したので、恐竜づくりが始まった。</p> <p>Aはスティラコサウルスをつくることにして、体用の大きめの箱に足用の箱を4つつけ始めた。③「この恐竜は4本脚で立つんだ。」と教師が尋ねると④「そうだよ。これは4本。ティラノサウルスの前足はこうなってるけどね。」と手を曲げて前足を表現して見せ、恐竜による前足の違いを説明した。④Aはつくり進めていき、顔は大きな箱を選び、目の位置は図鑑を見ながら付けていった。⑤教師が図鑑のスティラコサウルスの頭のトゲを指しながら「このトゲトゲはどうしたらいいかな。」と尋ねると、「うーん。うーん。」と少し考え、①「あ。この箱をつけたらいいんじゃないかな」と言って、歯ブラシが入っていた細長い箱を手にした。⑥教師が教材室から箱をとってくると、Aは図鑑に顔を近づけて数を数えていた。数え終わったときに⑦「何本つけたらいいか数えていたんだ」と言葉をかけると、「そうそう」と答えた。①初めは口で数を言いながら数えたが、途中で数えるのを止め、今度は指でトゲを指しながら数え始めた。途中で「あれ、分かんなくなっちゃった」と言い、今度は指で指しながらさっきよりもゆっくりと数え始めた。「13だ。」と数え終わると、鼻の角と合わせて箱を13本つけ、完成させた。</p> <p>⑧保育室の一角に完成した恐竜を並べて恐竜博物館を開き、①お客としてやってきた友達を中へ案内し「これはスティラコサウルスです。草を食べます。頭にはたくさんのトゲがあります。」と①つくった恐竜についての説明をした。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (自発性、観察、イメージする、創造、継続、目的の共有)</p> <p>図鑑を見ながら恐竜の特徴に気付き、その特徴を身近な素材を使ってどうやって立体で再現しようか考えながら製作している。自分たちが好きな恐竜について、自分たちだけで楽しむのではなく、他の友達にも紹介したいと、友達と楽しさを共有しようという気持ちを抱いている。</p> <p>②援助のポイント (イメージの整理、言語化)</p> <p>幼児たちが抱く恐竜博物館のイメージを尋ね、一緒に遊ぶ幼児たちがそのイメージを共有できるようにする。幼児が表したものや子どもの考えを言葉にして表す。</p> <p>③環境の構成のポイント (素材提供、空間づくり)</p> <p>幼児が使いたいと思った素材を使うことができるように、素材の提供をする。恐竜博物館を開くための空間を保育室の一角に確保する。</p>			

(事例提供 鹿児島大学教育学部附属幼稚園)

思考力の芽生え

2017年11月10日（金）

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

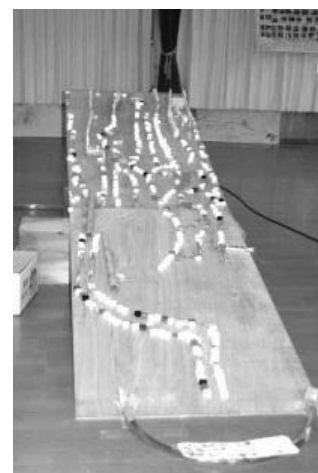
「どんぐり村の迷路 大作戦」

ベニヤ板に木材やペットボトルのキャップを貼り付け、道をつくり、クヌギを転がして遊ぶ「どんぐり村の迷路」をつくって遊んだ。始めにつくったものは、思い思いに木材などを並べており、コースが単純なため、何度も試した子供たちは、①「さらに難しくたくさんコースがあるものをつくろう」と話し合った。②教師は、幼児たちの思いに寄り添いながら、一緒に仲間となって話し合いに参加した。



③Aが「まず、設計図をかこう」と友達に呼びかけた。

「先生、大きな紙をください」と言ってきたので、教師は広幅用紙を渡した。④早速、数人が集まって広幅用紙に設計図をかき始めた。「コースをいっぱいつくろう」「ここは、難しいから、うみ組（年長児）コースね」「簡単なはな組（年少児）コースもつくろう」「ここは、ジェットコースターみたいにクルクル回るといいな」など、数人でペンを動かしながらイメージを共有し、設計図は完成した。



次に、設計図で確かめながら、コースづくりが始まった。⑤木工用ボンドで木材やペットボトルのキャップを一つ一つ付けていった。ペットボトルにボンドを付ける人、それを手にとり、板に貼り付ける人に役割を分担しながらコースづくりは進んだ。

Aが「先生、これ見て」と、1mの透明のホースの中にクヌギを通して見せた。ホースは曲がっており、ホースを通ると、勢いよく飛び出してくる。⑥「これ、ジェットコースターみたいでしょ。これを、通ってスタートさせるんだ」と伝えてきたので、⑦「おもしろいね」と教師は、その考えに共感した。

⑧ボンドが乾くと、試しにクヌギを転がしてみた。転がしてみると、コースの幅が狭く、クヌギが通らなかつたり、遠くまで転がらなかつたりすることに気付いた。「もっと、この幅を広くしよう」「二枚目の板も坂道にすると、もっと転がるんじゃない？」など、1回目の経験を生かし、試しながら修正をしていく幼児たちの姿が見られた。⑨教師は、幼児たちの気づきを周りの幼児に知らせて、一緒につくっていった。

考察（キーワード）

①幼児理解（協同性、創造性、挑戦・試す、目的・目当て、こだわり）

設計図をつくり、友達とイメージを共有したり、完成の見通しをもって試したりした。また、コースをつくっては、クヌギを転がして試し、うまくいかないところは、作り直したり、下に積み木を入れ急な坂にしたりして、工夫しながらつくった。

②援助のポイント（共感する、仲間になる、提案）

幼児たちと仲間になって、イメージを広げたり、材料の提案をしたりして一緒につくっていった。また、幼児たちの出来た喜びや工夫に共感した。

③環境の構成のポイント（安全確保、材料の準備）

大きな製作になったため、幼児と一緒に設置したり、板の下に潜らないようにしたりして安全の確保に努めた。また、さまざまな工夫が出来るように、事前に材料の準備を行った。

（事例提供 鹿児島大学教育学部附属幼稚園）

自然との関わり・生命尊重

2017年6月6日

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「雲が黒くなったよ」

朝、窓の近くでCと一緒に電車ごっこをしていたら、部屋の外でBが「先生！」と呼んだので、外に出て今度はBとカエルを見ていた。いつの間にかAが外に出てきた。①Aはじっと空を見上げて「先生、雲が黒くなったよ」とまっすぐ上を指さして言った。「さっきは黒じゃなかったの？」と尋ねると、Aは「うん。さっきは違う」と答えた。すると②Cがそばに来て「雨降りそう。先生あれは雨雲って言うんだよ」と教えてくれた。③教師は「雨雲？」と聞き返すとCは「そう。テレビで今日は雨雲が出ますよって言ってたの」と答えた。「テレビでやっていたんだね？」Cは「うん。そう」と答えた。④「雨雲ってなあに？」と尋ねると、Cは「雨雲ってね、雨が降る雲のことだよ」と得意げに答えた。「よく知ってるね。じゃあ、この雲から雨が降ってくるんだね」と聞くと、Cは「うん。そうだよ」と笑顔で答えた。じっと空を見上げているAに教師は「そうなんだ。雨がこれから降るのかもしれないね」と伝えたが、⑤Aはまだ空を見ていた。



2人の会話を聞いていた⑥Bが「あっ、先生！あつちは晴れてる！」と東の空を指さした。確かに明るい雲と晴れた空が見えた。「ほんとだ！あつちは晴れているね。⑦「Bくんよく気が付いたね。AちゃんCくん、あつちは晴れてるってBくんが教えてくれたよ」と三人を繋いでみると、C「でもテレビで今日は雨雲が出ますよって言ってたよ。雨降るよ」と言った。⑧教師は「どっちになるかな？晴れかな？雨かな？」と楽しみにできるような言葉をかけ、待つことにした。

帰りの時間になったので⑨教師は外に出て空を見上げた。一緒に見上げた⑩Aが「あ、晴れてる！先生晴れたね」と嬉しそうに言った。⑪「ほんとだ！晴れたね」と言葉を返ししながらCを見てみると、⑫Cは納得いかない表情で空を見ていた。

考察 (キーワード)

①幼児理解 (気付く、観察力、記憶力、感動、安心)

Aは登園中に晴れていたことを感じ取っていたから、雲が黒くなったことに気付いたのだろう。そしてAは教師とCの「雨雲だから雨が降る」という会話を聞きながらじっと空を見て本当に雨が降ってくるのだろうかと思いつつ見続けていたのだと思う。Bは、黒い雲が視界に広がっている中で東の空が晴れていることに気付き、東の空が晴れているから真上の空も晴れると予想したのではないか。Cは家庭でよくニュースや天気予報を見ているようだ。天気予報では雨が降ると言っていたことを信じていたのに、現実には晴れてしまい、混乱していたように思う。空の様子などあまり関心が向けられない幼児が多い中で、AとCは雨雲があったのに晴れたという自然界の不思議さを体験することになった。Aはずっと気になっていたことが解決できてスッキリとしたのではないか。もしかしたら、雨が降らなくてよかったと思っていたかもしれない。

②援助のポイント (共感的に受け止める、好奇心を引き出す、子供同士をつなげる)

空の様子に気付いた幼児がより興味関心をもち、自然現象に好奇心をもてるよう、それぞれの話に共感して丁寧に受け止めた。3人の気付きや感じ取り方はみな違っており、BとCは自分の考えが正しいと思っているようなので、その先どうなっていくか興味関心が続くような言葉をかけた。また、自分の考えたことがその後どうなったかを自分の目で確かめられるよう、教師は忘れずに声をかけていた。

③環境の構成のポイント (園庭の環境を生かす、気付きの共有)

いつ保育室の外に出ても、室内からも広々とした空がよく見える環境にある。ちょうど天候が変わりやすい日に幼児の気付きがあり、教師が受け止めて発展させた。雨雲があったのに晴れたという自然界の不思議さを体験できた事例である。

(事例提供 茨城大学教育学部附属幼稚園)

自然との関わり・生命尊重			
2013年5月～6月	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「トンボやメダカの住む池になるといいね」			
<p>(5月) ①園にある小さな池の周りで遊んでいた三人の幼児たちが、②池の水が少なくなっていることに気付き伝えに来たので、③教師と一緒に池をのぞき込んだ。④A「水は赤い石の所まであったよね」B「木の上で見ていた鳥が水を飲んじゃったからだよ」C「池にあなが開いてるんだよ」A「でも去年の年長さんが作り直したよね」B「水が空に上がって減った(蒸発した)んじゃない?」A「水を入れればいいよ」B「雨がいっぱい降ればたまると言っていた。⑤教師は「そうなのかな。みんなにそのことを知らせてみたら?」と投げかけた。</p>			
<p>(6月) 幼児たちが帰った後、池にカモがやってきた。翌日⑥教師は幼児たちにデジカメで撮っておいた写真を見せた。心配した幼児たちは池をのぞき込んで、D「メダカが食べられちゃったんじゃない?」E「いないよ!」と数え出し、E「池にメダカがいないよ。たくさんいたのに」F「貝とアメンボはいたけど」D「やっぱり食べられたかも」E「どうして5匹しかいないんだろう。10匹はいたよね」と何度も数えている。⑦D「池の中がよく見えないね」F「葉っぱとかあってよく見えないね」E「汚れているんだよ。葉っぱとか浮いているし。汚いとメダカが死んじゃうよ」と水の濁りに気付き始めた。G「池の葉っぱはときどき取った方がいいって言ってたよ」D「きれいにしたほうがいいよ」という意見が出た。⑧E「メダカが死んじゃったら困る」D「きれいにしようよ」と4人の意見がまとまり池の葉っぱを取り除くことが決まった。大勢でやればいいという意見が出たので、⑨年長児全員に呼びかけて行うことにした。</p>			
<p>数日後、池の中の葉を取るための道具(火ばさみ)を準備していると、⑩捕虫網などを持ってきて取り始めた幼児たち。思っていたよりも池の底にたくさんの葉が沈んでいる様子を目にして「まだまだたくさんある」と夢中になって取っていた。⑪葉を取り除くうちに、サカマキガイが付いていることに気付くと、「池の中に戻さなくちゃ」と葉を一枚一枚確かめてサカマキガイを一つずつ取っては池に戻した。取っても取っても減らない落ち葉はいつのまにかビニール袋一杯になっていた。やっと池の底が見えるようになったところで、「もう終わりにしようか?」と教師が声をかけた。⑫「こんなに入っていたんだね」「きれいになって良かったね」「メダカが嬉しそうだね」と皆、満足していた。⑬「取り除いた葉はどうする?」と教師が聞くと、「畑にまけば土の栄養になるよ」という意見が出たので、⑭皆でそうすることにした。</p>			
<p>後日、⑮嬉しそうに「水が少し増えていたよ」「雨が降ったからかなあ」「メダカが橋の下に見えたよ」と報告してくれた幼児たちがいた。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解(気付く、観察力、思いやり、連帯、達成感、行動する) メダカがいる池に幼児はよく行くが、水の減りに気付くことはない。5月になって水が減ったことに気付いたA、B、Cは不思議な現象を予想し合った。6月にはカモが池にいた写真を見たことで、メダカを思いやる気持ちが芽生えた。水の汚れに気付き、メダカが死んで困るという共通の目的ができ、全員で葉を取り去る行動に出た。メダカだけではなく、サカマキガイの命も救いながら池をきれいにし、達成感を味わうことができた。</p> <p>②援助のポイント(一緒に見る、思いを受け止める、気付かせる、見守る、発見の共有化) 幼児の気付きや考えを受け止め、他の幼児にも伝えて共に考える場をもつことで自然への関心が高まるようにした。メダカが少なくなっていることにも気付くようにカモの写真を見せた。メダカを助けようという共通の目的が達成され、メダカを思いやる気持ちが大きくなった。取り除いた葉についても、過去の経験を思い起こさせるため、「どうする?」と投げかけた。</p> <p>③環境の構成のポイント(園内の自然環境の保持、継続的関わりの保障) 手作りの池は、自然界の中の様々な動物を観察する貴重な場所である。オタマジャクシ、メダカは常にいる。池に落ちることもあり、必ず教師が同行しているため幼児の気付きを共有しやすい。虫などをいつでも自由に捕れるよう学級に捕虫網を常備している。</p>			

(事例提供 茨城大学教育学部附属幼稚園)

自然との関わり・生命尊重

2017年9月4日

3歳児～4歳前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「ヒマワリの種」

9月4日

①教師が家から枯れたヒマワリを持って来て、空き箱に入れて幼児の目に付くところに置いた。登園してきたA、Bが気付く、「わーヒマワリ」「花びらが茶色になっちゃってるね」「これ、種だよ」などと言っている。そのうちC、D、Fも来て、種を指先でつまみ出す。②Cはクラスにあった植物図鑑を広げてヒマワリのページをじっと見ている。そして、「先生、ヒマワリって種が2000個もあるんだよ」と言う。図鑑に書いてあるようだ。そのうち、A「1、2…」と種を数え始めた。C、DもAに続けて数え始め、種を数えては手に持っている。③教師が、数えやすいようにとカゴを出すと、2人は数えた種をそのカゴに入れる。2人は201、202…219と数え、止まっている。教師が「次は220だよ」と言うと、A「そうか、220、221…」と300まで数えた時に④教師が300と書いた紙をカゴに置いて「これが300」と言うと、2人はまた1から数え始めた。片付けの時間になり、Eが残っている種をすでに数えたカゴに入れてしまった。A「えーなんで」と怒った。D「せっかく数えたのに、分かんなくなっちゃった」Eは今にも泣き出しそうだったので、⑤教師が「Eちゃんは、みんなが数えていたこと知らなくて、片付けてあげようとしてたんだと思うよ」と言うとEが大きく頷いた。それを見て⑥D「そうか、ごめん。明日はEも一緒に種を数えよう」と話していた。



9月5日

A、C、D、Eは朝から種を数えようと張り切っている。⑦数えやすいようにと、教師が紙にマス目と数字を100まで書いておいた。A、C、D、Eの4人は、そのマス目にヒマワリの種をおいて数え始めた。Aが「100できた」というので、⑧教師がその種を小さな容器に入れ、「100」と書いた紙を乗せた。また、マス目に種を乗せて数え始めた。そして⑨ついに全ての種を数え終えた。D「2300だ」と大きな声で知らせた。A「そんなにあったんだ」⑩D「新聞にしてみんなに知らせなきゃ」E「前みたいに紙に写真貼って…」と、以前も同じように新聞を作ったことを思い出したようだったので、教師が種の写真を撮ってプリントした。できた物に⑪A、C、D、Eで「2300たねがありました」と書き、他のクラスに張り切って配りに出かけて行った。



考察 (キーワード)

①幼児理解(挑戦、自発性・能動性、目的、仲間意識、実感、達成感、共有)

幼児たちは、図鑑を見てヒマワリの種の量に驚いて、実際に確かめようと数え始めた。幼児たちは種の数を確認しようと粘り強く挑戦して自然のすごさを実感し、その満足感を他のクラスでも共有しようとした。




②援助のポイント(見守る、目的に向かうための関わり、話し合う環境作り)

種を数え始めた子どもの自発性を損ねない最小限の援助ー幼児が最後まで数を数えきれるよう、数字を書いた紙と100の種を小分けする入れ物を準備ーをした。過去の幼児の新聞作りの気付きを大切に受け止め、共感した。

③環境の構成のポイント(素材の提供、繰り返し試せる環境)

1学期末にヒマワリを飾っており、秋の花の変化を体験できるようにと意識した。クラスの誰もが知っていると思って持ってきた。

(事例提供 茨城大学教育学部附属幼稚園)

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚			
2017年10月3日(火) 6日(金)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「飴屋さんに来てください」			
<p>10月3日 「食べ物屋さんです」と、年長児のAとBが食べ物をワゴンに乗せて年少組にやって来る。A「食べたい人はお金がいます」と言う。教師が「年少さん、つくるの難しいんだ。先生がお金の形に切るからちょっと待って」と言うと年長児が「私がつくってあげる。どっちのペンでかいてほしい?」と年少の幼児たちにお金をつくってくれる。教師が㊤「100円ってかいてあるよ。これを持っていったらいいのかな?」と言うと、B「僕にちょうだい。何がほしいですか」と聞く。年少児たちが分からない様子でいるので、教師は㊤「何があるのかな?ここに書いてあるよ。かき氷、サンドイッチ…」などメニューにかいてあるものを指さしながら読み上げる。年少児が「かき氷」と言うとBが「はい、どうぞ」とかき氷をくれる。</p>			
<p>10月6日 年長組のお店屋さんに行った後、㊤「年少組でもお店屋さんをやっていうのはどう?」と教師が提案すると「やりたい」と幼児たち。㊤<u>ドングリを使って飴屋さんをすることになる。集まってきた幼児たちとドングリ飴をつくっていく。教師が㊤お店屋の枠を机の上に出すと、C㊤「あめやさんがあります」ってかいて</u>と言う。</p>		  	
<p>㊤教師がかくと、Cはその紙にストローをつけて旗のようにする。「ここに穴をあけて」とCがお店屋の枠の上を指すので、穴をあけると㊤Cは旗をさして看板のようにする。㊤教師が「なるほど、これで何屋さんか分かるね」と言う。「いいでしょ」と言う。Dが㊤「そうだ、お金がいる」と言う。教師「どうして?」と聞くと、Dは「お金もってない人がいるかもしれないでしょ」と言う。教師が紙を丸く切って渡すと、3や2などかける数字をかいたり、棒や三角のような線をかいたりする。準備ができると㊤「お客さんを呼びに行く」と言って教師と一緒に旗をもって年長、年中組に「飴屋さんです。来てください」と呼びに行ったり、教師がお客を案内すると㊤<u>お金もってないお客にお金を配ったりする</u>。片付けの時間になり、Dが紙に何かかいているので教師が「なんてかいてあるの?」と尋ねると、Dは「あめやさんはおしまいです“ってかいてあるの。だってもうおやすみな。この下に”もうしわけございません“ってかいて」と言う。教師はDの言う通りにかく。</p>			
<p>考察 (キーワード) ㊤幼児理解 (知る、気付く、真似、やってもらったことをもとに考える) 年長児の食べ物屋で看板やメニューなどを見た経験から、紙にかくことで伝えることができること知り、飴屋さんがあることを知らせたくて看板をつくらうと教師に頼んだり、閉店だということを知らせたくて自分なりに看板をかいたりしている。また、年長児にお金をつくってもらったことから、“お金を持って来てない人に渡そう”“お金が必要だ”と考え、教師につくるよう頼んだり、自分がかかる数のような形をかいている。 ㊤援助のポイント (知らせる、思いを形にする) 文字が何か伝える手段としてあることに気づいていけばと、指をさしながら読んだり、どうやってかいてあるか分かるように知らせながらかいたりつくったりしていく。幼児たち同士、お互いの思いややっていることが分かるように声をかけ、思いが形にできるように支える。 ㊤環境の構成のポイント (扱いやすい材料を準備する) 年少児が作りやすいお店の道具を準備しておいたり、お金の形に紙を切っておいたりして自分たちでもお店屋さんができるような材料の準備をしておく。</p>			

(事例提供 山口大学教育学部附属幼稚園)

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚			
2016年10月27日(木) 28日(金)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「水族館を開いて他のクラスの友達を呼ぼう」			
<p>Aが①「水族館開きたい。部屋を水槽のようにして花組さんとかを呼びたい」と言う。教師は水色のカラーポリ袋を繋ぎ合わせて水槽をつくりながら、「先生が水槽つくるから魚をつかって」と言う。幼児たちは魚の図鑑を持って来て見ながらかこうとするが、「難しい」と言うので、教師は魚の形に切って渡したり一緒にかいたりする。数人が加わり、魚をかいたり教師と一緒に水槽をつくらしたりする。魚を数匹貼った水槽が一つでき、それを天井から吊るしたところで片付けとなる。降園時、Aが「明日水族館をします」と皆に話し、教師が幼児たちの考えを説明すると、「入れて」「熱帯魚コーナーつくる」「深い海の魚も」「チケットがいる」などと口々に言う。教師は、「先生は水槽をたくさんつかって、いろいろな魚やチケットがつくれるようにしておいたらいいんだね」と確認する。</p> <p>翌日、画用紙、魚をかたどった紙、熱帯魚の塗り絵などを用意しておく、多くの幼児たちが描いたり塗ったりして魚をつくる。教師がつくっておいたカラーポリ袋の水槽を天井から垂らしていくと、つくった魚を水槽に貼りつけていく。次第に水族館らしくなってくると②「花組を呼ぼう」③「チケットがいる。書いて、いっぱいいるよ」と幼児たち。教師は、④用意しておいた「すいぞくかん かぜ1」とたくさんかいた紙を幼児たちに渡して切るように言う。「これを切ったらいいん？」と幼児たち。教師は、「そうよ。⑤みんなが『いっぱいいる』って言うと思って、いっぱい字を書いといたんよ」と答える。ほどなく多くのチケットができる、⑥数人で年少クラスに配りにいく。</p> <p>Bは「何時から開く？」と教師に尋ねる。教師が「10時くらいはどう？」と答えると、「やっぱり9時50分にして」と言い⑦「すいぞくかん えいぎょう じ ふんから」とかいた紙に9と50を書き込み、ドアに貼る。</p> <p>Cは⑧紙で矢印の形をつくると教師のところを持ってきて、矢印の上に「『すいぞくかん』ってかいて」と言う。教師がそのようにかくと喜んで入口の窓に貼りに行くが、⑨貼らずに戻って来てもう一度矢印をつくり直し、「もう一回かいて」と矢印を教師に渡す。教師が同じように「すいぞくかん」とかくと、さらに⑩もう一度矢印をつくり直して、「反対だった。もう1回かいて」と言う。教師が⑪「こっち向きでいいの？」と確認すると、⑫「ちょっと待って、ええっと」と窓の方を向いて向きを確認し、「あ、違ったこっち向き」と矢印の向きを変えて教師に渡して「ここに書いて」と言う。できあがると、満足そうに⑬入口の窓に貼っている。</p>			
			
			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>①幼児理解 (気付く、考える、知らせる、示す) 水族館に招くにはチケットが必要で、多くの人を呼ぶには多くのチケットが必要だと考えている。また貼り紙や矢印の働きにも気付いており、開始時間をかいて知らせたり、矢印と文字で入り口の場所を示そうとしたりしている。</p> <p>②援助のポイント (認める、確認する、支える) チケットや貼り紙、矢印などの役割に気付いて使おうとする姿を認め、必要な情報をかいたチケットを示したり、矢印の方向を確認したりすることで、適切に使えるように支える。</p> <p>③環境の構成のポイント (場や空間、楽しめる関係づくり) 場所や順路などをかいたり知らせたり、チケットを使ったりする必要性が生じるように、場や空間を使う。他クラスの友達ともかかわりを楽しめる関係をつくっておく。</p>			
(事例提供 山口大学教育学部附属幼稚園)			

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚			
2016年10月24日(月) 25日(火)	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「お芋レストランをしよう」			
<p>10月24日(お芋レストラン前々日)</p> <p>㊤教師「農場で掘ってきたお芋を料理して年下のクラスに配ったけど、今度は食べに来てもらおうと思いますが、どうですか？」A「レストランってことね」B「それなら名前を決めないと」教師「どんな名前がいいか考えてみる？」C「お芋レストランは？」D「お芋いっぱいレストラン！」A「本当に食べられるお芋レストラン！」㊤教師「どんな名前がいいか考えておいてね。隣のクラスと一緒にするから、相談しようね」</p> <p>㊥E「ねえ、飲み物も出そうよ、梅ジュースはどう？」教師「いいねえ、梅ジュースももう自分たちでつくれるからね」E「レストランは飲み物もあるからね」教師「そうだね、レストランには食べ物も飲み物もあるね」F「私は料理を配る人がいい」G「私(お芋を)切りたからつくる人がいい」A「受付もあるよ。僕は受付つくろうかな」㊥C「それならチケットもいるよ。私がつくろうか。そうだ『お芋レストランに来てください』ってかこう」BGH「それじゃあ、私も字がかけるから手伝うよ」「私も」A「チケット配りをする人手を挙げて」と尋ねると、クラスのほとんどが手を上げる。教師「それじゃあ、明日から準備しようね」</p>			
<p>10月25日(お芋レストラン前日)</p> <p>登園してすぐにAは紙に「やきいもほんものです」とかいて、空き箱に貼り、それを小さなテーブルに置き、登園した友達に見せる。教師「もうできたの。明日が楽しみだね」Eが登園するとAは自分がつくった受付の場に連れて行き見せる。A「もう受付できたよ。見て見て！」E「梅ジュースもあるんだよ。梅ジュースもかかないと。僕がかこうか？」A「大丈夫自分でかけるから」とマジックで余白に「うめじゅうす」とかく。Eはそれを確認しうなずく。</p> <p>CはAたちの様子を見て、友達を誘う。㊥C「それじゃあチケットつくとね。私つくるね。たくさんつくといけないから手伝ってよ」B「何てかく」C「『おいもれすとらんがあります』はどうかかな？」B「分かった。絵もかこうかな」Bはチケットにお芋の絵をかく。C「それいいね。そうだチケット入れもいるね。箱探してくるよ」C『おいもれすとらんのちけつと』と紙にかき、それを探してきた箱に貼る。C「チケットはこれに入れてね。やっぱりマジックでかこう」Cはマジックで「ちけつといれ」とかき、横にお芋の絵をかく。</p> <p>B CGHたちが集まりチケットをつくる。G「何か腕が痛くなってきた」B「私も、何枚できたかなあ」H「私が数えようか」㊤教師「花組(年少児クラス)は23人よ」Hはチケットを数える。H「花組の(数)はあるけど、風組(年中児さん)のもいるでしょ」㊤教師「隣のクラスで看板をつくっているからお知らせして回ってもいいんじゃない。A君はポスターもつくっているよ」と言い、Aを呼びポスターを見せるように促す。A「これがポスターよ」㊤教師「これでお知らせするんだよね。チケットが全員分ないんだって」㊥A「チケットもってなくても入れてあげる？」B「もっている人がいたら一緒に入れるってことにする？」A CGH「いいねえ、そうしよう」と言う。</p>			
<p>考察 (キーワード)</p> <p>㊤幼児理解(体験を生かす、受け入れる、楽しみにする)</p> <p>教師からのお客を招く提案を受け入れ、自分たちで進めようと楽しみにしている。お店に必要なものとして、これまでの体験を生かしてチケットやポスター、看板などを使うことを思い付き、自分たちが伝えたい相手のことを考えて文字や絵、記号を使い工夫しようとしている。</p> <p>㊤援助のポイント(機会をもつ、提案する、果たせるよう支える)</p> <p>教師がお客を招くという共通の目標を提案し、お互いの考えを出し合う機会をもつことで、それに必要なものに気付けるように向け、自分なりの役割を見つけ果たせるように支える。</p> <p>㊥環境の構成のポイント(視覚的に分かりやすい場の配置)</p> <p>自分たちがこれまでのお店屋ごっこなどの遊びで使っていた材料や用具を用意する。役割や準備しているものごとに活動の場を分け、役割やつくっているものが視覚的に分かりやすいように場の配置を工夫する。</p>			



言葉による伝え合い

2016年5月

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「せんせいパーティーしよう」

Aは年長の兄がおり、入園当初から兄やその友達と、積み木の部屋で過ごすことが多く、同年齢の友達と遊ぶことは少なかった。

①Aが「先生、一緒にパーティーしよう」と教師を誘ってきた。②「いいね。どこでパーティーするの?」と尋ねると、①「先生、積み木の部屋に行こうよ」と答えた。②教師は、「いいね。おもしろそう」と答え、周りにいた幼児たちに「積み木の部屋でパーティーするんだって、みんな行かない?」と声をかけた。「行く」「私も」と興味をもつ幼児もいれば、今まで遊んだことがない積み木の部屋に不安を示す幼児もいたが、一緒に①積み木の部屋に行った。



積み木の部屋に行くと、それぞれが、好きな色や形の積み木を選び、運んで並べていた。積み木を椅子に見立て、座っている幼児もいる。

①Aが「パーティーは机、はい、パーティーは机」と直方体の積み木を選び、友達が座っている中央に置いて机にした。②教師が「他に何かいるかな?」と尋ねると①「ころころ(低い円柱の積み木)がいる」「ケーキがいるよ」



「ケーキがないよ」と丸や三角の形にこだわって積み木を運んだ。②教師が「パーティーのケーキだね」と確認すると、①「(ケーキは)冷蔵庫にあるわよ」と冷蔵庫に見立て積み木を置いた。②教師が「ケーキはどこに置いたらいいですか?」と尋ねると、①「ここがテーブルだよ」と言った。その後も②教師が「テーブルクロス使う?」と聞くが、反応はなく、①幼児たちは「味噌汁ケーキですよ」「チーズケーキもあるよ」と次々に思いついたケーキの名前を言った。②教師が「おいしいね。他にもある?」などと聞くと、ますます会話は続いた。

数日後、①Aが「みんな一緒に積み木の部屋に行こうよ」と友達や教師を誘い、たくさんの積み木を並べてお医者さんごっこが始まった。また、別の日には砂場で水、砂を使ってケーキとジュースをつくり、「先生、パーティーするから来て」と誘ってきた。

考察 (キーワード)

①幼児理解(目的をもつ、イメージを共有、同じ遊びをする、安心、言いたいことを言う)

Aは自分がしたい遊びが明らかである。Aをはじめ、他の幼児もよく知っている「パーティー」という言葉のイメージを共有し、言葉を発したり、積み木を見立てたりして、ごっこ遊びを楽しんでいる。はじめAは教師だけを誘っていたが、友達とのやりとりや同じ遊びを楽しんだ体験から、後日、友達を誘ったり、いろいろな遊びに発展したりしている。

②援助のポイント(友達とつなぐ、一緒に遊ぶ、共感)

教師が周りの友達を誘うことで、Aのしたい遊びが広がっていき、友達と一緒に遊ぶきっかけをつくった。一緒に遊びながら、幼児たちの言葉やイメージをつないだ。

③環境の構成のポイント(新しい遊び場の提示、使いやすい積み木の種類・数、安心)

Aにとっては好きな場所の一つの積み木の部屋だったが、他の幼児たちにとっては保育室とは違う新しい遊び場となった。幼児たちにとって扱いやすい積み木、十分に遊べる広さ、自分たちだけ(年少児)で安心して遊べるような空間づくりを心がけた。

(事例提供 鳥取大学附属幼稚園)

言葉による伝え合い

2016年12月

3歳児～4歳前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「どっちがいい？」

④年中になってからAは、分からないことがあると、教師と一緒に図鑑や本で調べることを経験している。⑤年長組からカメの冬眠に関する図鑑を借り、教師と図鑑を見て冬眠の方法を調べた。そして、「落ち葉を入れる」「水温を上げる」の2つの方法があることを知った。教師が「気温が15度になると冬越しを始めます」と読むと、Aは「まだ、17度くらいだからね」と答えた。教師が『12月には玄関や軒下にケースを置きます』と書いてあることも伝えると、「ぼくたちもみんなやらなきゃいけないね」と答えた。Aにどうしたいのか尋ねると、「葉っぱを入れたい」とはっきり自分の思いを口にした。⑥教師は「みんなに聞いてみたらどう？」と尋ねると、「いいねえ」と答えた。⑦早速、近くにいた友達に「カメ吉が冬眠するときどうする？」と聞いたが、唐突な質問に友達は聞いてくれない。Aは保育室からカメの冬越しについて書いてある本を持って来た。2つの方法がかいてあるページを見せながら、「カメが冬眠するためにどっちがいい？」と再度質問すると、Bは「こっち」と温める方を指した。Aは「カメ吉のことだよ。こっちはあったかくする方法、こっちは落ち葉。やっぱり葉っぱを入れた方がいいっぽい。だってウサギみたいにダンボールかけられないから、落ち葉がいいかなって思って」と言い、自分のやりたい方を理由をつけて説明した。「わかんない」と言って逃げる友達、遊びに夢中で聞いても答えてくれない友達もいる。けれども、Aは逃げる友達を追いかけ、聞いてくれない友達には根気よく聞いていく。



「○○ちゃん、カメが冬眠するのにどっちがいい。葉っぱとこっち（本を指さす）」

⑧しばらくして教師は、「今のところどう？」と尋ねた。「こっちの方が多い」と落ち葉の方が多かったことを報告する。Aは「今は、こっちが4人で、こっちは5人か6人」と数を指で示していたが、人数が多くなると、紙に人数を記入した。それから、クラス全員の考えを聞いて回った。⑨教師はAと相談して、集いでアンケートの結果をみんなに伝えることにした。

⑩集いで、教師は「Aちゃんがお話したいことがあるんだ。聞いてくれる」と投げかけた。⑪Aは「最初に本を見せてあげるね。そうしたら、分かるかもしれない」と冬眠について書いてあるところを読み始めた。そして、「葉っぱが16人、あったかいが15人。どっちかに決めたいんだよ。それにね、どうやってあったかくするの？」と、結果を伝えるとともに温める方法は難しいことも訴えていた。



週末9度になることをニュースで知ったAは、金曜日に「葉っぱを集めてください」というポスターをつくり、友達と一緒に葉っぱを集め、水槽に葉っぱを入れ、カメを冬眠させた。

考察（キーワード）

①幼児理解（伝えたい思い、具体物、友達に分かるように、みんなの意見を聞く）

自分の言いたいことを友達に伝えたが、分かってくれないことを感じると、本など具体的なものを使ったり、言い方を変えてみたり、理由をつけたりして思いを伝えようとしている。説明の仕方が何のために、どのような方法があるのか、友達に分かるように話し方を変えている。一方、自分の考えを押し通そうとするところもある。

②援助のポイント（一緒に調べる、みんなで共有する、幼児同士をつなぐ、見守る）

教師も一緒に調べる。Aに自分一人の考えでなく、友達と一緒に考えてほしいと思い、組のみんなに聞くことを提案する。活動の途中経過を聞いたり、見守ったりして、活動が継続できるようにする。

③環境の構成のポイント（生き物への愛着、図鑑の準備、みんなに伝える場）

カメの世話を通して、カメに関わる機会を設け、身近な存在として感じられるようにする。疑問に思ったことを調べることができる図鑑を用意する。集いの時間も活用し、みんなで共有できる時間を設ける。

（事例提供 鳥取大学附属幼稚園）

言葉による伝え合い			
2016年10月31日	3歳児～4歳前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「なんだか多いなあ」			
<p>4月当初より年長クラスの保育補助であった教師②が、10月末で本園を退職し、保育園に勤めることになった。クラスでは降園前のひととき、お別れの会が開かれた。教師②は年長児が年少クラスの時にも保育補助として幼児たちを担当している。</p> <p>教師①が「みんなも知っていると思うけど、教師②と今日でお別れすることになりました。教師②に何かお話ししたいことがある人いますか？」と、㊤全員が自分の言葉でお別れを伝えてほしいと思い、㊦お別れの会を開く。</p> <p>㊦Aは「ほしさん（3歳児）の時から遊んでくれてありがとう」とこのような時にどんな言葉を言えばよいのか理解し、一番に話す。それを聞いたBは「ほしぐみの時から遊んでくれてありがとう」とAと同じことを言う。続いてCは「スーパーで見かけたら声をかけます」と以前にスーパーで教師②に会ったことを思い出して話す。Dは「サッカーをしていた時、ボールが来たよって教えてくれてありがとう」と自分の言葉で具体的によく分かるように話す。㊧教師①は「Dちゃんは、いつもどこどこでとか何をしている時とか詳しく話してくれるからよく分かるね」とDの話し方のよいところに幼児たちが気付けるように、Dの話し方を具体的にほめる。</p> <p>E「今日一緒に遊んでくれてありがとう」F「一緒に遊んでくれてありがとう」と同じような発言が続く中、次々に手を挙げる友達につられ手を挙げたGは指名されるが、言葉が出ない。㊨それを見たCは「言えそうですか？」とGを気遣う言葉をかける。㊩教師①は「Gくん、後で言う？」とGが困っているのを察してもう一度機会を与える。</p> <p>I「一緒に遊んでくれてありがとう」C「なんだか（一緒に遊んでくれてありがとうが）多いなあ」と友達と同じようなことばかり言うのでもっと他のことを言えばいいのと思ったことをつぶやく。それを聞いたJは「一緒に葉っぱのスカートをつくってくれてありがとう」と違う言葉を言い、Jの言葉からKも「お城の国をつくってくれてありがとう」と自分と教師②の関わりを思い浮かべ、違う言葉を言う。Gも手を挙げ、「松林で遊んでくれてありがとう」と言う。㊪教師①は「Gくん、ちゃんと言えたね。教師②と松林で遊んだんだね」とGが再び手を挙げ、自分の言葉で発言したことを認め、他の幼児たちにも伝える。</p>			
<p>考察（キーワード）</p> <p>㊦幼児理解（自分の言葉で話す、相手の言葉の意味を理解し話す、相手を気遣う） 幼児たちは「お別れ」の意味が分かり、神妙な顔をしてお別れ会に参加している。このような時にはどんな言葉を言えばいいのか理解しているが、「遊んでくれてありがとう」と友達と同じ言葉が多い。友達の言葉を聞きながら、次第に自分と教師②との関係を思い出し、友達と違う言葉で伝えている。うまく言えない友達が気遣う姿も見られる。</p> <p>㊧援助のポイント（具体的に伝える、肯定する、待つ、共感） 教師が分かりやすく伝えるためにどのような言い方をすればよいのかを具体的に話したことで、はじめは簡単な言葉であったが、説明の仕方や友達の言葉を聞いて次第に具体的に話すのがよいことなどが分かるようになった。自分の思いを友達と同じ言い方ではなく自分の言葉で伝えようとする姿につながった。幼児の発言を肯定し、うまく言えなくても無理強いをせず、次の機会を与え認めるようにした。自分の言葉で伝えることを大切にした。</p> <p>㊨環境の構成のポイント（特別な時間と場を設ける） 教師②の退職の日にクラス全体でお別れ会をし、その中で一人一人が自分の思いを言葉で伝える場を設けた。心を通わせる場を設けることを意識した。</p>			



（事例提供 鳥取大学附属幼稚園）

言葉による伝え合い

2016年10月4日

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

接続

「あんな、幼稚園には園長先生がいて・・・」

2回目となる年長児と1年生との交流。1回目の交流から少し間があいたが、①1年生は年長児が小学校へやってくることをとても楽しみにしており、前回と同じグループで校内を張り切って案内している。②校長室では校長先生も幼児や児童を温かく迎え入れてくださる。



③1年生にとっても普段は入ることのない校長室のため、④少し緊張気味の児童も見られるが、年長児と一緒に室内を興味深そうに見回したり、真剣に校長先生のお話を聞いたりしている。

Aは、同じグループの年長児Bに、①「あんな、幼稚園には園長先生がいて、園長先生の部屋は園長室っていうんだろ？だから、小学校には校長先生がいて、校長先生の部屋は校長室っていうんだよ」と分かりやすく説明している。②それを聞いていた教師は、「Aくん、すごくよく分かったよ。ありがとう」とお礼を言う。③年長児を思いやり、自分の言葉でていねいに優しく説明しているが、1年生としての優越感、満足感、自信も感じられる。



一方、同じグループの1年生Cは、④年長児が校舎内で迷子にならないようにBの手をしっかりとつないでいて、校長室にいる間もその手を離さない。その様子から、年長児に対する優しさ、小学校を案内するという責任感が感じられる。

考察 (キーワード)

①児童理解(期待、張り切る、緊張、言葉で説明、優越感、満足感、自信、責任感)

幼稚園との交流に対する児童は期待とともに緊張も感じている。幼稚園と小学校、園長と校長、園長室と校長室という幼児にも分かりやすい対比を使って説明している。幼児に対する思いやりだけでなく、自分はもう小学生なんだ、小学校のことはよく知っているんだという優越感のようなものを感じている。

②援助のポイント(1年生に任せる 見守る、言葉で認める、緊張感を解く)

必要に応じて援助をするようにし、できるだけ幼児と児童の関わりを見守るようにした。1年生の優越感や満足感を受け止め、1年生を認める意図でその説明の仕方に関心したことをその場で伝えた。幼児がうまく感じ取れないこと、言葉にできないことを伝えるようにした。

③環境の構成のポイント(学校と園との協力、継続した関係作り)

1年生と年長児との関係が深まるように、年間を通して同じグループで活動するようにしている。また、小学校と幼稚園の協力体制をとり、交流の前後に話し合いをもって幼児と児童の様子を共有する。

(事例提供 鳥取大学附属幼稚園)

豊かな感性と表現			
2017年4月20日（金）	3歳児～4歳児前半	4歳児後半～5歳児前半	5歳児後半
「入院です」			
<p>A、Bは、他児が既製の聴診器や注射器の遊具を使い医者になって遊んでいる様子を見ており、他児が使っていない時にそっと手に取っていた。そこで㊦教師はカップ、厚紙などの廃材で聴診器や注射器を作って数を増やし、A、Bがしたいと思った時にすぐに手に取ることができるようにした。また、㊧積み木やつい立で病院の待合室やベッドを作って、A、Bが聴診器や注射器を使って遊びたくなるようにしておいた。</p> <p>翌日A、Bは登園すると、㊦病院のコーナーに入り、教師が用意した手作りの聴診器や注射器を手にとった。その様子を見て、教師は病院の椅子に座り「先生、お腹が痛いです」と二人に声をかけると、照れくさそうに笑って教師を見た。㊨教師が「お腹を診てくれませんか」とさらに声をかけると、㊦Aは聴診器を教師のお腹にあてた。教師が「どうですか」と聞くと「よくないです」とAは答えた。「どうしよう」と教師が驚くと、㊦じっと見ていたBが教師の腕に聴診器をあてた。教師が「腕はどうですか」と聞くとBは「だめです」とほほえんで答えた。㊨教師が「入院しないとだめかなあ」と呟くと、二人は「そう、入院です」と言って教師をベッドに寝かせ、㊦うれしそうに「お腹を診ます」「まだ治っていません」と、教師のお腹に聴診器をあてたり、注射をうったりして医者をつもりになって動くことを楽しんだ。A、Bは、教師を診察するところを周りの幼児たちが覗いているのに気付いた。二人は周りの幼児たちを㊦「ここにどうぞ」と中に誘い、教師にしたことと同じように患者になった幼児と、医者になったつもりで遊びを楽しんだ。</p>			
			
			
<p>考察（キーワード）</p> <p>㊦幼児理解（興味・関心、安心、自発性・能動性、楽しさの共有、人との関わり） 気になっていた遊具が手に取りやすい場所にあり、病院らしいしつらえの場を面白そうと感じたことで、A、Bは自分から遊具を手にとったり、場に入ったりしている。教師が患者になって動き話しかけていくことで、A、Bは遊具を使ってみたり話したりして動き出すことができ、医者をつもりで遊ぶことを楽しんでいる。二人は、教師が患者になってやりとりをしてじっくりと関わってくれたことで、病院のコーナーが自分たちの安心して遊ぶことができる場だと感じ、周りの幼児たちを自分から誘っている。</p> <p>㊨援助のポイント（役になって動く、動きを引き出す言葉） 幼児が興味をもって遊具を手にとったタイミングを逃さず、教師が患者をつもりになって話したり動いたりして関わる。幼児がどう動くかよいか分かりやすい、具体的な言葉をかける。</p> <p>㊦環境の構成のポイント（十分な遊具の数、囲われた場、遊びの様子が見やすいコーナー作り、それらしいしつらえ） 幼児が興味をもった遊具の数を増やしてすぐに手に取れるようにしたり、つい立で囲われた安心できるコーナーを作ったりする。低いつい立を使ったことで、周りにいた幼児たちと互いに見合うことができるようにする。病院らしいしつらえのもの（ベッド、待合室など）があることで、その場で遊びたくなったり、つもりになって動き出したくなったりする。</p>			
（事例提供 愛知教育大学附属幼稚園）			

豊かな感性と表現

2016年6月

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「七夕会で出し物をしよう」

七夕会の出し物で、『ジグザグおさんぼ』の曲に合わせて踊ったり楽器を鳴らしたりすることに決めた。ABCDEは、ポンポンを使った踊りを考えるために集まった。

教師が「どういう踊りにしようね」と投げかけると、Aはポンポンを持って揺らしたり、ポンポンを投げてキャッチしたりした。Bはポンポンを胸の前でぐるぐる回した。教師は「いいねいいね。いろんな動きで踊ったら楽しそうだよね」と受け止めると、5人は互いの動きを見て笑顔で「いいね」と言いながら、しばらくいろいろな動きを出し合った。

①Cが「でもさ、自分の好きなように踊ったらいいのかな？」と言ったので、②教師は「一人一人がバラバラに踊るのか、みんなでそろって踊るのか、ってこと？」と聞き返すと、Cは「そう」と言った。それを聞いた③Dは「お客さんに見てもらうんだから、バラバラじゃない方がいいんじゃない？」と言い、Bは「一緒の方がいい！」と言い、AEもうなずいた。

④教師がホワイトボードに歌詞を書き、⑤「『もりのこみち ジグザグおさんぼ』のところはどうする？」と聞くと、Aは「森の中を楽しく散歩する感じだから、スキップにしたい」と言ってスキップをした。⑥それを見た4人は「いいね」とうなずいた。教師は「じゃあここはスキップにしよう」と言い、⑦ホワイトボードにスキップの絵を描いた。

教師は「次の『ジグザグジグザグ おさんぼさんぼ』は？」と次の歌詞について尋ねると、

Cが「まだ散歩してるから、ここもスキップでいいんじゃない？」と言い、Aも「そうだね」とうなずいた。教師は「そうしたらここまでがスキップだね」と確認した。スキップは舞台の前ですることになったので、教師は⑧ホワイトボードに「ぶたいのまえでおどる」と書いた。教師は「『あのいしねらって』のところは？」と尋ねると、Eはポンポンを床に置き、人差し指を立ててポーズをとって見せた。⑨教師は「指で石を指しているって感じだね。いいね」と言うと、⑩Aも「ああ、いいねえ」とうなずいた。



⑪教師が「ここまでで一度最初から踊ってみようか」と提案すると、5人は「やるやる！」と喜んで言った。Aは「僕が先頭ね。みんな、ついてきて」と言った。教師が『ジグザグおさんぼ』の曲を流すと、⑫Aを先頭にして、5人は張り切ってスキップをして踊り始め、互いの動きを見ながら決めたところまで踊った。踊り終わると、⑬A「いいね」C「いいじゃん」と言い、5人は互いの顔を見て喜び合った。



考察 (キーワード)

①幼児理解 (思いの共有、仲間意識、賛同し合う、手応え、満足感)

ABCDEの5人は、一人の幼児の投げかけ (疑問) をきっかけに“5人で一緒に踊りを考えよう”“5人で動きをそろえて踊りたい”という思いを共有した。教師に歌詞で問いかけてもらったことで、5人は歌詞から動きをイメージし、互いの考えた動きに賛同し合いながら振り付けを決めていった。そして、5人で決めた踊りを、互いの動きを意識しながら一緒に踊り友達と一緒に一つのものを作り上げていく手応えや面白さを感じている。

②援助のポイント (受け止める、焦点化、問いかける、提案する)

幼児の考えを分かりやすく言葉にして受け止め、友達が理解できるようにする。教師が歌詞を区切ったり話し合うことを絞ったりして問いかけ、幼児たちが歌詞からイメージしやすくなり“みんなで考えよう”という気持ちをもてるようにしたりする。曲の区切りがいいところで一度踊ってみよう提案し、友達と一緒に考えたものが素敵なものになってきたという実感がもてるようにする。

③環境の構成のポイント (視覚化、共有)

ホワイトボードに歌詞や動きをかくことで、話し合いたいことや決まったことを視覚的に分かるようにし、友達と共有できるようにする。

(事例提供 愛知教育大学附属幼稚園)

豊かな感性と表現

2017年11月

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

「鳴ったらみんなで倒れるってことにしよう」

10月下旬から、8、9名の幼児たちが①姫やゾンビなど好きな役の衣装を作って身に付け、園内を練り歩く『パレードごっこ』をしていた。②ハロウィンの曲を用意すると、歩き終えたAが「パレードをした後にこの曲でショーがしたい」と言った。③舞台のある遊戯室に行き、教師がどんなショーにしたいか聞くと、Bが「みんなで踊りたい」④Cが「ゾンビは驚かせたいから最初は隠れたい」と言った。Cの言葉を聞いてゾンビ役の子供はすぐに隠れに行った。⑤残ったDが「何か鳴らす？」とつぶやいたので、教師が「何か鳴らすって？」と聞き返すと⑥Dは「隠れている子供が出てくる合図」と言った。⑦教師が「いい考えだからみんなに言おう」と誘い再び子供たちを集めると、Dは「合図の音を鳴らしたらゾンビが出てくるっていうのは？」と自分の考えを言った。Cは「いいね。じゃあDくん合図鳴らして」と答え、みんなはうなずいた。Dが急いでハンドベルを持ってくると、Aが「曲をかけるよ」と声をかけ、姫や魔女役の子供たちは舞台上、ゾンビ役の子供たちは遊戯室のカーテンや積み木の裏で待機した。⑧曲が始まると、Dがハンドベルを鳴らし、隠れていた場所からゾンビ役の子供が走って舞台に出て来た。⑨教師が「わあ！ゾンビが出てきて驚いた」と言うと⑩幼児たちは顔を見合わせてうれしそうにした。思いのままに踊った後、Eが「みんなで一緒に踊りにした方がいいんじゃない？」と言った。教師が「運動会でそろえたらかっこよかったもんね」と言うと、子供たちは⑪「でも、ゾンビとお姫様は違う動きでしょ」「ばらばらのところと、一緒のところをつくったらいいんじゃない？」「みんなで倒れるといいと思うな」「ゾンビって倒れても生き返るから何回も倒れよう」と考えを出し合った。⑫教師が「みんなで倒れたらびっくりすると思う」と言うと⑬Fが「ハンドベルを鳴らしたらいいんじゃない？」と言い、Gが「鳴ったらみんなで倒れるってことにしよう」と言った。Aが「踊りはこうがいい」と身振りを交えてやってみせると、みんなも一緒に動いて「これなら簡単」と言った。踊りながらHが「途中で後ろも向きたいな」と言ったが、子供たちに聞こえていなかったため⑭教師が「Hちゃんが後ろ向きもやりたいって言っているよ」と知らせると「いいね」と言って子供たちは後ろに向きを変えて動いた。その後も相談し、ベルの合図で舞台に出てきた後は自由な動きをする、再びベルの合図が鳴ったら倒れたり起き上がったたりする、曲のサビの部分で同じ振付をするということに決まった。子供たちは「やってみるから先生はお客さんで観ている」と言い張り切って位置についた。⑮Dはみんなの方を見て倒れる合図のベルを鳴らし、D以外の子供たちは自由に動きながらもDがベルをいつ鳴らすのか注目して、ベルの合図で一斉に倒れた。自分たちで決めた流れでショーができると⑯「お客さん呼ぶ」と得意気に言った。



考察 (キーワード)

①幼児理解 (思いの共有、協同性、役割、表現、伝え合い、手応え、満足感)

役のイメージで動きを考えることを楽しんでいる。自分たちのアイデアを実現させるためにはどうするとよいか考えている。教師の反応や仲間の様子から自分たちで考えた演出に手応えを感じたり、それを仲間と共有したりして、仲間と一緒に創造する面白さを味わっている。そして、一段と意欲的にショーについての考えを出し合うようになっていく。みんなで考えた役割や動きを意識してショーをし、上手くいった満足感を味わっている。

②援助のポイント (後押し、幼児の言葉を補う、認める言葉)

幼児が考えを伝えられるように後押しする。幼児の考えが友達に伝わっていない時には、分かりやすい言葉を補い、友達に考えが伝わるようにする。幼児の考えた表現や演出を認め、自信をもって考えを出したり、考えたことが上手くいった手応えを感じたりできるようにする。

③環境の構成のポイント (季節や幼児のイメージに合った材料や道具、話し合いの場作り)

なりたい役に必要な衣装や小物を作れる材料や場を用意する。季節や行事の曲を用意する。ショーのイメージが湧きやすく、考えたことをすぐにやってみることができる舞台のある遊戯室で話し合いをする。自分のイメージや考えを伝えられるように話し合う場をつくる。

(事例提供 愛知教育大学附属幼稚園)

豊かな感性と表現

2015年11月12日(木)

3歳児～4歳児前半

4歳児後半～5歳児前半

5歳児後半

接続期

「かぜをうけてはしれ ウインドカー」

「ウインドカー【写真1】」は、風の力で走る車で、団扇であおいで走らせる。①風を受ける帆の部分は取り外しができ、様々な材料を用いて、大きさや形に工夫を凝らして作成することができる。児童は、身の回りにある物を利用して、思い思いの帆を作り、自分だけのウインドカーを作る。その後、友達と速さを競い合いながらウインドカーを走らせて遊ぶ。【写真2】



【写真1 ウインドカー】

授業の始めに、②教師が児童にウインドカーを走らせて見せると④「わあ、すごい。走った、走った」「僕もやってみたい」などという声が聞かれた。そこで、全員が同じ大きさ、形の帆でウインドカーを作り、みんなで走らせて遊んだ。そのうちに、児童同士でウインドカーの競争が始まり④「もっと速く走るウインドカーを作りたい」という思いが、児童たちの中に生まれた。③④次の時間からその思いを実現させるべく、身の回りにある物からいろいろな材料を選んで、大きさ、形を工夫しながら帆を作ることにした。



【写真2 走らせて遊ぶ】

活動を続ける中で、児童たちが試行錯誤しながら主体的にすることができるように、どんなことを意識しながら工夫するとよいのか話し合う活動を取り入れた。まず、④工夫して作ったウインドカーを走らせる中で得た気づきの中から『みんなに知らせたいスペシャルな発見』をマグネットシートに記入し、全員が発表した。④④発表した後にマグネットシートをグループ化して貼り、気づきを分類整理した。【写真3】そして、グループ化された気づきを基に話し合うことで、「みんな、いろいろな材料で帆を作っているんだね」「帆の大きさ、形だけでなく団扇のあおぎ方を工夫すると、速く走るようになるんだね」などといった新たな気づきを得ていった。



【写真3 気づきの発表】

その後④「もっともっと速く走るウインドカーを作って、友達と競争したい」と新たな思いをもってウインドカー作りに取り組んだ。

考察 (キーワード)

①児童理解(興味・関心、意欲、工夫、気づき、探究、イメージ、目的をもつ、繰り返し)

ウインドカーが走る様子を実際に見たことで「面白そう」「やってみたい」と心が動き、意欲をもっている。そして、自分のウインドカーができ走らせて遊ぶ楽しさから、それを使って友達と一緒に遊ぶ方法を考えようとしている。また、友達と繰り返し競争して遊ぶことで、もっと速く走るウインドカーを作りたいという思いがわいてきて「帆の材料」「帆の大きさ・形」「団扇のあおぎ方」などを自分なりに工夫しようとする姿が見られる。その後、友達の工夫や気づきを聞いて刺激を受け「もっと速く走るウインドカーにしたい」と目的をもったり「こんな風にしたい」と具体的なイメージをもったりして取り組もうとしている。

②援助のポイント(モデリング、投げかけ)

教師がウインドカーを作って走らせる姿を見せたり、自分もやってみたいと心が動いたタイミングを捉えて投げかけ、いろいろな材料や道具を準備したりして、児童たちが主体的に活動できるようにする。

③環境の構成のポイント(保護者への依頼、教材準備、板書の工夫)

学習のねらいや活動の内容について、事前に保護者へ連絡し、児童が身の回りの物を活用する際の協力を依頼しておく。また、児童が大きさや形を工夫したり試行錯誤したりできるようないろいろな材料や道具を豊富に準備しておく。児童の工夫や気づきが視覚的に分かりやすくなるような板書にし、児童同士が互いに刺激になったり取り入れ合ったりできるようにする。

(事例提供 愛知教育大学附属小学校)

参考文献

- 秋田喜代美・淀川裕美(2017) 『「保育プロセスの質」評価スケール—乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために』 明石書店
- 国立大学法人 神戸大学(2017) 「幼児期に育みたい資質・能力を支える指導方法と評価に関する研究—幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の観点から—
- 国立大学法人 鳴門教育大学(2015) 「幼児の科学的思考を支える非認知的能力の発達の様相—好奇心・やり抜く力・共同的感性の観点から—
- 国立大学法人 お茶の水女子大学(2015) 「幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の観点から—」
- 国立大学法人 千葉大学(2014) 「多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める実践研究」
- 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領 小学校学習指導要領 一全文一 初等教育資料4 東洋館出版社 4月号付録
- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課(2017) 幼稚園における「幼児理解に基づいた評価」の実施について 初等教育資料2 東洋館出版社 pp. 88-95
- 無藤 隆(2017) 『幼児教育要領ハンドブック 2017年告示版』 学研教育みらい
- 無藤 隆(2017) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とは? 園のリーダーのために保育ナビ11 フレーベル館 pp. 8-21
- 内閣府、文部科学省、厚生労働省(2017) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針、中央説明会資料(幼稚園関係資料)
- 鳥取大学附属幼稚園(2014) 平成28年度研究報告第35集「幼児期の学びをつなぐ～「活動」と「ことば」に着目して」
- 鳥取大学附属幼稚園(2012) 平成26年度研究報告第33集「学びをつなぐカリキュラムの創造Ⅱ～遊びの充実を通して～」